

# 地名研究会報

第49号

平成8年6月2日

鹿児島地名研究会

平成十二年天古掛  
米代人の直系をさむ子  
・大屋根の中央にあらうござ子。やく  
・すまひづの監修する書籍回り合はれの千葉

I. 第49回例会 平成7年6月4日(日)

(出席者) 青柳俊二・池田 純・大田照夫・納 栄蔵・霧島一浩・坂本 誠・浜崎盛雄・

平田信芳・二見剛史・鉢之原矢七・米原正晃(計11名)

II. 廃藩名勝考読会 P.169 ~ P.171

(問題となった地名および事項) 至三四町・信有郷・種子島と屋久島・鉄砲と火薬・多祢人への授爵・  
古代の航路・稻荷市

## 至三四町

二見 170ページの馬毛島のところに南北十八町、東西八町。その次は至三四町と読むのですか三十四町と読むのですか。

平田 「至」というのは、周囲が三十四町ということじゃないですか。

二見 「十」を入れたり入れなかったりするのは  
平田 あゝそうか。あるいは至三四町。そこまで  
は考えませんでした。南北の距離が十八町、東西が  
八町。それぐらいの島ですよね。

二見 三十四町というのは、じゃー、三~四町と  
読むのですか。

平田 あるいは三四町に至る。そうですね、その  
辺は「十」が皆入ってますよね。三十三歳とか五十八歳。うーん、ちょっと判りません。「至」という  
のは周囲が三十四町ぐらいに理解していたのですが誤解ですかね。

青柳 馬毛島というのは、どんな形をしているの  
ですか。

納 大体「円」です。

二見 たまたま「十」が脱けたのでしょうか。

平田 直径十町ぐらいだとすると、3.14を掛けたら三十数町になりますよね。だから、周囲だろうと理解したのですけど。

於教職員互助組合会館和室

納 十八町といえば、2知ぐらいですね。それよりは、ふてはね?

平田 南北十八町、東西八町でしょう。平均したら十町ぐらいの直径になるから、周囲三十四町というのは大体あてはまるのじゃないかな。

納 大体一里ぐらいのものです。

平田 そうです。一里ぐらいになります。だから「十」が脱けたと考えれば合理的に説明できますね  
鉢之原 一里は三十六町でしょう。

平田 三十六町。

鉢之原 昔の電柱と電柱の間が一町ですか。

平田 電柱の間隔ですか。

鉢之原 いや、田地の大きさ。

平田 あゝ田圃の大きさですね。一町は六十間。

鉢之原 田地を数える時と、電柱の時は?

納 電柱は大体40m.間隔ぐらい。

鉢之原 昔と今とは距離がだいぶ違う。昔は長かったですよ。今は短くしてある。

平田 測地尺はそんなに変わらないのですがね。

鉢之原 あれは40m.ぐらいあるんじゃないですか

納 現在の電柱間隔は、大体40m.

平田 電柱の間隔の話ですか。

納 電信柱。

鉢之原 田舎の道を歩く時は、電信柱を数えれば何里か判ると教えられた。

平田 あゝ、なるほど。

納 田圃の中の場合は、50m.以上あります。

#### 信有郷

平田 和名抄の郷名「信有郷」をなんと読むか。和名抄の郷名で「有」がうしろに付くのを調べると地名は二字で表せということで無理に「有」を付けたものがあり、読まないのがあるわけです。そうすると信有(しん)郷と読める。しかしそういう地名では当てはめるのはちょっと無理です。もう一つこれを読むとすると「しなう」という読み方がある。信濃国「しな」と「有(う)」。そうしたら「科(しな)」が生えている所と解釈できる。信濃という読み方がありますから、それを利用して信有(しなう)と読めば栗生(くりぶ)とか麦生(ばくう)などの例もあり、科(しな)が生えている所という地名として解釈ができます。今日は肥後先生がお見えでないですが、科(しな)は屋久島に沢山生えているそうです。そういう地名は当然考えられることになります。

納 「しな」という植物は一体なんですか。

平田 繊維をとる植物らしいです。山に「しな」が生えている所が京都の隣の山科になります。信濃国も「科(しな)が生えている野原」という意味で植物地名になるわけです。信有郷は「しなう」と読めば「科(しな)が生えている所」という地名になり、地名の付き方としても自然だと解釈できます。

#### 多福・益救(種子・屋久)

平田 種子・屋久については前回にも話しましたが、今県が文化庁の事業として歴史の道調査をしており、その3年目が「海の道」になります。その結果が近く刊行されます。その中に書いたレポートになりますが、薩摩国・大隅国・多福国(多福島)の設置というものは遣唐使の問題と結びつくことが明らかになりました。

年表をさしあげてありますが、推古天皇二十四年掖攻島の人が流れ着いた。それから多福島の人が来た、とか。そういうことがあって中央政府が屋久・種子に7世紀に合計4回調査団を派遣しています。何故、調査団を派遣したかというと、新羅との関係が悪化して朝鮮半島沿いに遣唐使を派遣する道が危険になる。そこで南島路というのを開発しなければならなくなつた。掖攻人とか種子島に中央政府が注目して調査団を派遣する展開になるわけです。そして南島路を開拓するわけです。もちろん、この調査団というのは軍隊に守られて来ます。そこで、こちらの隼人たちと摩擦が起きる。抵抗したということで武力で抑えて植民地化する。そして薩摩国・大隅国・多福国を作つて行く、と。それがきちんと分析できました。薩摩国・大隅国・多福国(多福島)の設置は遣唐使の安全な航路を確保する過程の中で創られて来たということです。

そして、8世紀になると船が大型化し、博多を出て五島沖から直ぐ揚子江に向かう航路になって来ますから、南の方はいらなくなつて来る。多福国に人間を置いておくのは負担がかかるというので切り捨てられて行く。それが多福島の廃止につながつて来る。そういう古代の歴史がだんだん明らかになります。

二見 大阪湾から南の方にずっとおりて来るのですか。

平田 いえ、博多まで来る、九州を南に下る。

二見 どっちの海岸ですか。

平田 西海岸沿いに来て、南島をつたって行こうとするわけです。

二見 トルコが邪魔して、ヴァスコ=ダ=ガマが喜望峰を回るみたい。

平田 まあ、それに似たようなものですね(笑)そういう過程の中で薩摩国・大隅国が設置されて行くわけです。

納 そういうのは、あの人もおっしゃっていたようです。島の、あれは誰か、塩一。

平田 塩田さんですか。

納 あの人もそういうことをおっしゃったのを聞いたことがあります。

平田 あゝ、そうですか。

二見 それから、安房(あわ)は?

平田 栗穂を「あんぽ」と読んでも、それは当て字でしょうから。「あんぽ」の意味は判りませんが。

#### 鉄砲と火薬

平田 もう一つ、ここで問題にしたいのは鉄砲のことです。これに書いてあるように『南浦文集』にあるのが鉄砲伝来についての最も古い記事ですが、最近では倭寇が伝えたという説があり、もっと古いのではないかとみられているようです。それから、これは恐らくポルトガルの商人たちが伝えたのでしょうか、南嶋にも例があります。例えば、これは聞いた話ですが、台湾が植民地化して行く過程の中で台湾の人たちが抵抗するわけですね。それを生糞の抵抗とか言ってますけど、台湾の人たちが鉄砲で抵抗するのです。彼らが使つた火薬は、鳥の糞を綿にしみこませて、それに木炭の粉と硫黄を混ぜて簡単に火薬を作るのだ、と。しかも威力があるという話を聞いたことがあります。

納 私も糞をなんとかというのを聞いたことがあります。何の糞かは知りませんが。

鉢之原 その話を聞いたことがある。

平田 日本とは違った系統の火薬の作り方があるということですね。それから鹿児島県には煙硝小屋(えんしや)とか煙硝という地名は沢山あります。ほとんどが火薬を作っていた所です。それから薩摩藩の火薬工場は滝之上にありました。8・6水害でやられましたが、まだ遺構は残っています。もう一つ、敷根に火薬工場があったのです。敷根の火薬工場は私が国分高校にいた時に生徒2人と発掘調査をしま

した。その跡は確かめられたのですけれども、軍艦春日の記録に明治10年3月10日に敷根の火薬庫・鹿児島の砲台を焼き払ったという記事があります。敷根では焼き払った跡はその発掘調査では見つかりませんでした。別の火薬庫だったのでしょうか。

鉢之原 敷根の火薬庫ですね。あそこにガスが出るでしょう。今生きておいやれば百何歳かやんどな。その子供さんが八十歳位ですか、九十歳近くやな。その話は聞かなかつたです。

平田 あゝ、そうですか。敷根においやったとですか。

鉢之原 今生きておいやれば百十四歳ばっかい。

平田 鉄砲だけが話題になるのですが、例えば西之表市の歴史博物館。これは鉄砲博物館としては世界でも一流だと思います。鉄砲の種類を見るために西之表に行くだけの価値はあります。ただハード面の鉄砲だけが集められていて、ソフト面の火薬の研究はおくれているようです。

鉢之原 その点さっきの天然ガスと火薬の関係は。

平田 それは全然関係ない。

鉢之原 そんな話を聞いたことがある。

平田 天然ガスは新しいものです。これは元鹿児島工業試験場長をしておられた黒川達爾雄さんから聞いた話です。薩摩の火薬:煙硝はどうやって作ったかというと、床下のゴミとか便所のまわりの土を集めると、それに硝酸バクテリアが働き、硝酸カルシウムが出来る。それを集めて五月の節句に食べるアク巻きがありますね。そのアク巻きを集めた土にかけるのだそうです。硝酸カルシウムにアク巻きを加えると硝酸カリウムが出来るのだそうです。その硝酸カリウムが硝石。火薬の原料です。これに木炭の粉と硫黄を混せたら火薬になります。

二見 何を混ぜるのですか。図式を書いて下さい。

平田 こういう話は、中学生とか小学生にすると喜ぶと思います。まず硝酸カルシウムが出来るわけ

です。これはどうして出来るかというと、フケとか髪の毛とかそう言った蛋白質に、窒素分の多いものに硝酸バクテリアが働くわけです。バクテリアの仕事で硝酸カルシウムが創られます。そう言った床の土を集めて、これにアク汁を加えるわけです。アク汁にカリウムが入っているわけです。植物質ですから。そして硝酸カリウムに変って来る。この硝酸カリウムが硝石と呼ばれるもの。チリ硝石は鳥の糞が堆積して出来たものです。鳥の糞を脱脂綿でくるんで撃つというのが台湾の火薬らしいのですが、それはさておいて、硝石+硫黄+木炭粉=黒色火薬。初めはオランダ式火薬で、硝石が70で硫黄と木炭の比率が15と15。硝石の比率が高くなつて硫黄と木炭の比率が少なくなれば威力が大きくなるわけです。イギリス式火薬が硝石75、硫黄15、木炭10の割合です。恐らく敷根の火薬工場が出来たのは薩英戦争の前後でしょうから、薩英戦争の直後、イギリス式の火薬の作り方を薩摩は知っていたと思います。威力のあるイギリス式火薬を知っていたから幕府を挑発して鳥羽伏見の戦いに突込むことになるのですね。薩摩は日本で一番強い火薬を持っているという自信があったから、鳥羽伏見の戦いをやれたのだろうと思います。そこらあたりの分析が未だ足らないような気がします。その意味で薩摩の火薬の歴史は面白いのじゃないでしょうか。

鉢之原 さっきのポルトガルの銃は本国製ではなかったという話を聞いたことがあるんですが、その辺はどうですか。

平田 中国で作った、あるいはマカオ製かゴア製ということですがね。

鉢之原 本国では見つからないという話を聞いたことがあるけど、実際はどうだか。

平田 2年ぐらい前でしたかテレビで見たのですが、あれと似たようなものをチベットの若者がさげていました。チベットは何世紀も前の鉄砲を使ってる

のだなと思いましたけどね。案外鉄砲はばあーっと世界中にひろまつたでしょうから、ポルトガルだけじゃなく中国でも作る技術はあったと思います。それが日本に伝わって来た可能性が大きい。最近、若い研究者ですが、倭寇が鉄砲をひろめたのじゃないかという説を出しています。倭寇を海賊のように言っていますけど、あの頃の商人でしょうね。商売に行ってうまくいかなければ海賊に化けるのは世界共通の現象ですからね。日本の海賊が鉄砲を持って活躍したことは当然考えられるので、赤裸に刀をさして(笑い)、切り込むというだけじゃなさそうです。

#### 多弥人の授爵

青柳 171ページの熊毛・多弥、天平五年ですね。爵位を賜う者一千百十六人というのは、結局多弥国の戸籍、人口そのものとみた方がいいのでしょうか。

平田 戸主だけでしょうね。

青柳 でしょうか。全員じゃないでしょうか。子供まで。

平田 そんなに少ないかな。

青柳 いや、それくらい。

平田 なんぼなんでも。

青柳 ちょうど一郷分ぐらい。奈良時代の大きな郷の一郷分ぐらい。そんなもんじゃないですか、人口というのは。把握してし人口というのは、どう思われますか。

平田 さあ、一戸を何人とみるかだな。

鉢之原 これは屋久まで入ってるわけでしょう。多弥・屋久一緒でしょうが。

平田 全部、そうです。

青柳 軽く把握出来ているという形で、面白いと思います。本土にある二つの郷だったら、当時どれくらいという目安がつかないですからね。本土ではどういう郷配置をしたか、地理的配置をしたか、人の数を数えて行ったか判らないから、そういう点で

#### さすがにアドリブな戸主

では面白いと思います。

平田 なるほど。その前に述べられていることをどう解釈するかだね。加理伽等百三十六人、これが戸主クラスだろうな。あんたの解釈でいけば。その家族まで含めたら一千百十六人というトータルになるかな。一千百十六人の五倍ぐらい前に一百三十六人というのがあるでしょう。人口のことについては、あんまり自信がないけど。

それと白尾国柱はずばりと言つてますね。種子島・屋久島の人たちが平氏の残党と言ってるのは信用できん、と。去年、硫黄島に行き、安徳天皇の墓とか、それを守つて来た人の墓を見ましたが、どんなに見ても15・6世紀以前にはいかないなと思いましたけどね。平氏の子孫というのはちょっと時代がかけ離れすぎているのです。

#### 古代の航路

青柳 吉備真備の船が太平洋を通つて行つたという話は、ちゃんとした航路だったのでしょうか。

平田 吉備真備の船。それはそうだろうな。

青柳 何か、えらい冒険みたいな気がするけど。

平田 黒潮の流れに乗つて行けるという自信を持っていたから屋久島を発つたわけでしょう。

青柳 だけど危いでしまう。心理的に危険というか。流されてしまつたらハワイあたりまで行かにゃいかんから(笑い)。

鉢之原 航路はかなり発達していたのでしょうか。

平田 それは判らない。だけどいろんな国の人人が来たでしゅね。

鉢之原 2~3世紀の頃は航路もあったでしょう。

平田 遣唐船はだいぶ大きいから、ちょっとじゃそっとじゃという自信もあったんじゃないかな。

鉢之原 それじゃ、決死隊やな。帰つて来れるか来れんか、命がけですからな。そうでしょう。

平田 遣唐船というのはどれぐらい乗つてるのかな。四隻の船隊で四百人ぐらいだから、一隻に百人

ぐらい乗つてる船でしょう。百人ぐらい乗つてる船と言つたら、相当大きな船です、昔でも。だから、ちょっとやそっとの波にはという自信もあったのじゃないかな、うぬぼれも。まあ冒険ではあるけどね。しかし屋久島に居つたのではどうにもならんし、屋久島から種子島と沿岸伝いにいわゆる沿岸航路で帰つて行けるという自信があったと思うのです。自然陸地が見えない太平洋の真ん中を突っ切るという航海じゃないでしょうか。

鉢之原 屋久島の山とか開聞岳とか、そういう山が見えるでしょうから。

平田 硫黄島あたりから逆に薩摩・大隅を見るとよく見えるのですね、晴れた時には。それから、今では僻地になっているけど、内之浦辺塚とか岸良とかね。あっちの方が主要ルートだったと思います。明治のはじめまでは。

鉢之原 陸路やな。

平田 陸路の方がむしろ冒険です。昔は内之浦とか志布志とかね、海伝いに行つたから、あっちの方が栄えていた時期があると思うのです。発想を変えなきゃいけないということでしょう。

鉢之原 高山よりもこっちの方がむしろ早いでしょう。内之浦に女湯を作つたという話。前田という人が作つたということだけ。

平田 あゝ、そうですか。そういう話は聞いたことはないのですが。

鉢之原 それは実話です。この間まで種子島とかあっちの方に航路があったから。

二見 鹿児島のそういう海運史を書いた本とかはありますか。

平田 さあ、不勉強で知りませんが。海運史とか交通史とか、今からじゃないかな。それから経済史もそうでしょうね。われわれが解明しきれなかつた市・町の問題もね。

鉢之原 それこそ原口泉さんが詳しくはないだろ

うか。経済のことは。

平田 彼の場合は昆布の販路を調べて行った。

#### 稻荷市

平田 三国名勝図会を読んでいたら、稻荷神社のところに面白い記事がありました。昔は「稻荷市」というのがあったらしいのです。現在鹿児島市では「市」というのはほとんど消えてしましました。私の足元の「諏訪市」も去年からなくなり、申しわけない話ですが、そんなことになるまで全然知りませんでした。それはとも角、稻荷市と豊後府内の市と牛深の市、これを天下の三大市という、と。おや一と思うんですね。鹿児島、豊後の府内というのは大分ですが、それと牛深が三大市と呼ばれるほどの経済の中心地であったということ。鹿児島の稻荷市は守護大名島津氏の城下町が育つ過程での「市」だという見当をつけることが出来ます。豊後府内の市これは大友氏と結びつきます。豊後国では慶長年間に大地震があって、瓜生島という島が消えてなくなります。その瓜生島には島津氏の別館があり、14代島津勝久は家督を養子貴久に譲った後、瓜生島の別館で死んでいるのです。フランシスコ=ザビエルも

瓜生島に来ているのです。瓜生島が栄えていたことから考えると、豊後の府内が三大市の一つに数えられることはあり得るわけです。牛深の市、これは天草の島です。これらが栄えたのも同じ頃とすると、時期は16世紀に限定されます。後期倭寇が活躍し、ポルトガル商人がやって来る頃、九州では鹿児島と大分と牛深が栄えていたことになる。三国名勝図会の記事も案外捨てたものじゃないと思います。各県の歴史をふり返り、どの程度経済的に栄えていたのかという裏付けをとる作業は大事なことだと思います。16世紀の薩摩国はポルトガル商船がやって来るだけのものがあったのではないか。そういう過程の中で鉄砲も伝わって来たのだろうと考えるのです。

二見 キリスト教などの研究は天草とか長崎とかあの辺が盛んですね。鹿児島ではどのくらいなされているのですか。

平田 ほとんどされてませんね。

二見 坊とか川内にもったり阿久根にあたりいろいろしてるのでしょう。

平田 その辺の研究は必要だと思います。前半はこれぐらいとして、休憩しましょう。

## 甲突川とその流域の地名

平田信芳

行くのも面白かろうと思って整理してみました。

甲突川の地名を説明しているものにどんなものがあるかということ。急拵、ワープロを打ったのですが、まず18世紀後半に出来た『西藩野史』。これは得能通昭という武士が自分の立場で書いた歴史書。その巻三に、文和三年(1354)、室町時代の初めですが「夏六月、畠山国長薩州山北ニ」山北とは祁答院に高城・東郷を合わせて山北という「畠山国長薩州山北ニ在リ、地ヲ略シテ鹿児島原良ニ軍ス」鹿児島に攻め込んで来て原良に陣を敷いた。「氏久」島津家の6代「氏久逆ヘ戦フ」抵抗した、と。「連日、

雌雄未決」。六月十日、国長が士多田七郎なる者、氏久公の軍に弥九郎という豪傑がいる、と。弥九郎の伝は義久公の伝にあり、「共ニ勇武ヲ以テ名アリ多田単騎ニテ出テ、山田ヲ呼ンデ出テテ決セシム」山田弥九郎に一騎打をやろうと呼びかけて来た。この山田弥九郎というは代々長男が弥九郎の名を継ぎます。関ヶ原の戦の歌に出て来る「わが昌巣ら待ち受けて縦横無尽に駆け散らす」という山田昌巣は弥九郎ですから、その先祖になります。「弥九郎左手ニ楯ヲ取り、右ニ刀ヲ取リテ出ヅ」、楯を左手に持て出た。「其志」そのねらいは「多田ガ刃ヲ受け」楯に受け、「組ンデ力ヲ戰フニアリ」ねらいは組打ちにもちこむことにあった。「両軍戦ヲ止テミル」一騎打ちを見守った。「二氏刃ヲ接テ時ヲ移ス」。両雄が組みついたところで、「両軍、其傷ンコトヲ恐レ」どちらも勇者を死なせてはならないということで「均シク進テ是ヲ救フ」。「山田、多田ガ青印(サガシ)ヲ切り、大旨シテ帰ル」、やったぞ取って來たぞ、というわけですね。鎧の片袖でも取って來たのでしょう。「国長、公ノ軍」、公というのは島津氏久、「整々トシテ破り難キヲ見テ、山北ニ退ク。伝云、此日甲ヲ川ニ突キ入ル故ニ名ヅケテ甲突川ト云」と。いわゆる「甲を突いた」、ヨロイを突いた」ということかな。多田七郎の鎧の一部分を取り取って來たことは事実なんでしょう。それで、甲突と名付けた、と。

そのことは同じ『新薩藩叢書』巻之一、『薩藩旧伝集』。これは昔の語り伝えを次から次へと書き足して行って、誰が書いたというわけじゃないのですが、いろんな話が集められている本です。キュウデンシュウとも読みますが、クデンシュウが正しいのでしょう。

『薩藩旧伝集』巻ノ二

「一、畠山治部鹿児島野元原ヘ陣取被申候。其時治部方より多田の七郎と名乗、島津の陣の山田弥九郎

殿に見参申さんと望懸候処、弥九郎出て勝負致され候。七郎は槍、弥九郎は長刀と申伝候」。ナギナタよりも長刀(ヨウタ)の方がいいでしょう。「弥九郎七郎が甲を突落され候処、同勢互に相続き相引に成候」引き分けに終った、と。「七郎か甲を突落され候処、甲突八幡を立て、今に平の」平之町でしょうね。「門松殿屋敷にて有之候」平という所があるのでしょう。「江月川有之坏と書き申は非なり、甲突川にて候と也。右の野元原陣の跡、茶臼ヶ陣とて、今に距有之候、鹿児島小野路よりくほみ見候処の由也。」

昔は新上橋を渡って檜木馬場を通って行くのが本道のようで、四十五聯隊が出来てから新上橋の前にあった山を崩して新しい道路を作っています。それが明治20年頃のようです。明治20年以前は新上橋から向う側：右岸に出て檜木馬場を通るのが本道だった。新潟大学の河川工学の大熊先生が昔の新上橋の写真に山が迫っているのを見られて、あの山を削ったのはいつか、という問題提起をされた。あの山を削ったことが市街地を洪水の危険にさらしたという見方をされているわけです。上野孝敏氏から電話で昔の写真を持たんかと問い合わせを受けた時、その話を聞きました。新照院の山を削ったのが水害に大きくかかわっているという見方です。

鉢之原 新照院の由来は？

平田 城山にあった新照院上山寺の名残りです。それから三国名勝図会の巻之一だったと思うのですが、野元原の所に先程述べたことより詳しい記事があります。あとで気がついたのですが、説明が詳しくなります。言っていることは同じです。合戦があって畠山方の多田七郎の甲を突いたから、甲突川と付いた、と。

その次は『三国名勝図会』の巻之二。これも『薩隅日地理纂考』その他、それ以後の説明の基本になるわけですが、「神月川といふは宇治瀬神社」別名

鹿児島神社ですが、「神嘗の祭より出たる名なりといへり。薩州神社考」、見たことがありませんが、「上月に作る、俗に江月、甲突、甲付など書り。一名境川とも呼べり」。これは昔の伊敷村・坂元村・西田村・武村などの境があるということからでしょう。「また大野川の名あり」。大野川はその次を読みれば判ります。

#### (4)『鹿児島県地誌』卷一

「幹流、一ニ江月川、又神月川ニ作ル。源ヲ日置郡花尾山ニ発シ、本郡ニ入り、数村ヲ経、下伊敷村ノ界ヨリ鹿児島市街ノ西ヲ東南流シテ、洲崎ヨリ海ニ入ル。長凡三拾武町」これは鹿児島での長さでしょうね。「上流ハ廣サ凡武拾五間」これは新上橋あたりでの広さ。「下流ハ凡ソ三拾九間、其流清シテ舒緩、鹿児島ニ四大橋ヲ架ス」四大橋というのは玉江橋が伊敷村にありますから、鹿児島ではないということです。

そこで「コウツキ」とは何か、ということ。甲突は畠山勢と島津勢との合戦以後に付けられたとみてよさそうです。しかし、それ以前にも「コウツキ」という地名はあったのです。それ以前は「神月」と書くわけですが、類例地名を探すと鹿児島市吉野町の小字に神月菌(かみのけ)・上神月(かみのか)・下神月(かみのか)があります。ルビが振ってあっても読み方が判らなくなつて勝手にルビを付けた可能性もありますから「カミツキ」と読むのかどうかも判りません。三宅島に神着(かみのけ)という地名があります。これは神様が着く所の意味とみられます。それから、上月。兵庫県佐用郡上月町になりますが、毛利軍に攻められた尼子勝久と山中鹿之介が捕えられる所になります。山中鹿之介というのは、われわれの世代から上でなければ知らない話です。50才代以下は知らないと思います。三日月に祈りながら「われに七難八苦を与え給え」と祈る有名な姿が昔の教科書にありました。

その下に、「こうづ」は川岸の崖山「き」は城・村を示す?これは『兵庫県地名大事典』(角川)にある解説です。日本の地名学はこんな解釈をするのが好きなんですが、こんなことをやっていたのでは意味が判らなくなります。

やはり「こうつき・こうづき」だと思います。「神月」と考えれば、「神」という字は上に付けば「コウ」と読むのですね。神戸(こうべ)・神殿(こうどん)・神とみなされた榎木がったことに由来し、神楓(こうづき)と呼ばれたと考えるのです。山神・氏神のように下に来れば「カミ」と読みますが、上に来れば「コウ」と読むのが日本語では一般的です。神楓という信仰の対象となった榎木がそもそも初めだと考えたいのです。楓というのは、現在は櫻(さくら)とよばれる木です。

吉野町の小字も神月菌(こうづきのけ)とか上神月(かみのか)・下神月(かみのか)と呼んでいたのでしょうが、読みを忘れてしまったとも考えられます。小字はよっぽどの老人でなければ読みなくなつて、役場で勝手にルビを付けて神月(かみのか)なんてふうに読んでしまう。そんなに読むのじゃないと囁みつきたくなるのですけれども、そこはだじゃれとしどきましょう。

その次、(4)『鹿児島県地誌』に水源が花尾山とありますが、地図に移つて考えることにします。5万分1の地図では、鹿児島は

池田 鹿児島市は4枚になります。

平田 「伊集院」の図が手元になかったので、伊集院の方の川の流れは正確ではありません。方位を付けたところのすぐ上に花尾山があります。地図を見ていくと、厚地から流れる宮脇川・川田川を源流と考えていたことが判ります。ところが、最近は入来町との境に甲突池と称するものがあって、それを源流としているようです。現在八重山(やまと)と読んでいますが、本田親虎先生は「ハエヤマ」と呼ぶのが正しい、と。いつのまにか「ヤエヤマ」という

ようになってしまったと言つておられます。ハエというのは楠バエとか○○バエ、楠が生えたという意味です。鹿児島では開墾地にハエという地名を付けたのだそうです。八つの峰が重なつて見えるからヤエヤマというのじゃなくて、ハエから来たのだという説。これは本田先生の説です。

上宮嶽(じょうぶだけ)。ここには上宮と呼ばれた神社があったのでしょうか。重平山(しげひらやま)は意味が判りません。花尾山は花が咲いている山という意味。これらあたりは八重山が900mぐらいで、あとは500m台ですね。

上宮嶽から南に流れるのが有屋田川(ゆすたがわ)・神之川(かみのかわ)で、これらが伊集院に流れる。この流域がこれには書きませんでしたが、西俣(にしま)と呼ばれます。郡山での西の地域。これに対して雑田川(ぞうたがわ?)というのですか、それから袖須木川(そめきがわ)。これは文句なしのユスノキです。伊集院はイス(ユス)が訛つて「イジュウイン」になったと言いますが、訛らない地名がすぐ近くにそのまま残っています。ユスノキが目印となつた地名になります。鹿児島県では「木」の名前が付けられた地名がよく見られます。情木川、ユスキ川。そうしたら「コウツキ」という木から甲突川の名前が生まれたと考えて支障はないことになります。

一つ一つの地名を分析するのは難しく、厚地の意味も分かりません。アツチという弓の矢を射る土手がありますね。あれがアツチになったという解釈がありますが、そうでもなさそうです。熱田神宮のアツというのと何か関連があるかも知れません。

花尾神社のそばを流れる宮脇川は解釈の必要はないでしょう。川田(かた)は川沿いの田圃ということでしょうか。

#### 小山田(こやまだ・おやまだ)

その次、最近では小山田(こやまと)と呼んでいるとのことですが、古くは「おやまだ」。呼び方としては

「おやまだ」が正しいと思います。いつの間にか「こやまだ」に変つてしまつたようです。

鉢之原 「こやまだ」という所は沢山あるようですが。加治木の小山田もある。

平田 「こやまだ」ですか。古くは「お」ですがね。春の小川は「おがわ」であつて「こがわ」じゃないでしょう。次回は小原さんがオバル・コバル・オハラの分析をしてくれるはずです。その時に問題にしましょう。大・小・大きな地名は「オオ」と「ウ」ぐらいで、大崎:オオサキ・ウサキでしょうけれども。小山田、オヤマダ・コヤマダ。コヤマダと呼ぶようになって來るのはちょっと時期が新しいと思います。

納 鹿屋では昔から苗字は「おやまだ」と読みました。

平田 私は「おやまだ」が古いと思うのです。「こやまだ」さんというのは聞いたことがないのだけど。

納 私なんかも「おやまだ」と言いよつたですから、実際は。

鉢之原 コヤマダと言つたりオヤマダと言つたり。

平田 コヤマダさんがいましたか。これらあたりが難しいところです。このような単純なのが地名としては一番難しいのですね。

鉢之原 小山田(こやまと)という人もいますよ。

平田 あゝそうですか。(編集者後記:地名はコ

#### 苗字はオと使い分ける所が多いという。)

#### 植生地名

その次の三重岳は頂きが重なつて見えるからでしょう。比志島川、これも菱が生えた島、菱刈の菱と同じ。

池田 それらしいのはないですね。湿原はありますけど。

平田 ありませんか。

池田 えゝ。牟田みたいなのはありますけど。

平田 植生地名は一度付いてしまうと、その植物が無くなってしまふのが普通です。例えば紫原は紫草が生えていたから、栽培していたから紫原と付いたと思うのですが。というのは、三国名勝団会に紫草を栽培した郷が沢山あてありますからね。三国名勝団会を書く頃までは紫草の栽培は薩摩国・大隅国では一般的なことであって、とくに霧島の山麓は紫草の栽培が盛んな所であった。そのことは二国名勝団会の記事から裏付けられます。現在では紫草は十和田湖付近でなければ自生しないということですから、日本列島のように南北に長い島においては植生は大きく変わることもあるとみなければならぬ。現在植物が生えていないから植物に由来する地名はなっとらんと日本の地名学では言うのですが、私はそれに対する反論の意味で「植物に由来する地名」を嘗々と書いて来たわけです。やはり植物に由来する見るのが一番自然だと思うのです。比志島という地名は。

### 三重岳

池田 ちょっと三重岳について説明します。二つ説がありましてね、三重岳はこんな感じで見えるのです(板書)。これが二重岳、これが牧神ですね。これが狩倉山と言って、まあ殿様が狩りに来た山。三重になっていて、その真ん中に三重岳というのがあった。また三重岳は鹿児島市・吉田町・郡山町の境になるのです。吉田の方から登りますとね、ちょうどクマのところを登って来るのですね。これが三重岳ですね、これが二重岳と書いてあるのです。「フタエ」と読むのかは判りませんけど、それから一重岳と書いてあるのです。それで、まあ、鹿児島市の方から見ると、こんなふうになっているのですけれども、うしろから登るとこんな感じで三つに、一重岳・二重岳・三重岳となっていました。どちらが正しいか判りませんが、こちら(吉田)の方から登ると、こうなります。

### 河頭(こがしら)

平田 ありがとうございました。その次の河頭(こがしら)、これも難しい。

池田 河頭という地名は古いのには出て来ませんもんね。

平田 そうですか。何か判らないですね。普通は川上。または川口・川尻。頭というのはちょっと。

納 沖縄県に行けば「頭」と書いて「カミ」と言いますね。国頭(くにみ)とか。

鉢之原 私が聞いたのでは明治時代になってから付けられたようですが。(編集者後記:『鹿児島県地誌』に河頭の地名見えず。また、ただ太鼓橋とのみ記す。)

平田 あゝ、そうですか。河頭石が登場するのが明治中期以降ですからね。発った名前を付けた可能性はありますね。他に例がありませんから。河頭石はわりに固い石で、県下を回ってみると金持ちが河頭石を使って墓石やら石碑を建てています。

池田 昔は墓石というの河頭の石だった。

平田 明治の中頃以降ですね。この前の石橋セミナーでコンサルタントが甲突川の石橋は河頭石を使っていると説明したのは用語が違うとクレームを付けたのです。河頭という呼称はいつ出来たかと、明治の新聞を見ればいいのかも。

鉢之原 温泉と何か関係があるかも。

池田 ハマチ温泉?

鉢之原 あれは正式には冷泉だけども、25度を越えてないから。それとの関係があるのかも。

平田 それと河頭石とを宣伝したのでしょう。

鉢之原 それと鮎の釣場との関係はありませんか。

池田 こちらの風習として、必ず取り立てますよね。5月1日の解禁の時なんか、河頭付近の堤防に立って。あそこに漁協みたいなのがあって、そこが放すのです。河頭に漁協があって。

平田 鮎釣場との関係ですか。

鉢之原 まあそのようなものと温泉場とか、何か宣伝文句にしたようなもの。

池田 小山田とか蒲ヶ原などは比志島文書に色々出て来るので、河頭は出て来ません。

平田 あゝ、そうですか。

納 二つの名前をくっ付けたというわけじゃないですね。

池田 それはないです。近辺にそれに当るのではありません。

鉢之原 戦争中は馬車の中継地点、中継所があったようですね。

平田 あゝ、駅みたいなもの。中継地点ですね。

池田 島津氏が花尾神社を管理しますので、その登る途中の場所になりますね。

鉢之原 僕の親父なんか錢がなかったもんだから河頭まで歩んでから馬車に乗るもんじゃったと言います。

平田 なるほど。

鉢之原 河頭がきりがよかったです。

平田 河頭までがちょうど10Km。甲突川は長さ20Kmの川ですが、ちょうど真ん中ですね。花尾神社はこちらからも登れますか。

池田 比志島の方からも登れるように石畳が敷いてあります。

鉢之原 いつ頃出来たのですか、石畳は。

池田 何年だったのか、いつか見たのですが。吉貴の時代じゃないですか。

平田 島津吉貴の頃は藩内の整備が進みますからね。

### 犬迫・花野・名突観音・岩崎橋

平田 その次の犬迫川ですが、犬がうろちょろしてたんでしょう。(笑い)

池田 ある説によると、犬が入っても出られないくらいの深い迫。

鉢之原 昔のヤチ田ほどにはないけど、やっぱり

深い。

平田 昔は犬が野生化したまゝですから「犬」の付く地名は多く見られます。その次の花野(物)は判りません。花野・花園・花倉と続いますが。

鉢之原 昔も花野の字を使ったのでしょうか。

平田 「け」は、け死んだ・け転んだの「け」で意味を強める用語で、殊更に野原を強めていう表現なんでしょう。「けの」を流れる川が、花野川。花野・花園・花倉の花(け)は接頭語と見る以外にないでしょう。け死んだ・け転んだ・け消えた・け座った、とか。(笑い)

その次の名突(なつ)もよく判りません。名越と甲突川とを結んだ道路に付けられた合成地名のような気がします。ここにあるのが名突のお観音さあですね。それが対岸の梅ヶ淵の名をとって、梅ヶ淵観音の名前で宣伝しています。名突のお観音さあが梅ヶ淵観音に化けているわけです。そして、いつの間にか受験の神様になったのです。

鉢之原 あれは昭和2年じゃないですか、名前は

平田 梅ヶ淵観音となったのは昭和30年代でしょうね。その次の長井田(ながだ)。井田というのは蘭田あるいは井手、いわゆる井堰の類で、長い井堰があるところに長井田という集落があって、そこを流れる川ということでしょう。梅ヶ淵は、お梅さんが身を投げたという説と、梅の木があったという説しかないでしょうね。伊敷(いしき)は判りません。昔からいろいろと問題にされる地名ですが、「シキ」というのは海岸地帯に多い地名です。

池田 イニシキ神社とのことを言いますけど。

平田 そのように言いますけどね。イニシキがどうしてイシキに縮まるかが判らないのです。山崎川は山崎を流れる川。幸加木川の出口が岩崎という地名で、岩崎橋が架かっていますけれども、あれの川底になりますね。岩盤は、だから岩崎と付いた地名は非常に古いのだということがそれで判ります。

鉢之原 岩盤な。

池田 あの橋は、本当はトッパン橋と言います。岩崎がおかしいのですね。山崎川の方にある橋を本当は岩崎橋というのだと聞きましたけど。

平田 トッパン橋とは、どんな字を書くの？

池田 屠殺場の橋。

平田 ああ、屠殺場の橋。

池田 昔、伊敷村が屠殺場を持っていたのですね。

納 今はアパートがありますね。

池田 はい、そうです。

鉢之原 昔の石の壁はまだ残っています。

平田 もう一度確かめますが、屠殺場の橋を何と言ったの？

納 トッパン橋。

平田 トッパン橋というのですか。

鉢之原 屠場橋(とよばし)やな。

平田 屠場？

納 屠場を鹿児島語で「トッバ」というから。

平田 トバ？

納 ツは、促音はどうなるのかな？

平田 トバの橋、トッパン橋。難しいな。

納 屠場橋がトッパン橋になったのでしょうか。

鉢之原 屠殺場橋やな。

平田 トッバは「解き場」じゃないかな。死体を解くという。解き場、トッバ。解き場の方が理解し易い。

納 解き場というのは知りませんよ。

鉢之原 昔はそういうように言ったのでしょう。

納 屠場があったのですから。

平田 屠場をトッバと言ったのでしょう。解体する所を、トキ場と言ったとすれば解釈し易い。屠殺場が訛ってトッバというのじゃなくて、解き場がトッバに訛ったとする方がよさそうだけど。

納 解き場やな。

鉢之原 岩崎橋とは言わんかったな。

平田 あ、そうですか。岩崎橋は山崎川に架かっていた橋ですか。

池田 そうです。本来は日当平の方へ行く所にある小さな橋を岩崎橋と言った。私の兄が岩崎という苗字です。日当平の方へ行く所に小字岩崎というのがあった。

小野・幸加木・清藤・草牟田

平田 小野と大野。先程大野も出て来ましたが、小野の方が狭くて開墾し易い。小野は鹿児島市では早く開発された地域だと思います。

幸加木川・幸加木神社は本来「糺搔(くみきごぬき)」に由来します。いわゆる染物屋があったのですね。これは中世の職業地名。「こうかき」という地名は県内にいくつあります。「クヤどん」と鹿児島語で言いますね。これに類似した地名が網屋・経師。経師屋というのがありますね。中世文書にこの経師を「きよふじ」と書いてあります。そうすると伊集院に「清藤」という地名がありますね。清藤はこの「きよふじ」につながるのじゃないかと思うのですが、伊集院出身の人は清藤を「ケーフッ」というそうで、さっぱり意味が判らなくなりました。

納 それを聞いたことがあります。伊集院の人から。

平田 清藤という姓は鹿児島県にしかありませんからね。

鉢之原 東市来にありますよ。

平田 次は草牟田。これは古い文書に「沢牟田」と書いてあり、それが訛ったことですが、そうじゃなくて「ソンタ」と言いますから、贈於郡の「ソ」、ソビラの「ソ」で、うしろの牟田から來てるのじゃないかと思いますが。

鉢之原 牟田でしょうね。

平田 うしろの牟田、後牟田(うしろばた)。ソムタはそれに近いような気がします。永吉は、永吉という人物に由来する開発名(永吉名)です。

常盤・西田・武・清瀧・甲突川

平田 原良は原っぱのこと。「ら」は「あちら・そちら」という地名語尾。常盤には昔島津家の別館があって、本来の地名は枯木迫(かぎこ)。木が枯れていたあまりよくない所だったのでしょうが、島津の殿様の別館が出来てからめでたい名前にとのことで常盤と付けているようです。常盤の松にあやかろうとしたのでしょう。

西田は西の田圃です。しゃれた意味があったとすると、国分尼寺の田圃があったので尼寺の掛詞があったかも知れません。薩摩国分尼寺の領地がここにありましたから。

それから、武。武という苗字の分布を調べると、鹿児島市と桜島の「武」に多く見られるわけです。鹿児島市の武さんはどこからか移って来た可能性を考えられますが、桜島の「武」は土地の人々です。「武」は竹に由来するものもあるでしょうが、桜島の「武」は「嶽」から名前が付いたと想像できます。桜島の噴火で「武」の人たちが移動したと考えると「武」という地名が移って来る可能性はある。従来は「田毛」などと書いて無理な解釈をしていましたが、桜島の武の人々が移って来て「武」という地名が付いたと解釈する方が自然だと私は思います。

天保山は天保年間に造られた埋立地です。洲崎は洲の崎ですね。その次の清瀧川。清瀧はサンズイをとると青竜になります。東に青竜、西に白虎、北に玄武、南に朱雀と考えると、東の守りは青竜になります。それにサンズイを付けたら、清い流れというイメージの清瀧になります。これは学者が考えて付けた名前だということです。

二見 昔このあたりに武村というのがあったのでしょうか。

平田 そうですね。

二見 桜島から移ったのは、いつ頃なんですか。

平田 それは古いでしょうね。奈良時代に考える

ことも出来ますから。

納 三国名勝団会によると、建部が。

平田 根占の？

納 根占にありますね。あれが高麗町に移ってきて、そして今の西駅裏に、武のトンネルのところに移ったということが書いてあったようです。

平田 建部神社がありますからね。しかし、建部村という名前が付くのが自然だと思います。桜島の武の人々が移って来て、新しい「武」を作った。その語源は「嶽」であるか「竹」であるのか。そういうものから名前が始まったとみると、すなおに解釈できます。

納 もう一つ「武」の場合、「田毛」と書いたものもあるし、その隣に田上があるのでそれに対して「田下」。

平田 それも一つの解釈だけど、上(かみ)に対しては下(しも)であって、コンビの地名が付かなきゃいけないでしょう。田下(だげ)だったら何だろう、田上(たじょう)だろうか。

納 それと資料の(4)に神月菌とありますね。この神月は市立病院の裏の橋に、神月川と書いてあるのです。

池田 市立病院のうしろ？

納 うしろにあります。

池田 何橋？

平田 甲突橋でしょう。

納 あれの西駅側の方ですかね、親柱に書いてあるのです。「神月」と。向う側は書いてありますかね、MBC側は。それは憶えておりませんが。

池田 よその方は「甲突川(こうつきがわ)」と読むわけですね。甲突(こうつき)とは読めないです。

平田 突然に慣れているために「突(つき)」とは読みませんよね。しかし地名というのは自然に理解できるようなものだと考えなきゃいけない。はじめは幸加木川と高瀬川という川があって、それを合成

すれば「コウツキ」になるがなど考えたのですが、高瀬川がありませんから合成地名とすることはちょっと難しい。神瀬（神月）という地名があり、島津勢と島山勢との合戦が一つの契機となって、甲突に変ったと理解する方が自然だと思うのです。こんな話は荒唐無稽だとするわけにはいかないんじゃないでしょうか。「甲突」には意味があったという解釈をした方がよいと思います。

#### 田上川と新川

納 私なんかは小さい時から田上川(たがねかわ・たみのり)と言っていましたが、現在下の方は新川(しんかわ)という。それから田上川の上流の方は「ニイノタイガワ」というのですよ。

平田 西ノ谷川？

納 そうです。川の名前が一つだけじゃないのです。

平田 皆、自分の住んでいる所の名前で呼びますよね。山だって、こっちから見た名前と反対側から見た名前が違うことがあります。

納 行政の方では面白いことを書いています。私なんかが田上川という所もそれから上の西ノ谷川も、全部「新川」にしているのです。

平田 まあ、そうでしょうね。それが合理的な行政的な整理でしょうね。稲荷川だって上流は精木川、その上になつたらいろいろな名前が付くわけですから。

鉢之原 そっちの方には、やかましい人がおりまづから。

平田 実方川(さねかわ)になったり。

鉢之原 今までいろいろ書いていますから（笑）

納 昔の名前が全くなくなっています。新しい

人は「新川」というのですよ。私なんかみたいのは「西ノ谷川」とすぐ出て来るのが。

二見 結局、郡山の甲突川というのが最終的に残ったのですね。

平田 川の名前ですか。これは後から付けたわけです、水源を。

二見 それは何と言ったのですか。

池田 名もない川で（笑い）。

二見 でも、この一帯に甲突川と書いてある。

平田 これは5万分1地図に書いてあるのをそのまま書いたわけです。5万分1地図の水源は八重山中腹から出ている形になっていますが、『鹿児島県地誌』は花尾山を水源としています。

鉢之原 甲突川の流れが変わったということ、これは史実がはっきりしているのか。記録があるのでしょうか。

平田 河道の付け替えというのは、清瀧川は二番目の河口ですよね。清瀧川から現在の流れに変えたのははっきりしてますよね。最初のものは俊寛堀の方に流れていた。今の県庁あたり一帯が大野原と呼ばれていたから、大野川。あゝ、これには触れなかっただけですね。大野川という名前がその昔あったのだろうと思います。残念なことに鹿児島市は空襲で焼けたために、法務局も市役所の方も地籍図が残っていません。あの辺の小字も残っていないのです。復元しつつあるのですが、まだ調べに行っておりません。鹿児島市の小字を見直すことも一つの仕事だと思います。

まだ話したいことは多いと思いますが、時間が来たようです。片付けて終りましょう。

#### 南島路整備と南九州経由

- 616年（推古天皇24年） 涼攻人来航（漂着？）  
629年（舒明天皇元年） 田部連を涼攻に派遣  
631年（舒明天皇3年） 涼攻人来航  
677年（天武天皇6年） 多禪嶋の人等に娶す  
679年（天武天皇8年） 倭馬飼部連らを多禪嶋に派遣（683年帰着）  
681年（天武天皇10年） 多禪嶋派遣の使人等、多禪嶋の図を報告  
695年（持統天皇9年） 文忌寸博士らを多禪嶋に派遣（699年帰着）  
700年（文武天皇4年） 薩末の比売・久米・波豆・衣評督衣君具・助督衣君弓自美・肝衝  
難波らにしたがう肥人らが國使らをおどして物を奪おうとしたので、竺紫總領に討たせた。  
702年（大宝2年） 薩摩と多禪を討ち、薩摩国と多禪国を創設  
713年（和銅6年） 大隅国の創設  
715年（靈龜元年） 奄美・夜久・度感・信覚・球美などの人々が来朝  
720年（養老4年） 大隅隼人の反乱。中納言大伴旅人が征隼人大將軍となる。  
南嶋の人 232人に位階を与えた。  
721年（養老5年） 征隼人副將軍らが京に帰還。斬首・捕虜1400人余り。  
723年（養老7年） 大隅・薩摩二国の隼人 624人が朝貢。  
735年（天平7年） 大宰大弐小野老が高橋連牛養を南嶋に派遣し、島ごとに立札を設置  
740年（天平12年） 大宰少弐藤原廣嗣の反乱。  
贈於君多理佐らが降伏、廣嗣軍総崩れ  
741年（天平13年） 国分寺建立の詔  
754年（天平勝宝6年） 島ごとの立札を修理  
824年（天長元年） 多禪島司廃止大隅国所属とす

630年（舒明天皇2年） 第一次遣唐使派遣

653年（白雉4年） 第二次遣唐使、高田根朝呂らが薩麻の曲、竹島の門で遭難。

702～704年 第七次遣唐使（南島路）

713～718年 第八次遣唐使（南島路？）

734年（天平6年） 第九次遣唐使第一船が多禪島に帰着

753年（天平勝宝5年） 第十次遣唐使第三船が益久島に帰着（遣唐副使吉備真備乗船）

754年（天平勝宝6年） 第十次遣唐使第二船、阿多郡秋妻屋浦に帰着（唐僧鑑真乗船）

778年（寶龜9年） 第十四次遣唐使第四船が嶺島に、第二船は出水郡、第一船の船は嶺島に舶は肥後國天草郡西仲島に帰着

894年（寛平6年） 遣唐使廃止

## 甲突川とその流域の地名

1995年 6月 4日

平田信芳

### (1) 『西藩野史』――得能通昭 (1729~89)

卷之三 (文和三年: 1354) 夏六月、畠山国長薩州山北ニ (祁答院ニ高城・東郷等ヲ合テ山北ト云フ) 在リ、地ヲ略シテ鹿児島原良ニ軍ス。氏久公逆ヘ戦フ「連日雌雄未決セス。」(六月十日)、国長カ士多田七郎、氏久公ノ軍弥九郎 (伝義久公ノ伝ニアリ) 共ニ勇武ヲ以テ名アリ。多田单騎ニテ出テ山田ヲ呼テ、出テハ決セシム。弥九郎左手ニ楯ヲ取り右ニ刀ヲ取りテ出ツ。其志多田カ刃ヲ受ケ組ンテ力ヲ戦フニアリ。両軍戦ヲ止テ見ル。二士刃ヲ接テ刻ヲ移ス。両軍其傷シコトヲ恐レ、均シク進テ是ヲ救フ。山田多田カ胄印(かぶり)ヲ切り、大言シテ帰ル。国長公ノ軍整々トシテ破リ難キヲ見テ、山北ニ退ク (伝云、此日甲ヲ川ニ突キ入ル故ニ名ツケテ甲突川ト云。)

『新薩藩叢書』卷之二、p.95

### (2) 『薩藩旧伝集』卷ノ二

一、畠山治部鹿児島野元原ヘ陣取被申候。其時治部方より多田の七郎と名乗、島津の陣の山田弥九郎殿に見参申さんと望懸候處、弥九郎出て勝負致され候。七郎は槍、弥九郎は長刀と申伝候。弥九郎、七郎か甲を突落され候處、同勢互に相続き相引に成候。七郎か甲を突落され候處、甲突八幡を立て、今に平の門松殿屋敷にて有之候。江月川有之坏と書き申は非なり、甲突川にて候と也。右の野元原陣の跡、茶臼カ陣とて、今に距有之候鹿児島小野路よりくほみ見候處の由也。

『新薩藩叢書』卷之一、p.185

### (3) 『三国名勝団会』卷之二

天保十四年(1843)編纂

神月川といふは宇治瀬神社神管月の祭より出たる名なりといへり、薩州神社考には上月に作る、俗には江月、甲突、甲付など書り、一名境川とも呼べり、また大野川の名あり。

### (4) 『鹿児島県地誌』卷一

明治十五年~十七年編纂

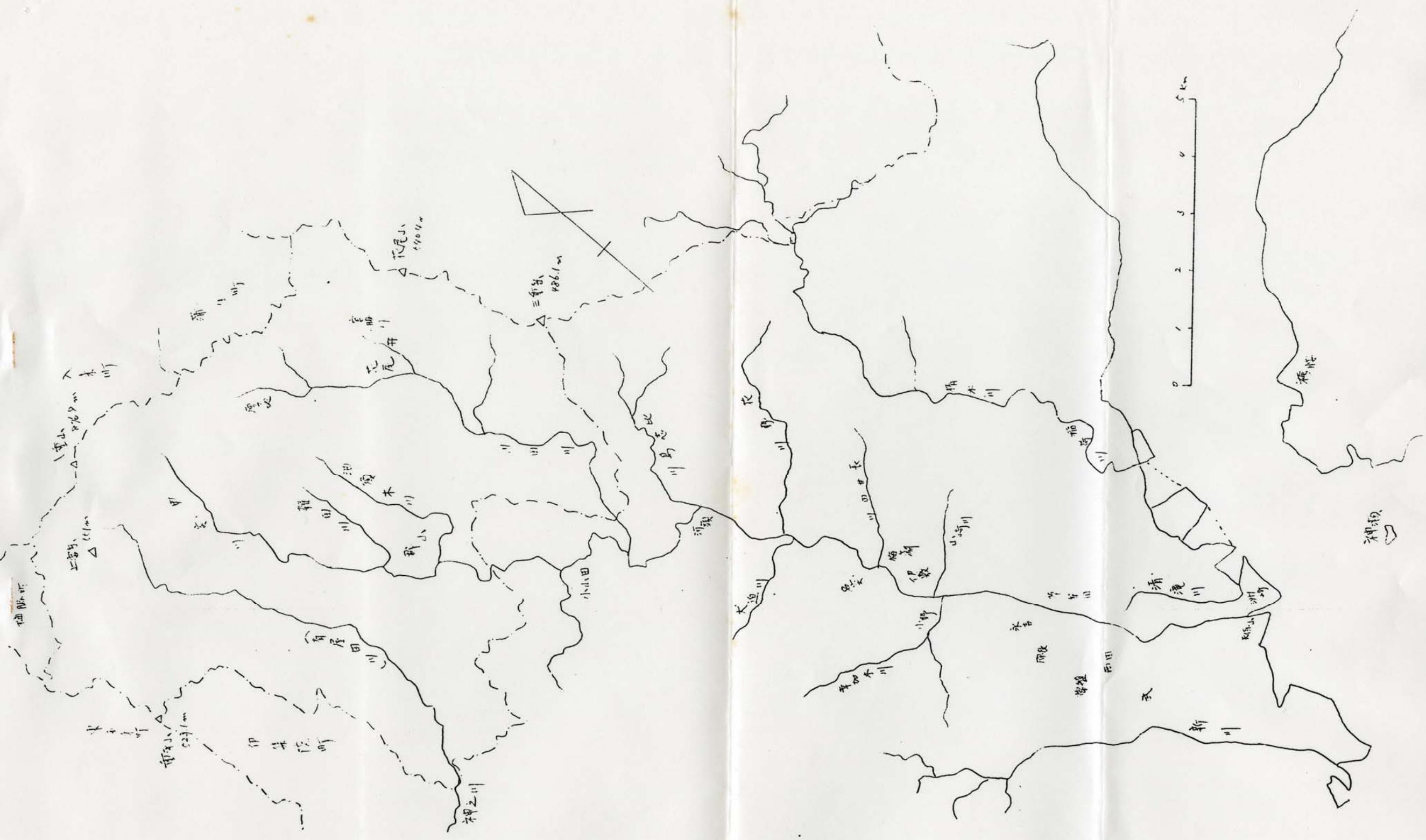
幹流。一ニ江月川又神月川ニ作ル。源ヲ日置郡花尾山ニ発シ、本郡ニ入り数村ヲ経、下伊敷村ノ界ヨリ鹿児島市街ノ西ヲ東南流シテ、洲崎ヨリ海ニ入ル。長凡三拾武町、上流ハ広サ凡武拾五間、下流ハ凡ソ三拾九間。其流清シテ舒緩、鹿児島ニ四大橋ヲ架ス。

### (5) 類似地名

1. 神月菌(ミサキノ)・上神月(カミミサキ)・下神月(シモミサキ)――鹿児島市吉野の小字
2. 神着(ミサキ)――東京都三宅村
3. 上月城(コウザキジョウ)――兵庫県佐用郡上月町

尼子勝久・山中鹿之介が捕われたことで著名。

「こうづ」は川岸の崖山、「き」は城・村を示す?



# 地名研究会報 第50号

時季、J.すまひあきの宇宙ひだり日出海。アホい風景  
うこそべづく方武アサヒ走来出被ふが風景

平成8年9月1日

鹿児島地名研究会

## I. 第50回例会 平成7年9月3日(日)

(出席者) 青柳俊二・納栄蔵・小川秀直・坂本誠・永田典男・肥後芳尚・  
平田信芳・藤浪三千男・米原正晃(計10名)

## II. 豊藩名勝考読会 P.171 ~ P.174

(問題となった地名および事項) 益救(いやく)の読み・御嶽  
益救(いやく)の読み

青柳 益救島の読みですが、国柱の時代は字の読み方に重点を置いたのか、それとも表現を重んじたのか、どちらかよく判らないのですが、どうですか?

平田 何が?

納 表現そのものですが、ヤ行の場合はほとんどがイヤ。ヨーロッパの宣教師が書いたあれは。

平田 シドッチ?

納 ロドリゴとかいう。

平田 あの人の“いろは”を書いたのをみると、ヤ行はイヤ・イエというように、イが付いていたような気がします。あの頃は、全部イヤ・イエですので、この表現は合っているみたいですね。

青柳 イヤク島の“イ”は、ヤ行のイとア行のイなのか。それが区別できなかったんじゃないかなと思うんですけど。

納 ヤ行の音は語頭: ことばの頭に来れば、ほとんど“イ”が入ります。普通の場合はそれが脱けるのです。鹿児島語で表現すると、イヤッシマ英語の場合も極端に言えば、イエイ語。穎娃の場合もイエイ。“イ”が軽く入って来ます。

平田 あゝ、そうですか。そこまで方言的な表現も加味したと理解すればいいわけですね。中国語では、鴨をイヤーと言いますから、jaが入ります。

だから、中国語の素養があったら、ja:イヤという表現をするかも知れませんね。例えば、李香蘭が歌った夜来香: イエライシャン。御嶽(おたけ)

松浪 御嶽。オンタケというのか、ミタケでいいわけですね。

平田 鹿児島では、ほとんどがオンタケですね。ミタケという所がありますか、県下に。

松浪 ミタケとルビが振ってありますので、そうかなと思ったのですが。

平田 オタケかオンタケという表現が普通でしょうね。ミタケというのは?

納 宗教では、ミタケ教というでしょう。

平田 あゝ、そうですか。

納 オンタケ教と言ったら、ミタケ教に直されましたから。

平田 あゝ、そういうのがありますか。どんな事でも構いませんから、疑問点は遠慮なく出してください。気付かないことも沢山ありますから。屋久にせよ安房にせよ、それから永良部にしても、意味が判らないものばかりです。こういうものを語源的に解説していくことの方が、無理なような気がするのです。なければ、小原(ほる・ごる)の方に話題を変えましょう。

## 小原（おばる・こばる）について

平田 小原さんが叔父さんのお葬式と叔母さんの入院とが重なり、動きがとれなくなって、昨日の夕方、原稿を持って見えました。皆さんによろしくとのことでした。彼が用意した資料を配ります。N0.7までと、「小原のよみ」という表があります。これは私が作ったものです。

教師になりたての頃、生徒の名票を読む時に一番困ったのは、オバラ、オバル、コバラ、コバルの区別でした。一人一人にそれを使い分けなければならないのですね。間違えると生徒がぶーっとふくれるので、一体どれが本当なのだと、小原という苗字には悩まされました。

それから鹿児島を代表するものに鹿児島小原節があるのですが、これも小原(ほら)とこの文字になるわけです。ところが鹿児島県のどこを見回しても、「オハラ」という地名はない。それと、有名な会津磐梯山の歌。「会津磐梯山は宝の山よ」という歌がありますが、あれの囁しことに「オハラ庄助さん何故身上つぶした。朝寝朝酒朝湯が大好きで、それで身上つぶした」という有名なのがあるのですが、東北の方にも「オハラ」という地名はないのです。福島県に気付かない地名があるのかも知れませんがこれは一体どこから来ているのだろうと、以前から疑問に感じていたわけです。

それで、この小原(ほら・ほる)のよみ徹底的に洗えば、日本語のひろがりというか日本語の変遷をこの小（お・こ）という表現は秘めているのではないかと考えるわけです。それで小原さんがいたので、この苗字をテーマにと助言したのです。角川の小字一覧から拾いあげていたデータを小原さんに送りました。彼がそれを市町村別にこういう表にまとめたのです。各市町村への問い合わせが済んでいない段階のようです。この例会の直前になって叔父さん叔母さんの不幸という事態で動きがとれなくなったと

と思います。彼は自分の苗字でもありますし、今後地図などが出来たら発表させてくださいということでした。

この表で仮名を振ってあるのは角川の小字一覧にある地名ですが、この角川の振り仮名というのは各市町村役場で安易に付けたのがあって信用できないものもあります。確実に知っているものあげて確かめて行けば、彼も調査し易いのではないかと思います。1ページから確かめて行きましょう。ご存知だったら教えて下さい。

鹿児島の田上町には、オバラ。宇宿町にオバラ・シモオバラ・カミオバラとあります。鹿児島市は大体オバラと読むのではないでしょうか。五ヶ別府ではなんと読むのですか。「中」はいわゆる中村。谷山山田の中村で現在の中山(ちゅうざん)になります。福元。谷山の人はご存知ですか。吉田はコバイ

出水は、オバルヤマ、オバル。小原田は二通りの意味が考えられます。小原の田圃と小さな原田。二つに分けて対処しなければならないだろうと思います。下大川内、これは後日確かめてみましょう。長島には、コワラというのがあります。東町にはないようです。

川内の人は、今日は見えていませんね。川内はコバルが多いようです。山田に尾原(ほる)がありますが、小原(こはる)と分けて表記したのでしょう。尾原という地名は、これは「尾」でなくて、本来「小」の意味ではないか。というのは、大崎に対する小崎ですが、小崎という地名がなかなか見当りません。ほとんどが尾崎と書いていますから、尾原は小原の当て字の場合が考えられます。

平佐・東手・西手。東手・西手は大字で、川内川の左岸にある隈之城川を境界として東の方を東手、西の方を西手と云いました。西手というのは隈之城一帯、東手は向田・宮崎一帯になります。

宮之城・久富木・山崎・船木はどうですか。ご存知ですか。東郷町宍野、樋脇町倉野・塔之原・市比野、薩摩町中津川。薩摩町にはオバラとコハラ。入来町浦之名と副田。祇答院町上手。おいやらんですか。串木野市の冠岳・上名・下名。郡山町の東俣・川田がコバル。松元町上谷口に小春があります。吹上町中之里・今田・小野・永吉・田尻。日吉町が吉利・神ノ川・山田・日置。東市来町長里。東市来町のはルビが振っています。オバラ・カミコハラ・シモコハラ・コハラビラ・オバラノシタ・コバイ・カミコハラ・シモコハラ・コバイ・カンコバイ。同じ町内でコハラとオバラ、それからコバイ、と。三通りあるようです。

市来町は、コバイ。コバルをコバイと読むのでしょうか。伊集院町はご存知ですか。加世田市は武田・内山田・津貫がコバル。津貫だけはルビがあります。枕崎市東鹿籠。川辺町のこれは上山田、カミヤマダですか、ウエヤマダですか（カミヤマダが正しい）。清水・神殿・野間。知覧町はコバリ。喜入町はルビがあります。開聞町は、コハラ。国分市はルビが振ってあるはず。肥後先生？

肥後 今、整理中です。重久は現地の後藤さんに聞いたら、コバルと云っているのですが、この両側はみな原(ほる)ですから私はコバイだと思うのです。

平田 なるほど、コバイでしょうね。

肥後 現地の人は、コバルというので、これには疑問符を付けているのですけど。

平田 下井のは、どうですか？

肥後 下井は、まだ見ていません。

平田 隼人町はどうですか？

藤浪 私も原(ほる)だと思います。十三塙原(じゅうさんつぼり)・宮之原(みやびら)、みな原(ほる)です。

肥後 この小字というのは公簿上のよみですか？

平田 これですか？

肥後 地元で言っているのか、これは役場の台帳

上のよみ？

平田 これは角川の小字一覧にルビが振ってあるものです。小字一覧は大抵執筆担当者が役場の台帳を見てるはずですから、台帳上のルビに拠っていると思います。だから当てにならないのが時々あるということです。

次は牧園町。ご存知の方はないですか。横川町、あの辺もコバイでしょうね。

肥後 原(ほる)が多いと思います。原(ほる)と読むのは福元の木場でしょうけど。

平田 コバイを標準語的にコバルと読むのですね。肥後 そうです。

平田 コバイというのは、ルビとしてはいかんのだろうと思ってコバルと書いたのでしょうか。コバル=コバイと考えていいのじゃないですかね。姶良町は、オバラ。寺師の小原田(ほらた)は小さな原田の意味が強いでしょうね。

肥後 どこですか。平田 姶良町の2番目にあげてある寺師の小原田という表現は大原田・小原田という意味の小原田。そうでなきゃ、小原(ほら)と読むのは鹿児島県ではちょっとおかしいと思います。

肥後 あ。平田 これは「小+原田」であって「小原+田」ではないということです。次の栗野町北方のはコハラ、吉松町はコバイ。大口市平出水は小原野(ほらの)。これも「小原+野」でしょうね。菱刈町はコバル。右に移って有明町野井倉、大崎町、鹿屋市、吾平町下名。串良町は大字。これは上小原(かみほる)・下小原(しもほる)というのですか？

永田 今はカミオバル・シモオバルというのでしょうかけど、私たちが小さい時はカンコバイ・シモコバイと呼んでいました。笠野原はカサンバイ、と。平田 それならば、カンコバイが正しいのでしょうか。地元での表現ですから。

永田 私は鹿屋出身ですけど、鹿屋から串良にかけては、カンコバイ・シモコバイと、呼んでいました。今はバス停留所をいう時は、カミコバル・シモコバルと言っています。

納 今、言やったとおりやんどな。私はカンコバイ・シモコバイと読んもんどんから、細山田の若け衆に聞いたとこいが若け衆はやっぱりカミコバル・シモコバルというふうに読んでいきますね。

永田 そうでしょう。今は停留所名なんかは、みんな、そのようにしてあるのです。私なんかはカンコバイ・シモコバイと言います。まぁ、方言ですけどね。バスの方では近代化した名称でしょうね。

平田 ははあ。正しくはカンコバイ・シモコバイ。それを現代風にアレンジしたら、カミコバル・シモコバルになる、と。それが正しいのでしょうか。それが正しいのだけど、これはオバルと読んだ方がいいと考えた人がカミオバルとルビを付けたのじゃないか。どうでしょうね？

納 土地の人はコバイと言いますか。カンコバイと言いますか。

平田 土地の人は、そういうけどーーー

永田 上小原(かみわら)と読むように、ルビを入れましょうね。

藤浪 内の宮内原(みやわら)。ミヤウチバイというのだけど確かミヤウチバルと訛ったようにしてある。

平田 訛ったような表現で、バイをバルに変えた。さて、コバルとオバルの関係だけど。

永田 笠野原(かさわら)の停留所名もそうですね。私なんかは、カンコバイ・シモコバイと、原(わら)というのを、バイと呼ぶ。

平田 原(わら)と読みますよね。

納 下小原(しもわら)の場合、シモコバイと云わずに、シモバイという。ということは、いけんごわすかな。私が聞いたところでは、シモバイという。コモオも、ひんぬくっとな。

永田 なるほど。  
納 シモオバルは、オが二つ重なるからして、オが一丁でシモバイになる。ひんぬけたとじゃなかろかないと解釈もするんですが。

永田 町役場に行って聞けば、小原(こはる)・上小原(かみわら)・下小原(しもわら)と、そっちの方をいうかも知れませんね。昔からそこを呼びよった人はカンコバイ・シモコバイという。

納 その紫原(むらさきはる)も一緒やんさん。あたいどんな、ムラサッパイ。この頃ん衆は、ムラサキバルと言やっとな。

永田 うん、ムラサッパイという。

平田 はい。結論めいたものが一つ出てきましたね。鹿児島では原(はら)という。それが近代的な表現では原(はら)というふうに表現されるようになった。そこで問題はコバルとオバルの違いですよね。これはどこから来たのかということ。オバルというのは恐らく角川の地名大辞典にあった表現だと思います。大字ですね。そうしたら、カミオバル・シモオバルと書いたのは、串良の執筆者。

永田 ははあ、やっぱい、そこもバイというのを嫌うのかも知れませんね。

平田 いや、コバルをオバルというふうに読んでしまったのでしょうか。そこで今度は、オバルが古いか、コバルが古いか、という問題でしょうが。そこまでは考え過ぎだったのでしょうか、地名の問題としては。串良の場合、カンコバイ・シモコバイというのが方言の表現であるけれども、現代的な行政的な表現としてはカミコバル・シモコバルと表記されるということでしょうね。さらに執筆者がコバルという言い方はどうも新しいから、オバルが古いのだろうと考えられたのでしょうか。そういう解釈をしておきましょう。

鹿児島の場合は、バイだ、と。それを一般的な表現とする場合には、バルという表現をする、と。

地名にルビを振る時には、バイで書いておった方がいいかも知れんですね。そしてカッコして(バル)とする。そこまでなら妥協できるということなんでしょうね。はい、ありがとうございました。

西之表、それから伊仙町。これもルビが振って

ありません。小原さんの今後の宿題としておきましょう。各市町村に問い合わせて、ルビが出そろってから又、この表を出してもらいましょう。ちょっと休憩しましょう。

小原のよみ 「小原のよみ」に7種類あるようです。おはら・おばら・おばる・おはる・こばる・こばら・こはら。これは何に拠ったかというと、人文社が出している都道府県別の大きな地図帳があります。3万数千円の分厚い分県地図があって、それに地名総覧が付いています。これは老舗ですから、読みはしっかりしていると思います。それから先ず拾いあげました。その他に角川の『日本地名総覧』があります。これも加えればよかったですかなと思います。それからアボック社という所が出した『日本地名索引』があります。これは5万分1図に出ている地名全部にルビを振って、北緯〇〇度〇〇分・東経〇〇度〇〇分という位置を細かく調べた作業です。この地名索引は10年ぐらい前に6万円したのですが、最近また案内が来まして2万5千分1図に出ている地名を全部まとめたものが刊行されたようです。同じ先生の仕事ですが、それが15万円というのでちょっと考えているところです。

肥後 15万円ですか？

平田 えゝ、15万円です(笑い)。これは凄い値だなと思いました。5万分1図から2万5千分1図に増えたわけです。それと、かつての陸地測量部と言っていた時代、参謀本部が作っていた時代の地図から消えた地名もまとめてあるのだそうです。目下考慮中なのですが。ただ、5万分1図地名の場合は鹿児島県の地名のよみには大分間違いがあるのです。間違いがあるというのは、金井先生という方が生物学の先生で、全国の生物学関係の先生や農学部関係

の先生と連絡をとって、作られたものだと思います。データを集められて、コンピュータを使ってアレンジされたのでしょうか、そもそもデータが鹿児島県の場合はいい加減なのが見られます。学生たちが集めたデータや市町村役場からのデータを鵜呑みにされている節が見られます。鹿児島県のよみには、すぐに気付く間違いが多くあります。折角いい索引を作られても、末端部の間違いがそのままなので、ちょっと二の足を踏むわけです。15万円の本を買って、それを訂正するのも大変ですので、どうしようかなと考えているところです。まぁ、凄い本が出てきます。

私が利用したのは人文社のデータです。アボック社のデータを付け加えます。申しあげますから「おはら」というよみの欄に、クエッシュン=マークを入れてみて下さい。まず福島県、埼玉県。それから中部地方に来て長野県、岐阜県。右に移って京都府、兵庫県。中国地方に入って島根県、岡山県、広島県。四国では香川県。九州に入って大分県、宮崎県、鹿児島県です。ところが鹿児島県には「おはら」という地名はないのです。九州にもほとんどないので、これは信用出来ないと思うのです。

次に「おばら」があるもの。右側の真ん中、鳥取県、島根県、それから山口県、徳島県、福岡県、鹿児島県。

次に「こはら」とあるもの。千葉県。右側の上の方、滋賀県。兵庫県、奈良県、島根県、鹿児島県。鹿児島県の「こはら」という地名には、まだ気が付いていないのですが。

そうすると、鹿児島県はオハラ・オバラ・オバル・コバル・コハラと重なって、集中しています。

今度は色を変えて、色を変えられますか。角川で出て来るものを追加します。オハラは千葉県に出て来ます。

肥後 どこですか？

平田 角川の『地名総覧』に、オハラが千葉県に一つ出て来るということです。二番目のオバラ。これが栃木・群馬・新潟・静岡・愛知それから大阪。それらが角川の『日本地名総覧』に見えます。これは確実だと思います。一番終りのコハラですが、山梨に一つ出て来ます。これは長野にありますから、あってもいいと思います。それから京都、鳥取、岡山にコハラが出て来ます。これらは信頼がおけるので塗りつぶしてもいいかと思います。

このように色分けしてみると、まず最初のオハラはアポック社のものが福島県に出て来て、小原庄助さんに合うのですがちょっと離れ過ぎています。また、オハラが九州にわんさと出て来るのはちょっと信用が出来ません。それは無責任な学生が書いたデータじゃないかなとも思います。

これらは全部各県に問い合わせて再確認する必要があるかも知れません。これを確認すると、オハラの範囲が判るとは思います。人文社のものでは富山・石川・福井それと近畿地方にオハラという読み方がある。越中富山の薬売りを通じてオハラというのが拡がったのか、北前船のルートでオハラ節が拡がったのかなという推定が出来るわけです。オハラという地名を探して行くことで、オハラ節のルーツが追いかけられるのじゃないか、という気がします。オバル・オハラの読みは重要だと思います。

それから●印。オバラは日本全国に拡がっていますが、九州では少ない。その代りに九州ではオバルが多い。一つ言えることは、オバルという言い方が九州では普通。オハルという言い方はほとんどなく、大分に一つありますが、これはあまり気にしなくてよい。

コバルは九州だけ。先程、カミコバル・シモコバルが出て来ましたが、これは日本全国の地名を拾つてもない。これに対して、コバラが近畿から中国にかけて見られる。コバラとコバルは、どちらも古い言い方なのでしょう。それが九州と近畿・中国との違いになりそうです。それから、コハラという言い方は非常に稀だということです。オバル・コバルの読みで、そう言ったことが結論づけられそうです。

その他に一般的なことでいうと、小野小町。これを「コノオマチ」と読む人はいないと思うのです。小田、小川も同じです。小川の場合、“春の小川はさらさら流る”で、春のコガワと読んだらおかしくなるのですが、東北の方では小川(こがわ)と読むのです。

それで、男・雄もありますから「小」地名という方がいいと思うのです。小川・小野・小田それから小原。現在、全国の「小」地名のカード作りをしているのですが、まだ関東までしか拾いあげておらず、あと半年ぐらいはかかるだろうと思います。見通しがついたら報告したいと思います。

現段階で言えることは、北海道には、この地名はないのです（小樽がある）。広々としていますからコバルとかオバルという地名は北海道にはほとんどない。小川もないんじゃないですか。

ところで国分市の場合、上小川(かみおかわ)があるのですが、この慶藩名勝考には「カミコガワ」とルビが振ってあります。その時も問題にしたのですが、今は子供たちは何と言いますか。カミコガワと言いますか。

肥後 でしょうね。子供は。  
納 もともと「カミコガワ」というのじゃないのですか。

肥後 私たちは昔から、カミオガワでした。

平田 老人はカミオガワなんです。カミオガワとか、カメガワというのです。

肥後 えゝ、カメガワ。

平田 ところが、小学校でスマートな教え方をして「カミコガワ」になっている。しかも裏付けに慶藩名勝考に「カミコガワ」とルビが振ってあるんですからね。一方、全国的に見ると、小川(こがわ)という表現が青森県にある。東北に見られるのです。

永田 カミコガワと言えば鹿児島弁的な感じがする。カミオガワといえば——

平田 さっきの上小原：カミオバル・カミコバルともかかわって来るのですね。日本全国の「小」地名を整理して行けば判るのでしょうか。要するに、東北は「コ」という読み方が主で「オ」という読み方はないのです。福島県と茨城県あたり、あの辺が「コ」と「オ」の境界になる。新潟県もその境界になります。「コ」と「オ」はどちらが先かを考えると、小野とか小川では「オノ」とか「オガワ」という読みが先で「コノ」ではなく、「コガワ」も東北だけにしか見られない。ということは、東北が経略されてから「コ」という表現は広まったわけです。

難しいのは、九州にだけオバルとコバルがある。他の所にはないのです。また、オバラとオバルを対比してみると、九州はオバル、他はオバラと言っていい。九州ではコバルというが、近畿・中国ではコバラという。そういう対比が出来ます。

そうした場合、オバルが古いのか、コバルが古いのか。これだけの表では決め手はありませんが、日本全国の「小」地名を分類したら、はっきり、形として出て来るのじゃないか、という気がします。その意味で、小原をはじめとする「小」地名は見逃

しには出来ないです。日本の言語学のスタートにつながって来るかも知れない。その意味で小川さん頑張って下さい。「小」地名は大切だと思います。

考古学的にみてもそうですね。大原が開けるのはずっと後ですから。小原(おほら)から開けて来るはずです。それから小野が先ず開けて、大野が開けるのは後。鎌倉時代以降でなきゃ大野は開けて来ないはずです。また大野原が開けるのは相当技術が進んでからだと思います。大が小を兼ねるのではなくて「小」が中心だということです。そういうことを申しあげて、後はご批判を受けたり、質問を受けたいと思います。

(質疑応答)  
青柳 田代町あたりの大原ですね、「オーハル」という言い方、あるいは「オーハイ」という言い方はあるのですか。

平田 さあ、何と言いますかね。聞いたことがありません。笠野原(かばね)は大きな原だけど。

肥後 大野原(おほら)があります。

平田 あゝ、大野原がありますね。

藤浪 大野原(おほら)とも言います。

坂本 吹上の中原(かばね)があります。

平田 中原ですか。

納 笠之原も陸地測量部の地図では名前が二つありますね。昭和10年頃のものは「ハイ」です。今の笠野原(かばね)。明治10年頃の地図には、壺屋と書いてあった。

平田 その話は今日配った46号に書いてあります。

永田 あすこの字名と停留所名が麓、白木。こちらから笠野原に行って、それから高山道に行く分かれ道に入り、ちょっと行って西俣。

平田 西俣ですか。

永田 はい、西俣。

平田 そこが新壺屋ですか。

永田 壺屋というのを嫌うのです。

平田 それはそうでしょうね。

納 新壺屋。近くですか。

永田 4km以上離れている。笠野原というのは串良ですからね。それからこっちの方は鹿屋です。

納 吾平には入らんとですか。

永田 いゝえ、吾平には入りません。大始良。

納 あっちは旧大始良。高麗の上と書いてある地図を見たことがあります。

永田 吾平町は昭和22年に變っていますね。それまでは始良。

納 さっき平田先生がいわれた角川の小字一覧。あれはさっき云やったごとく、土地でいう読み方じゃなく、わからんとがどしこでんあんさんなあ。

平田 そういうことですね。

納 鹿児島の人は方言でざっざっ言うてくるのが、あれは標準語で書いてあるからして、ちょっととまどう場合が出て来もんさんなあ。

平田 その辺が難しいのですね。土地の人がいわゆる鹿児島語で書いてあれば、他県の人はさっぱり判らんわけですね。だから、地名の意味が判るようにある程度くだいて標準語的な表現にするわけでしょう。そこで妥協してるわけですね。その過程の中で税務課の職員たちが自分たちの判断で振り仮名を振ったのがあるわけです。それがごっちゃになってるわけですね。一度台帳に作りあげてしまふと、それが公的な表現となってしまいますから小字の取り扱いというのは難しい問題があるわけです。

そのいい例が先程の串良の上小原(かにじい)になると 思います。上小原(かにじい)というのが本来の言い方だけでも土地の人たちはカミコバルと表現するようになった。ところがコバルは古いということで、オバルに地名辞典に書いてしまう。公的には「カミオバル」になってしまふのでしょうか。そういうことじゃないですかね。

納 新屋敷の樋之口(ひぐち)、トイノクチもそ

ですね。私が持っているのはMBCが出した市内資料ですが、あれに「鰐ノ口」と書いてありました。最近はどうですかね。方言で書いてもらえばねえと思うことがあります。角川の場合も小字が書いてあるのは余計にないでしょう。

平田 ほとんど書いてありますけどね。えーと、大阪府が全然書いていない。それから福岡県が抜いています。というのは、同和問題との関係で小さな地名まで出すとはということで、まず大阪府がはずしました。それについての弁明も出ています。日本全国の小字をリストアップする企てはそこでつまづいたわけです。

納 私は二・三の県のを見たのですがね。鹿児島県だけが書いてあったのです、小字は。私が見た他の県のものは小字が書いてないものだから。それで鹿児島を見て、鹿児島方言で振り仮名を振ってくればよかっただろうにねと、私も都合がいいのだがなと思ったのですが。

平田 鹿児島県の場合もね、相当ぬけています。担当者が報告していない所は収録されていません。

納 旧鹿児島市内は書いてないです。

平田 旧鹿児島市内は市役所も法務局も空襲で焼けて、台帳がないのです。だから鹿児島市の小字は消えている。鹿児島市の場合は真ん中の部分がぬけているわけです。

納 私のいる所は武ですが、台帳では迫尻という所です。

平田 武のあたりは脱けています(武町の小字名は小字一覧に収録されている)。

納 どこかで見たことがあったですよ。

平田 市内であるのは、吉野、坂元、伊敷、鴨池。坂本 谷山は残っています。

平田 谷山はありますね。真ん中の部分は空襲で全部資料を焼かれているわけです。だけど、復元されつつあるのじゃないですか。それを早くしなけれ

ばと思うのですが。

坂本 人名の「小原」。鹿児島県では「オバラさん」という人が多くはないですかね。

平田 オバラさんは多いですね。あゝ、そうか。オバラさんは多くても、オバラという地名はない。そうしたら、オバラは関東から下って来た武士団の子孫ということになる。こっちに地名がなければね。小山もそうですね。オヤマ・コヤマ。小山田：オヤマダ・コヤマダの区別もありますが、小山(おぼ)は栃木県の小山という有名な一族があります。その人たちがこっちに下って来ているわけですから、小山という苗字は由緒正しい。

納 伊敷の奥は、コヤマダ。

平田 あそこは、コヤマダですか。オヤマダじゃないのですか。

青柳 コヤマダです。オヤマダというのは聞いたことがない。

平田 聞いたことがない? 苗字は、オヤマダ。

納 苗字は、オヤマダやな。

平田 二中の時、習った先生は、オヤマダ先生。

肥後 小山田(おぼた)という姓は蒲生(よしの)に多い。

平田 姓はオヤマダですか。河頭の上はコヤマダですね。そういう細かいことを一つずつ確かめる必要がありますね。小山田(おぼた)の場合も小さな山田ですね。「小+山田」という解釈。オヤマダは小山の田圃、という言い方はおかしいな。地名の解釈としては「小+山田」が正しいでしょうね。

青柳 あそこは郡元に入るけど、小山下(おぼのした)という小字が書いてあったですよ。

平田 小山ノ下。

青柳 角川の小字一覧を見たら判るはずです。

平田 小山(おぼ)という地名があって、その下とということ?

青柳 小山ノ下(おぼのした)という地名が出て来るはずです。バス停もあれに書いてあるのでは。それ

はちょっとはっきりしないのですが。

平田 そうしたら、小山(おぼ)の麓にある田園という意味か? そのように「小」さいという地名は一筋縄ではいかん(笑い)。

肥後 国分に、今はもうないのですけどね、実高の所。山崎鼻(やまさきのな)の前に、小山前(おやままへ)・小山下(おやまのした)という地名があって、今はもう消えています。

平田 あゝ、そうですか。小山前(おやままへ)・小山下(おやまのした)。こういうふうにはっきり小山(おぼ)と判るのがあれば、決して「オヤマ」とは云わんのですけどね。

肥後 オヤマとは言いませんね。小山(おぼ)という小さな岡が田園の中にあったのです。山崎鼻の前に。それを崩して、現在はないのです。田園に変っている。

平田 このように苗字につく例えば小原、小川、小野。「小」という地名は一つの難問ですね。それからこの会に見える人たちでは、二見先生の「見」というのもよく判りません。面白そうなのは「口」江之口・山口・田口など。米原先生が見えていますが「原: ハラ・ハル」を区分しても面白いかも知れませんね、鹿児島県の。

米原 そうですね(笑い)。

平田 あゝ、コメとヨネの分類も面白いかも知れませんね。いつかお願ひします(笑い)。

米原 勉強します。

永田 鹿屋には米虫というのがありますね。

平田 はあ?

永田 米に虫。米虫(まいし)。

平田 そういう地名があるのですか?

永田 苗字が。

平田 それは面白い。

永田 あれは甘櫻丘の西ですね。えーと、飛鳥坐神社のそばですね。

肥後 どこですか？  
永田 奈良。飛鳥坐神社のそばに米虫という所があります。あの辺だと思います。それから、苗字の「寄」、山が上にあると横にある「崎」。「峯」も上と横の「峰」がある。どんな違いがあるのですか？ミネと言った時に、峯と峰。

平田 文字ですか？

永田 峠も上にあったり横にあったり（寄・崎）

平田 それは、あまり意味はないんじゃないですか。書き方によって反って難しく、凝った書き方をする人が上に書いたりするんじゃないですか。

藤浪 書写体によるー。

永田 故事・郡名で、今は峠とかいうて、寄は上だとかーー。

平田 それは苗字を付ける時に、どっちを付けるか、書き方によって選んだのではないですか。

藤浪 書写体があるので。山が横に付くのもあるし、上に付くのもある。松というのを峠と書いたりする。

米原 木を上に書いたりする。

藤浪 書く時の手法。

納 俗にいう異体文字でしょう。

藤浪 異体文字じゃないのです。異体じゃなくて書く時の文字の順序。

平田 書く時の文字というより、一つの遊びじゃないの？

藤浪 遊びじゃない。

平田 遊びと言ったら悪いから。あゝそうだ。その次の3月から6月ぐらいにお願いしこうか。コメとヨネの区別を（笑い）。半年ぐらい先だったら。

米原 1年ぐらい先にしとつて下さい。

平田 面白いテーマが出て来るんじゃないでしょうか。それに「稻」が加わったら、案外、稻作と結びつくかも知れませんよ。

米原 まずは「米」だけにしましょう。

平田 「原」は、小原が出て来ましたから。

米原 「米」は面白いかも知れませんね。

平田 米は面白いでしょうね。コメとヨネと。それからイネを区分したら。

米原 近所に「米田(続)」がある。

平田 あゝ、米田(続)があるな。

肥後 米田(続)は多いですね。とくに国分には。

米良(めら)もある。

平田 米良庄がありますね。これは、ただ、当て字だろうな。「メ」に意味があるのでしょうけど。久米もあるな。恐らく杉大なものになりますよ。じゃー、1年先を期待しきましょう（笑い）。

納 これはどういうことですかね。この表の2ページの上方から、川内のところに小字名で尾原(ほらゐ)と書いてありますね。その下の東手には下尾原(しもほらゐ)。これは何というか、日本語の音の場合にア行のオとワ行のヲがありますね。昔は音そのものが、あゝ尾は別か。音の関係でこういう書き分けをしたとは考えられないですか。

平田 音を書き分けると意味が違うわけですか。私はやっぱり、大崎と尾崎で説明しましたが、大崎という地名は沢山ありますが小崎はほとんどない。尾崎という地名が多いので、「尾」の字を当てたんじゃないかなという気がするわけです。確かに尾はwo:ヲですよね。本来の読みはヲだけども、ヲになってしまふ意味がどう違うのかなと思うのです。そこは判りませんが、どうですか。

納 昔の音韻においてオとヲと二つあったものが、実際は「小」の「オ」だったかも知れんが、土地の人は「ヲ」と言っていたから「尾」と付けたという解釈は出来んとですか。

平田 尾に対しては、頭ですね。頭原とか先原に対して、尾の原というはどういうものかな。原尻という意味はあるでしょうけど。

納 鹿児島方言の場合には、いわゆるヤ行のエと

ア行のエは、完全に言い分けしていますからね。共通語では同じエですけど。鹿児島語ではヤ行のエの場合、イエというか、イを軽くいうてエをいう。ア行のエの場合には、完全に上のイがひん抜けてエが強くいわれる。こういうふうにして昔は「ヲ」というのは現在のア行のオじゃなくて、ワ行のヲじゃなかったらしいとも思うのです。

平田 ちょっと難しい話ですな。

納 その後に文字を適当にくっ付けた。私の納の場合、初步的なことを申しあげると、甲突川の高麗橋、あそこの角に納病院というのがありますね。あれがワ行のヲで書いてあります。

平田 あゝ、オサメと。

納品 それから私の小学校1年生の時、ワ行のヲで書いてあったのです。

平田 名簿順は後の方ですか。

納 後で、オサメになったのですけどね。あそこだけが今でも「ヲサメ」と書いている。それで問題にしたわけです。

平田 そこまでは判りません。こういう当て字にしたんだろうなと軽く考えたわけです。まぁ、研究課題にしつきましょう。

青柳 北陸地方の小原(ほらゐ)ですが、越中小原節(ほらゐじぶつ)と、昔、ラジオで聞いたような気がするのですけど。

平田 オワラ節。オワラというのは、表の右端にあるように、鳥取県と大分県にオワラという地名があるのですね。

納 あれがありますね。人の名前、特に藤原。フジハラ・フジワラ。鹿児島の人はフジハラと言いますね。そして、テレビあたりで聞いていると、上方の人の話を聞いておれば、フジワラというのですね。それと一緒にじゃないですか。

平田 それもちょっと難しいよ。青柳さんのいう小原：オハラ・オワラはいい問題提起だと思う。こ

の会にも小原・米原と「原」のつく人もいるけど、藤原：フジハラ・フジワラ、菅原：スガハラ・スガワラ、萩原：ハギハラ・ハギワラも同じですね。人文社の地名一覧でも、ハラと読む所とワラと読む所は分かれますよ。日本全国を分けてみると面白いと思う。これと似たような分布が出て来るかも知れません。

納 これも考えられんかなと思うのですが。ハヒフヘホのハは、よくワに変って来ます。そして、ワがアに変るのです。「私は〇〇しました」という場合は、文字は「は」を書きますね。文字そのものは「は」と書いても、音として出す場合はワに変って来ますね。そのワが「私ア」という言い方にあります。こうして音がハ→ワ→ア、と。子音の関係でハはワに変ったのじゃないかという解釈は出来んもんでしょうか。

平田 鹿児島語の表現は難しいですね。オワラという表現は振り仮名を書く時には、オハラでしょうね。そして、読む時にはオワラと読む所があるかも知れませんね。

納 越中小原。

藤浪 オワラ。

平田 オハラ節でも？

藤浪 オハラ節とはいわんですよ。オワラ節という。逆に違うを強調しているんじゃないですか。

平田 鹿児島はオハラ節。

藤浪 うん、藤原は古今集を見れば、どう出るのでしょうか。ふじはら・ふじわら。

平田 それは菅原(すがはら・すがわら)・萩原(はぎはら・はぎわら)も同じ。鹿児島じゃ、どっちかな。はぎはら殿、はぎわら殿。

永田 ワラとハラと、区別がつかない人・地域がありますよ。

平田 それはあると思います。

永田 ズとツの問題もですね。鹿児島の場合はズ

とヅの区別がはっきりしている。ところが、向うに行くと、全く区別がつかんんですね。戦時中ですが、水(みず)の発音で、熊本の男もあればミヅだとはっきり言いました。ところが終戦後、ズに全部統一されましたね。ズとヅの区別がはっきり出来ないのでですよ。だから、ワラもハラも一緒であり、区別もつかない人間が多いと思うのです。

平田 それは多いと思います。それで、聞いたら  
ワラと書く人も、ハラと書く人も出て来るでしょう  
けど。まあ、難しいですね。しかし難しくてもこう

いうふうに分布を整理すれば、ごっちゃになっている所もあるけど、全国的に拾いあげて行けばある程度グループが出て来るのでしょう。まぁ、米原も面白いテーマかも知れませんよ（笑い）。

米原 大任ですね。

平田 いや本当、小原・小川も重要テーマ。来年は日本全国の小野・小田などをまとめてみます。

次回は藤浪さんに仏教関係地名の説明をお願いします。今日はこれで終ります。

## 小原の地名

鹿児島県 平成7. 9. 3

番号	市町村名	大字	小字とよみ	備考
鹿児島市	田上 宇宿町	小原（オバラ）		
		小原（オバラ）		
		下小原（シモオバラ）		
		上ノ小原（カミノオバラ）		
	五ヶ別府町	小原		
		小原		
		小原		
	中 上福元 下福元	上福元		
		下福元	上小原	
吉田町	本名	小原（コバイ）		
桜島町		—		
出水市	武元	小原山（オバルヤマ）		
		小原（オバル）		
		小原田		
		小原		
阿久根市		折口	小原	
野田町			—	
高尾野町		柴引	鈴小原	
長島町		平尾	小原岡（コバンノオカ）	
			小原（コワラ）	
東町			—	
川内市	麦之浦 五代 宮内	小原（コバル）		
		小原		
		前小原		
		前小原		
		小原		

番号	市町村名	大字	小字とよみ	備考
川内市	川内市	大小路	下小原	
			下小原	
			中小原	
			上小原	
			西小原	
		田海 山田	小原	
			尾原（オバル）	
			小原	
			小原	
			小春	
		平佐	小原迫（オバルサコ）	
			小原（オバル）	
			向小原	
			小原	
			下尾原（シモオバル）	
		東手 高江	小原	
			久富木	
			山崎	
			船木	
			小原	
		宮之城町	小原	
			小原	
		東郷町	宍野	
			倉野	
			塔之原	
			市比野	
			小原	
		鶴田町	西小原	
			東小原	
			小原	
			上小原	
			小原	
		薩摩町	—	
			—	
			—	
			—	
			—	
		入来町	小原（オバラ）	
			小原（コハラ）	
			小原	
			小原	
			小原	
		祁答院町	副田	
			上手	
			小原	
			—	
			—	
		里村	—	
			—	
			—	
		上飯村	—	
			—	
		下飯村	—	
			—	

## 小原の地名

鹿児島県 平成7.9.3

番号	市町村名	大字	小字とよみ	備考
	串木野市	冠岳 上名 下名	小原ノ前 小原 小原田	
	郡山町	東俣 川田	小原（コバル） 小原（コバル）	
	松元町	春山 上谷口	小原迫 小原 小春	
	吹上町	中之里 今田 小野 永吉 田尻	中小原 小中原 小原 下小原 小原 小原 小原 小原	
	日吉町	吉利 神ノ川 山田 日置	小原 小原 小原 小原	
	東市来町	長里 伊作田  神ノ川 湯田 美山 養母	小原（オバラ） 上小原（カミコハラ） 下小原（シモコハラ） 上小原平（カミコハラビラ） 下小原平（シモコハラビラ） 小原ノ下（オバラノシタ） 小原（コバイ） 上小原（カミコハラ） 下小原（シモコハラ） 小原（コバイ） 上小原（カンコバイ）	
	市来町	湊町 川上	小原（コバイ） 小原平（コバイビラ） 小原	
	伊集院町	下神殿 下谷口 太田	小原 小原 小原	
	金峰町		—	

番号	市町村名	大字	小字とよみ	備考
	加世田市	武田 内山田 津貫	小原ノ原 下小原 小原 小原ヶ谷 小ハル頭 小原（コバル）	
	枕崎市	東鹿籠	小原	
	川辺町	上山田 清水 神殿 野間	小原ノ上 小原 小原 下小原 小原比良 下小原 上小原 小原田 小原	
	知覧町	永里	小原（コバリ）	
	大浦町	大浦	小原下 小原 小原迫	
	笠沙町		—	
	坊津町		—	
	指宿市		—	
	喜入町	中名 前之浜	小原（コバル） 小原（コバル） 小原（コバルノハナ） —	
	山川町		—	
	開聞町	十町	小原（コハラ）	
	頴町		—	

## 小原の地名

鹿児島県 平成7.9.3

番号	市町村名	大字	小字とよみ	備考
	国分市	重久 下井	小原 小原	
	隼人町	松永	小原平(コバラヒラ)	
	福山町		—	
	霧島町		—	
	牧園町	三体堂 上中津川 持松 "	上小原 小原 小原迫 小原山	
	横川町	下ノ "	小原(コバイ) 小原山	
	溝辺町	麓	小原(コバル)	
	加治木町		—	
	姶良町	木津志 寺師 鍋倉	小原ノ下(オバラノシタ) 小原田(オハラダ) 小原町(オバルマチ)	
	蒲生町		—	
	栗野町	北方	小原(コハラ)	
	吉松町	川添 川西	小原 小原(コバイ)	
	大口市	平出水	小原野(オバラノ)	
	菱刈町	川北	小原(コバル)	

番号	市町村名	大字	小字とよみ	備考
	財部町		—	
	大隅町		—	
	末吉町		—	
	輝北町		—	
	松山町		—	
	志布志町		—	
	有明町	野井倉	小原	
	大崎町	益丸	小原田	
	鹿屋市	下祓川町	小原 小原ノ上 小原新田	
		永小原	—	
	垂水市		—	
	高山町		—	
	吾平町	下名 上名	小原田(コハラダ) 下小原	
	串良町	上小原 下小原	—	(おばる) (おばる)
	東串良町		—	
	根占町		—	
	大根占町		—	
	田代町		—	
	内之浦町		—	
	佐多町		—	
	三島村		—	
	十島村		—	

## 小原の地名

鹿児島県 平成7.9.3

番号	市町村名	大字	小字とよみ	備考
	西之表市	安城	小原	
	中種子町		—	
	南種子町		—	
	上屋久町		—	
	屋久町		—	
	名瀬市		—	
	伊仙町	小島	里小原 小原 小原 小原	
		崎原	—	
	徳之島町		—	
	知名町		—	
	龍郷町		—	
	瀬戸内町		—	
	住用村		—	
	喜界町		—	
	笠利町		—	
	宇検村		—	
	天城町		—	
	大和村		—	
	与論町		—	
	和泊町		—	

小原のよみ

	おはら	おばら	おばる	おはる	こばる	こばら	こはら	
北海道								
青森		●						
岩手		●						
宮城								
秋田		●						
山形		●						
福島		●						
茨城		●						
栃木								
群馬								
埼玉		●						
千葉								
東京								
神奈川		●						
新潟								
富山	◎	◎						
石川	◎							
福井								
山梨		●						
長野		●						
岐阜								
静岡								
愛知	◎							

	おはら	おばら	おばる	おはる	こばる	こばら	こはら	
三重	◎						◆	
滋賀	◎						▲	
京都								
大坂		●						
兵庫	◎							
奈良	◎	●						
和歌山	◎							
鳥取	◎							
島根		●						
岡山		●						
広島		●						
山口		●						
徳島								
香川		●						
愛媛								
高知								
福岡					□			
佐賀				○	□			
長崎				◇	□			
熊本				○	□			
大分				○	□			
宮崎				○	□			
鹿児島				○	□			
沖縄					□			

# 地名研究会報

第5.5.1号

平成8年12月1日

鹿児島地名研究会

I. 第51回例会 平成7年12月3日(日)

(出席者) 青柳俊二・納栄蔵・木場武則・永田典男・花園正志・肥後芳尚・平田功美子・平田信芳・二見剛史・松山健(計10名)

II. 豊藩名勝考読会 P.175 ~ P.178

(問題となった地名および事項) 檜木・橋・日向国・志布志・延喜式記載の行程・末吉の住吉神社・鹿児島の範囲

## 檜木(あき・あき)

納 この中に出て来る檜原(あきはら)は確定的ですね。檜(あき) 小学校というのがありますね。あれと同じ?

平田 同じです。今、「あおき」と云われましたね。祝詞では「あわきがはら」と聞こえるのですが、

納 祝詞は「あわき」ですね。

肥後 普通は「あおき」と読みます。「あわき」と読むかも知れませんね。

藤浪 隼人町内(うち)には青木神社がある。

花園 末吉の方に檜(あき)神社がありますね。

平田 あゝ、そうですか。神主が読む時には「あわきがはら」ですよね。

花園 祝詞ではね。

平田 祝詞でいうように「あわきがはら」で理解しているのですが。木は檜木(青木)でも祝詞ではいつもきまって“筑紫の日向の橋の小戸の檜原に坐ます——”

## 橋(たかはし)

納 その橋ですね。橋はどういうものですか。宮崎に行けば橋通りですか、橋町ですか。そういうのがありますね。あれと橋とは関係があるのですか。

平田 宮崎市にあるのは橋通り。普通にいう橋は蜜柑系統の花でしょうが。

納 私は今でも蜜柑を橋と言います。

肥後 昔からあったでしょう、橋は。

平田 あったかも知れませんね。九州には橋の地名・苗字は多いようです。日露戦争で有名な橋中佐の出身地の橋湾がありますからね。

## 日向国

藤浪 前回読んだのでは、筑紫国・豊国・肥国・熊曾国四つだったと思うのですが。

平田 面四つと言いながら実際は五つじゃないかということ。日向国がないのはおかしいという問題。

藤浪 いや、日向国は入っていないというか、続

きが違うような気がします。原文を見ればいいの

平田 古事記の原文は面四つと言いながら実際は

五つじゃないかということですね。

藤浪 「肥国謂建日向日豊久土比泥別」と書いて

いるのですけどね。

平田 豊国は豊日別。肥国は?

藤浪 速日別ですね。肥国謂建日向日豊久土比泥

別とも書いてある。

平田 古事記を調べては来なかったけど。

藤浪 そこがちょっと違うような気がします。

青柳 速日別というのが、ないですよ。

藤浪 ないですかね。

青柳 はい、ありません。だから、おかしな表現になっている。

平田 速日別がない。

藤浪 ここがちょっと違うような気がします。

平田 「肥国謂建日向日豊久士比泥別トアルヲ以テ日本ノ日向国謂豊久士比泥別トハ錯文也」

藤浪 古事記には確かに日向は肥国の中に入れ込んでいたような気がするのですがね。

青柳 「建日向日豊久士比泥別」というのが肥国になっているのです。

藤浪 そうでしたよね。

青柳 そして熊曾国が建日別みたいだったですよ。

平田 建日別がない。(古事記原文にない)

藤浪 日向国がないのですよ、確か。「日向国謂」という所がなくて。

平田 あゝ、それがないの。

藤浪 肥国謂建日向日豊久士比泥別。

平田 そうすると、面は四つ。

藤浪 確か四つです。ここで日向国が分かれるのですよね。建日向というのと豊久士比泥と。

平田 今まであまり考えたことがないから、神話の時代のことはそのまま読みすごしていた。

藤浪 ここは以前からこだわっているのですよ。

青柳 熊曾国とここに書いてあるのは、歴史では南九州に限定されるようなものだったのですかね。

藤浪 私は逆に日向国と熊曾国は古くからあるいはしなかったかとの考えを持っているのです。だけど

宮崎県の人たちは、日向国は宮崎の方などの考えが強いですね。それで大隅国が出来た時は日向国の四郡が分かれますよね。肝属・贈於などの四郡。あれを考えた場合日向国と熊襲族とは結び付く。そして後に日向国民なのか。

平田 ははあ。

藤浪 『続日本紀』をみると、明らかに大隅国は日向国から分かれています。

平田 そうです。

藤浪 古事記の国生みの話では解釈が重要だけどいろいろあるみたいですね。

納 いわゆる隼人ですね。普通、鹿児島では薩摩隼人という意味に使っていますね。あの頃は薩摩隼人というのではなくて。

平田 阿多隼人ですね。

納 阿多隼人と大隅隼人の二つしかないでしょう。

平田 最初はね。

納 それで大隅隼人というのは本来日向の中にあって、それから分かれて来た、と。そういう解釈。

藤浪 そうです。

納 私もそのように思っているのですがね。

藤浪 それで解釈出来るのじゃないでしょうか。そんな感じですよね。少なくとも大隅国が日向国より分かれるのであれば。その後の日向隼人をどの段階でそう呼ぶのか。日向神話というのも宮崎の方に固定しないで、南九州の神話として加えていいのじゃないかという気もするわけです。

志布志(しゆし)

納 方言から考えた場合、志布志は昔から大隅というふうに考えられるんですが。あすこの方言を聞いとったら、かなり宮崎県とアクセントが似どるのです。それでなんというか、大隅も日向も昔は一緒じゃなかったろうか、と。

藤浪 志布志は南諸県郡です。だから日向国です。そういうふうに考えられているのですね。

平田 うーん。どこからどっちの言葉になるのか分からんよね。

藤浪 言葉は、ある程度影響し合いますからね。島津が征服すればこっちの言葉：鹿児島訛りが行くでしょうし。問題の志布志は南諸県郡ですね。

永田 志布志は今も都城経済圏ですよね。というのは、言葉が鹿屋あたりとは違っている。都城と志

布志は同じです。ちょっと語尾をあげる話し方です。鹿屋方面の言葉と志布志の言葉は違っている。語尾があがる。

納 あっちの方では一つの川で変りますからね。

藤浪 内之浦は？

永田 内之浦は、やっぱり浦の方だから。

平田 あの辺で極端に変るのは、どこですか？大崎と串良は、どうなんですか？

納 えっ？

平田 大崎と串良。大きな違いの境界は、肝属川それとも菱田川ですか？

納 菱田川でしょうね。

平田 境界になるのは菱田川？

納 串良の向うの川は、菱田川。

永田 大隅国を中心は最初は菱田川の流域だったが、それが国分の方に移ったと思います。

平田 そうですね。

延喜式記載の行程

青柳 176ページの下の方に、延喜式行程上十三日、下六日とありますが、これは十二日ですね。

平田 あゝ、これはミスですね。

青柳 それと、これは何と読むのですか。

平田 周匝(しゅうそう)。回りがということ。

青柳 これはどういうことですか。これは書いてないです。

平田 これは別です。延喜式には、こんなことは書いてない。

青柳 延喜式と書いてあるから、この方が見られたのは、こんなことも書いてあるのですかね。

藤浪 注釈本だろう。これは。

青柳 この行程というのは延喜式の本文でなくて。

藤浪 注釈本じゃなかろうか。

青柳 そうですよね。それで馬の行程で、荷物を持った時が十二日、帰路が六日と読みたいのですけど。運送貨の規定がありますから、運送貨を基本と

して日数で割っていけば概略計算できます。大体、延喜式の行程は一致しているところもあるし、違っているところもあります。そういう距離が書いてあったとすれば、別の本もあったのですかね。

平田 いろんな注釈はあったかも知れませんね。

藤浪 九条本などは注釈が沢山入っていますね。

平田 和名抄にあるのを書く場合もあるでしょうからね。これは日向国の周囲が二百八里三十三間。昔の人はよく歩き回っているね。

青柳 周囲にはならないですね。二百八里というのは。海岸線だけにしては少し短いような。。

平田 この場合の一里は、六町=一里？

青柳 550mですかね。昔の一里、多分。

納 一里は三十六町で。

青柳 六町=一里。

平田 そうしたら、この二百八里三十三間というのは、どこからどこまでの距離？大宰府から日向国までということ？宿題にしちゃいましょう。

末吉の住吉神社

藤浪 末吉の住吉神社というのは山の中にあるのですが、どんなものですか。

平田 僕は行ったことはないけど、この住吉神社は新聞でよく流鏑馬が紹介されます。先日も中学生が二人射手になったと新聞に載っていたけど。

藤浪 此処ですか。

平田 此処と高山(四十九所神社)と吹上(大汝牟遲神社)で流鏑馬が行なわれている。

藤浪 住吉神社といえば大体海のそばですよね。

平田 住吉神社については日本全国の分布を調べようと考えているのだけど、一向に暇がなくてまだやっていません。これは大伴氏と関係があるんじゃないの。どうだろう。春日神社は藤原氏、天神社は菅原氏とよく云われるけど、住吉神社は大伴氏じゃないのかな。というのは万葉集に大伴家持が「大伴の御津云々」と詠んでいるけど、御津は住吉神社が

ある所じゃないかな。ほとんどが忘れられているのだろうけれども、大伴氏と密接な関係がある所じゃないかなと思っている。普通は、なんていうかな、航海の神様といわれている。

花園 縄津見神になるのじゃないかな。住吉大神というのは。住吉神社の祭神は。

平田 そうです。現在は北海道に多く見られる。明治になってから移った神社でしょうけど。本来は渡津海。大伴氏というのは、あちらこちらに船に乗って遠征に出掛けているんじゃないの？

藤浪 御祭神は外筒男命と中筒男命と表筒男命でしょう。そして「つつ」というのは「夕星(ゆうか)」というのもあるし、星の神格化という説もあるようです。星を見て遠洋航海をしたのでしょうか。

平田 宗像三神と似てますね（宗像は女神）。

藤浪 そうですね。問題は海と関係があるはずだが、末吉といえば陸地の方ですよね。

平田 うん、陸地の方だけど。

藤浪 そこらあたりが、どういうことなのか。

平田 大伴氏の荘園だったら住吉神社を建ててもいいわけだけど。

藤浪 神社はやっぱり、ことさらに御利益を言いますからね（笑い）。御祭神とか御利益とか離れた神社というのはないんじゃないですかね。

平田 それはそうだね。末吉は山の中だから、どうして住吉神社があるのか、だ。

藤浪 この檍原と結びつけていますよね。イザナギが穢れを祓った時に、上の方でゆすぎをして表筒男命が生まれ、中に潜ったら中筒男命が、底に潜ったら底筒男命というふうに生まれて来る。そして、小戸の檍原に来るわけです。うちの方の青木神社もそこでお祓いをする。

平田 なるほど。

藤浪 地名というのも、かなり神社によって。

平田 ひっ付けているわけね。

藤浪 関連がありますよね。縁起などでもむしろ強調している。

青柳 大伴氏というのは薩摩国正税帳に出て来ますよね。

平田 出て来るでしょうね。

青柳 それで思いつきだけど、薩摩国正税帳に大伴氏が出て来る所がどこかと思って。その郡というのはどこか判らないけど、あるいは今の姶良郡あたりが含まれていたらあり得る話だと思いますよ。

（註：加世田市および姶良町で「伴」の墨書き器が出土している）。

#### 鹿児島の範囲

平田 現在の姶良町が鹿児島に含まれることはないでしょう。

青柳 ひょっとしたらあるかも知れない。なんというか、神造島が爆発しましたね。その場所については「薩摩と大隅の界」と書かれていますが、それをまとめて信じたら国境線とみててもよいわけです。ところが従来ずっとこの点が無視されているような気がします。

藤浪 それは、この『寛政名勝考』で白尾国柱が指摘してますね、今のそのことを。だから鹿児島の領域が国分・隼人まで来ていたのではないか、と。大隅国が出来て、桑原郡と姶良郡が段々出来て三つの郡になっていきます。そして、いわゆる鹿児島という名称は後退してこっちの方に来てしまった。正八幡は、正式には鹿児島神社ですからね。鹿児島神社という名称が何故あそこに残ったかということは今出た考えをすれば成立つではないか、と。いわゆる鹿児島郡が湾奥の方にまで。

平田 それまで鹿児島郡が拡がったというのは無茶じゃないかな。

藤浪 それはすでに江戸時代に国柱が述べています。そうでないと、あそこに鹿児島神社という——

平田 いや、僕はそうは思わないよ。桜島の古名

を鹿児島だとすれば、鹿児島をご神体とする神社がどこにあったって構わないわけだからね。鹿児島神社がある所が鹿児島郡の範囲と考える必要はない。

藤浪 『続日本紀』の大隅・薩摩界の鹿児島の信爾（シンニカシジカどちらか判りませんけど）村に島が三つ化成したとあったこと。それが小島であればそういう説が成立つのじゃないか、というのが『寛政名勝考』に述べられている。

青柳 鹿児島郡が拡がったというよりも、それにこだわらずに、鹿児島は垂水にあたり鹿児島にあたり隼人にあたりするけど、それは別にして薩摩国と大隅国との境界はやっぱりいう通りに信じて神造島で分かれているんじゃないかと考えたら。

平田 それはね、隼人町の沖の三つの島と先入観を持つからであってね。神造島なんていいのは桜島の沖では大噴火のたびに島が出来たり入ったりするわけだから。大隅・薩摩の界と言ったら、桜島はちょうど大隅国・薩摩国の界にあるわけだからね。

青柳 それでは話を減茶苦茶にして、どこだろうかということになる。

平田 そういう話になる？

藤浪 私はね、例の大穴持神を祀ったこと。あれを重要視しているのです。正八幡：鹿児島神社より二百年ぐらい前に既に大穴持神社は官社と定められていますからね。そして一方は小社、一方は大社。鹿児島神社は大社ですーと続いて来ていますからその辺は非常に重要なところとして考えた方がいいのじゃないかと思うのですが。

永田 古代史では地域を区分するのは難しいのじゃないですか。

藤浪 それは難しい。

永田 だから、点ですよね。

平田 だけど、郡というのはやっぱり一つの自然境界ですよ。それが極端に大きくなったり小さくなったりすることは、長い歴史を見るとそう考えら

れない。

藤浪 だから分割してますね。菱刈郡が出来たり、桑原郡が出来たり。

平田 それはある。だけど、その変遷をたどってみると、そんなに極端な変化は少ない。例えば出水郡はほとんど変わってないし、薩摩郡だって高城郡と薩摩郡と川内川を境界にして分かれる程度。日置郡も海岸線一帯に限られているしね。

藤浪 現在の姶良郡はかなり薩摩国の方に入り込んでいますよね。吉松、栗野、横川それから蒲生と。

平田 例えば吉田。吉田は戦国時代までは大隅国で薩摩国に入るには江戸時代になってからですね。だから、吉田と吉野の間が大隅国・薩摩国の境界になる。それで、大崎鼻、平松神社は。

藤浪 平松神社は姶良ですよ。

平田 あれは吉野村に入ってるのじゃないの？

花園 吉野かな？

藤浪 神社は？心岳寺は？

平田 あれは吉野村に入っているのじゃないの？（現在は鹿児島市吉野町）。まあ要するに少しは政治的なかけひきがあるけれども、自然の境界としてはあそこが大隅国・薩摩国の境界だと思うけどね。

そして郡が小さく分かれて行く場合も、やっぱり川を境界にしたりするでしょうからね。僕はそんなに郡域が大きくなったり小さくなったりするというの、あんまり考えられないと思うけどね。

青柳 私もそう思います。鹿児島郡が大きくなったり小さくなったりするという、今の何というかな姶良町や吉田町あたりを含めて、一つの郡があってそれが8世紀の後半に桑原郡に合併したのかなと思うのです。そう考えたら、あるいは成立つ考えだという気もします。

平田 いや、桑原郡は贈於郡から分かれるわけでしょう。

青柳 分かれたというの私はちょっと。桑原は

桑原という地域が昔からあって、桑原です。桑原郡しかないし、贈於郡から分かれることもないし、もともとそういう地域がいくつかあって、それがどういうふうになって来たかが筋だと思います。

平田 今のは、こういうことよ。日向国から大隅国が分かれた。四つの郡を割いたわけです。大隅国が出来た時は四つの郡。その中には桑原郡となる所も初めは贈於郡の範囲であったというふうに理解しなければいけない。だから、贈於郡から桑原郡が分かれたという表現になる。

青柳 鹿児島郡が大きくなったり小さくなったりする話がおかしいとすれば、贈於郡が大きくなったり小さくなったりするのもおかしい、と私は思うのです。何故そこを言わないので。

藤浪 分割でしょうね。(笑い)

平田 問題は大きくなったりするわけではなく、大きかったものが二つに分かれて名称が変って行くということでしょうけど。

藤浪 なかなかね。

## 隼人町の仏教関係地名

隼人町の仏教関係の地名を考察してくれとのことで前回の時にお受けし簡単に考えておりましたが、一つの筋道立てることが出来なくて困りました。また仕事も忙しい関係で、ろくな考察もしていませんので非常に恥ずかしい話なんですが、日頃思っていたことに関係資料を付けただけのことです。その点はご容赦を願います。

No.2に小字地図を出しておきました。隼人町の方と南の方は端折ってあります。ただ関係がありそうなのを万遍なく拾って面白くないし、意味もなさそうでしたので、皆さんにも知って頂ければ後々参考になるのじゃないかと考えて一つだけ取りあげてみました。それと、取りあげる内容自体もこちらの方ではまだ研究されていないようです。

永田 本来薩摩国にあったものが日向国が出来て残ったものが鹿児島郡になったのではないですかね結果的にみると。

平田 現在の鹿児島郡は吉田と桜島ですが、もともとは吉田も桜島も大隅国です。それを除いたのが鹿児島郡。あと、もう一つ谿山郡がありますね。旧谷山市が谿山郡で、谿山郡と鹿児島郡の範囲を現在鹿児島市と言っているわけです。

永田 今はそうでしょうけど。

平田 今の鹿児島市は、昔の二つの郡域を占めている。

永田 都市が出来る時は周辺の郡を吸収しどるわけですね。吸収しないのが以前のままで残っているという形でしょうね。

藤浪 それがありますね。

永田 東桜島が鹿児島市に入ったから、桜島町が鹿児島郡として残った。

平田 前半はそれくらいにして終りましょう。

## 藤浪三千尋

それで「道場」という地名を拾ってみました。場所はNo.2の真ん中のところに新田山(しんでんやま)とあります。その横が隈城(くまじょう)。これらあたりはいわゆる山城で、笑隈城(えみくわじょう)になります。とくに南北朝時代：1300年代に、島津氏久公と向いある姫木城にいた税所一族が戦った場所で、大体、ここに三ヵ年、氏久公が在陣されたと記録にあります。

その間、下にあった正興寺という臨済禅のお寺に持国天とか増長天とか、いわゆる二天を寄進したという記事も残っています。その山城の下の方に「道場」と書いたのがあります。その下が「覚玄口」。两者は関係がありそうなんですが。

それで道場といえば、今では武道場とか柔道場とかを道場と言っているわけですけれども、辞典を見

てみると、No.1のところに、これは仏教用語辞典だったと思います。①の解説ではボディマンダ「悟りの座」の訳。菩提というのは悟りのこと。梵語です。ブッダが成道した場所「菩提座」「菩提道場」ともいう。これが仏教的解釈のおもな部分です。②修業の場所、転じて寺院の別称。次の引用は省きます。補説のところ、道場が寺院の別名になったのは『仏祖統記』三九、隋の大業九年「天下寺を改めて道場という」に由来すると書いてあります。「わが国では寺院と道場を区別し」とあり、次のところが大事だと思います、「在家のまま（家にありながら）本尊を安置し、若干の仏事を行なうところを道場とし、僧尼令では僧尼は寺院に住すべきで、別に道場を建て衆を集めて教化し、妄りに罪福を説いてはならないと規定されている。しかし、法然の時代以後には念佛僧は多く道場に居住して、念佛して教化活動するようになり、寺院が念佛道場といわれるようになった」と。これらあたりが正八幡宮の近くにある小字「道場」のように思います。

それで、一般的には、時宗の方でよく「道場」というと聞いておりましたので、それを確認するために資料を付けてみました。正八幡宮というところは時宗に関係が深い所です。時宗の方で重んじている神社があるわけです。一遍上人が悟りを開かれた場所になりますが、和歌山の熊野大社、あそこが一つと、もう一つ、九州では大隅正八幡宮になります。そういうことで大隅正八幡宮は時宗にとりましては聖蹟であります。いわゆる尊とい場所です。尊とい場所ということで、時宗関連の遺物なり遺跡が結構あります。

それで「道場」に関する資料、No.3の左の方にあげました。これは三国名勝図会をコピーして切り抜きました。笑隈山正興寺。笑隈山、これも非常に意味がある、場所を推定するのに都合のよい山号だと思います。内容を読んでみます。「内村にあり。

（宮内村ですね）。曾於邑、時衆宗」（この時衆宗というには鎌倉時代では「衆」を使うようで、江戸時代頃になると「衆」を抜いて「時宗」と言って来らしいです。一応そういう意味で区別しているようです。ここでは時衆宗と経過的な表現がしてあります。「念佛寺の末なり」。念佛寺は後で説明します。「本尊阿弥陀如来」。時宗は浄土系の宗派ですから西方浄土の阿弥陀仏を本尊としているわけです。「開山は陵阿和尚、遊行上人廻歴の時、正宮へ参詣して勤行をなす。是遊行世々の恒例たり、故に宿坊として貞和二年の開基と云」。貞和二年は南北朝時代になります(1346年)。神奈川県の藤沢が時宗の本山ですが、そこには時宗の坊さん達の過去帳があります。こっちの方に関連した記述は、大体南北朝ぐらいから出て来るようです。

そこで、この正行寺が「道場」のところにあったのではないかと考えられます。それで一つ付け忘れたのですが、No.2に返って下さい。実はもう一つ、正興寺というものが鹿児島神宮の近辺にあります。この寺（正興寺）も臨済禪宗の寺としてあったわけです。これとよく混同してしまって、どれだろうとある程度研究に入った方もよく書いておられるんですが、こちらは禪宗です。いわゆる桂庵禪師。伊敷の桂庵公園に墓があります。それから三~四代後の南浦文之：文之和尚、この方が出たのが正興寺です。これとは違って、正行寺というのがあります。

それを確かめが出来るのは、国分の史料に『道帳』ということがあります。文政六年(1823)のものです。これに国分郷の場所々々・辻々の道路の幅とか方向が書いてあります。その中の内村のところにちょっと大事なのを入れ忘れています。機会があればコピーして補足します。「正宮の石橋の元より北正行寺の下まで新田溝土手九尺通り」というのが抜けております。石橋・新田溝というのが宮内原新田の用水路です。そして私どものあります歴史

民俗資料館に沿う石体神社やら卑弥呼神社に向って行く新田土手を指しているわけです。そして北の方に正行寺があると書いてあります。ですから正行寺は江戸時代まで確かに実在したということが、これからうかがえます。

それからNo.2に載せた内村の中に、角玄堂というのが載っています。覚玄堂が角玄堂になっております。小字の方は覚玄と書かれていますが、同じものだろうと思います。時宗道場の小さな御堂だと思いますが、角玄堂というのが『道帳』に出て来ます。祀っている仏様でも判ればもっとはっきりするのですが。場所も「道場」の近くです。

もう一つ、正行寺の史料ですが、No.3に天保十三年の「時宗寺院明細帳、薩州淨光明寺」というのを出しておきました。図書館にあるんだそうですが、私は詳しくは見ておりません。それに「松平大隅守領分、大隅国桑原郡内村正行寺」、年代はそれにある通り天保十二年(1841)。正行寺の宗玄という坊主がいたことが判ります。それともう一つ「当寺之儀沢喜三太神領高之内ニ而、寺領無御座候」とあり、沢氏が管理をしていたことが判ります。この沢氏といふのは正八幡宮の四社家の一つです。四社家とは桑幡氏、留守氏、沢氏、最勝寺氏。沢氏はいわゆる正八幡宮からの上納を取扱う田所職を世襲していたといわれます。沢さんのお屋敷というのは「道場」「覚玄口」と見ましたが、その右のところに「沢最口」という小字があります。そこらあたりです。そして「沢」という文字のあたりが、いわゆる沢家墓地です。そこには鎌倉時代の板碑が四つあります。嘉祐三年(1237)という梵字を伴った自然石柱塔婆があります。板碑もそれよりちょっと後になると推定されています。ここにも時宗関連の南無阿弥陀仏名号の二つの石柱塔婆があります。これは室町時代のものですが、今日は付けませんでした。ちょっと時間もなく、資料も繁雑になるので付けませんでした。

それと、この沢家の板碑には南無阿弥陀仏名号が墨書きされているのがあります。この墨書きをいつ頃と見るのか、建てた後から書いたものと見るか、書いて建てたのかと、推察が二通り出来ると思うのですが。この板碑を見ると、埋もれている部分の下まで墨で字が書いてあります。埋もれているところは薄くなっています。多分書いてから設置したのじゃないかなと推測しているのです。もし建てたまま後から書くのであれば、上の方に南無阿弥陀仏まできっちり字は書かれるのじゃないかと思うのです。南無阿弥陀仏の文字は、時宗の書体と共通しています。むしろ私は後から書いたとする方が年代的にも合うと思います。何故かというと、嘉祐三年(1237)とか延祐元年(1239)という石塔がありますが、時宗の一派上人が活躍する時代というのは、40年程後になります。その頃書かれたとすれば都合がいいわけなんですが、そもそもいかないよう今後も研究が必要かと思います。

もう一つあるのですが、話がこんがらがりますので一応正行寺にしほります。正行寺を証拠だてる遺物等はないわけですが、一つだけ関連があるものを出しておきました。No.3にコピーで自然石柱を載せました。写真がよく出ていますが、その自然石柱には「当寺十五代但阿無伝」という銘が入っています。これは正行寺とは書いていないのですけれどもこの戒名の「但阿」という書き方は時宗に関係する表現なんです。その右の方に眼阿弥陀仏とか重阿弥陀仏とか覚阿弥陀仏、珠阿弥陀仏、陵阿弥陀仏とあります。但阿というのは但阿弥陀仏の略ですね。

時宗の方々が亡くなると、こういう法名を、法名と言ってよいのでしょうか、そういう言い方をします。その上のいわゆる「淨光明寺の由来」と書いたところに島津始祖の忠久から二代忠時、三代久經、四代忠宗、五代貞久とあります。皆、時宗様式の仏号を持っています。道阿弥陀仏とか仁阿弥陀仏、

それから義阿弥陀仏、仲阿弥陀仏、道鑑阿弥陀仏。「淨光明寺の由来」をみると、始祖から数代にわたって時宗をとりたて、淨光明寺を建てたということが書いてあります。

それで、普通は一遍上人がこらあたりに時宗を広めたと思っているのですが、これをみると時宗は一遍上人より以前に宣阿説誠和尚という方が忠久公の薩摩国下国の時、一緒にやって来たというようなことが書いてあり、一遍よりもちょっと早い段階に来たのかなと思うのです。

一遍上人は鎌倉時代の建治三年九月十五日(建治二年ともありますが私はまだはっきり調べてはおりません)に、大隅正八幡宮に参籠したという記録があります。その頃、国分の橘木城・姫木城一帯を支配していた税所氏と、一遍上人との接触もあったのではないかと考へておるのであります。これは全くの憶測で今からの研究によりますが、その理由はまたあとで申し述べます。

それで正八幡宮に参られた時に八幡大菩薩が御殿の金扉に姿を現わされた、と。「八幡大菩薩、金扉を開き尊容を現す」と。「神詠の歌を示して曰く」。次は時宗でよく使われることばなんですが「十詞」、これは「とことば」と読みます。さらに「とことは(永久)」になります。「とことはに南無阿弥陀仏と唱ふれば南無阿弥陀仏に生まれこそすれ(生礼古曾寸礼)」というふうな歌になります。一つの神仏一体となった悟りを開かれたのであると、時宗の方では強調しております。

神詠を感じなさった場所であるということで、時宗の方ではこの正八幡宮の存在というのを非常に重んじております。従いまして、後々の時宗の衆徒たちもここに参詣せんがためにしばしば訪れております。いわゆる遊行上人たちは、特に江戸時代では籠を立てて麗々しく来たらしくて、宿としては先程の正行寺に宿泊した。泊って何がしかの教えをし

たりしたのでしょうかね。そういうことが云われております。

正行寺だけを述べましたが、大隅国には七つあったようです。No.3の下の方。これは江戸時代のいつ頃作ったのか確認していません。また頭書の二・三というのは、まだ判りかねております。大隅国に念仏寺として「郡内」と書いてありますが、これは「郡田」のことじゃないかと思うのです。どうでしょうか。念仏寺(郡田?)、光福寺(末吉)、正行寺(宮内)、来福寺(山田)、常念寺(国分)、成円寺(小根占)、十声寺(曾於郡)。

この曾於郡(そくい)は、今で云えば国分市に入っていますかね。霧島町になりますかね。国分市とすれば、国分市に念仏寺、正行寺、十声寺の三つ、時宗の寺がありました。

薩摩の方になりますと、結構数があります。十四ぐらいですか。そのうちで淨光明寺が非常に重んじられていた。島津のお殿様方の法名を守っている寺としてですね。廃仏毀釈後のあり方は平田先生が詳しいと思います。

それと国分にあった時宗の寺の説明を付けておきました。No.1の右側のところです。「吉水山光明院念仏寺。重久村にあり。」この場所はあすこです。隼人町の方から橘木城と姫木城の間を通り、剣の宇都というのを抜けまして鉄道線路(日豊線)を越えたところに旧道があります。そして霧島へ上がる道に突き当たる手前、東翼山のところに念仏寺というのがあったわけです。そして此處にも道場口という小字と、それから字絵図には吉永山とありますが、吉水山。No.2の右側の。ちょっとごちゃごちゃして上方だと思います。吉水山がありました。ここも結構大きなお寺だったようです。古い石塔が結構残っているようですが詳しい情報は把握していません。

もう一つ、仏光山正行院常念寺。「正行」というのは宮内と共通しています。曾小川村。場所がはっ

きりませんでしたので、先程確認しましたら、国分市の中央で昔吉永百貨店というのがあった場所にあったということです。もう破壊されており遺物もありません。仏像が一つあるということです。阿弥陀如来かも知れません。

それと、この常念寺のところに、先程の「道場」という意味にかかわることが、ちょっと書いてあります。「此宗門は遊行上人の命にあらざれば寺号等を用ゆることあたはず、故に初めは道場といへり」と書いてあります。これは遊行上人の地位を権威づけるための定めかも知れません。また、これをそのまま受けとつていいかどうかも判りません。

No.1の「道場という地名」の下にも、道場という例を引いておきました。京都には七条道場金光寺、四条道場金蓮寺、六条道場飲喜光寺ということで、道場と寺という表現は並行して使っておりますのであまり難しい区分はなかったんじゃないかなと思います。

その下に道場誓文というのがあります。この文書は「道場」ということばが出て来ることを示す史料です。嘉元四年(1303)、鎌倉時代末に遊行上人四十世他阿真教が弟子たちをさとした誓文です。

「〇年九月往生を遂げし僧尼二百七十五人、此のうち不往生の者七人。制戒を破りながら廻心向大せざるの故也（結局戒律を守らなかった奴らだということです）。今日より未来際始を尽して（ちょっとここは読みません）、以下処々の道場の僧尼、制戒を破らず命終に至り（いわゆる臨終ですか）、称名念佛せんば必ず往生を遂ぐべし。これを用いざる輩は一室同座を止めて衆中を追出すべし。仍て魔界を避け本願に相応する史の定める往生の所と為さん。嘉元四年九月十五日、他阿弥陀仏」と。結局、称名念佛に専心しなさい、という戒めを与えたものだと思います。その中に「道場」が出て来ます。

大体、以上のようなことです。先程の沢家の側の

ところに、在家人だろうと思うのですが、江戸時代の墓があります。これは写真を付けてありません。拓本があったのですが、余裕がなく付けられませんでした。眼阿弥陀仏という法名が付けてあります。これも多分、時宗を信奉した方だろうと思います。

佛教関係の地名と名付けるにはちょっと恥ずかしい内容ですが、一つだけでも参考になればと思って出してみました。

#### (質疑応答)

##### 道場

平田 何なりと質問をお願いします。時宗のお寺のことを「道場」というと一般に理解されていますが、国分・隼人地区には道場という地名が三ヶ所程あるようです。国分市役所の側の元吉永百貨店あたりに「道場下」ですか。

藤浪 道場下は襲山のところ。

肥後 国分も「道場下」です。

平田 重久の方にも道場下（道場口が正しい）、そして笑隈山の下にも「道場」と、三つあります。笑隈山の下の「道場」などは調査をすれば、お寺の跡が出て来るかも知れませんね。

花園 現在も墓地になっていますね。用水路の上のは。

藤浪 あれは正興寺の後だといわれています。先程の坊さんの墓は正興寺のところにあるのです。

平田 「行」の方？

藤浪 「興」の方のところに但阿無伝の墓があるのです。

平田 あゝ。

藤浪 そこに移したのかも知れない。

##### 念佛寺

藤浪 肥後先生。念佛寺の石塔なんかは新しい郷土誌に収録されるのですか。

肥後 はい。

花園 秋葉神社という石碑が立っているんですよ。

その横に。

肥後 いや、重久やんどがな。

花園 あっ、重久。

肥後 石塔編は、松田さんが。

藤浪 出ます？

花園 はい。出ます、それは。

藤浪 かなり、あったがなと思って。

肥後 うん、うけごあんどな。

平田 そんなに沢山あるの？

藤浪 結構ありますよね、あすこは。

肥後 本田先生が調べかけておいやったとごあんどん、亡くないやってからあとは委員の調査で補充しました。

##### 西光寺

納 隼人町にセゴシという所があんどな。あれは、お寺と関係があっとですか？

藤浪 そうです。国分に台明寺というのがあるでしょう。あすこも、もちろん天台宗の寺なんですよね。古い寺なんです。奈良時代ぐらいの。

納 天台宗？

藤浪 その分かされ（末寺）なんです。あすこは日枝神社と一緒になんんですけどね。西光寺も日枝神社と一対になっていますから。それで鎌倉時代には分かれた大本（台明寺）と相論をしているのです。

肥後 「セゴシ」というのは、どの辺？

平田 西光寺（せいこうじ）でしょう。

納 西光寺。ご免。

藤浪 セゴシというから判らないのですよね。

平田 山号が日当山（ひつどざん）、それを日当山（ひなま）と呼んでいるのですね。「ヒナッジャー」と。日当山はいわゆる自治体の名称となって、大字が西光寺です。

納 はい、そうです。

藤浪 中世は真言宗に宗派も変っています。天台宗から。

##### 時宗寺院

平田 国分・隼人地区は寺関係の地名と三国名勝団会記載の寺をきっちり抑えて標識を立てたらいいと思う。

藤浪 そうですね。なかなか、荒れ果てたままで。

平田 私の家は鹿児島の淨光明寺の門徒です。あすこが復興した時に『淨光明寺の歴史』というのを頼まれて書いた経緯があります。淨光明寺は年に1～2回、道場とか道場口とかにお坊さんが門徒を連れてお経を誦んだりするのです。住職が大分年令をとって來たのでその機会が減って來ましたが。

藤浪 今日はコピーする暇がなくて資料が準備出来なかったのですが、『南九州文化』に「南九州における一遍上人の足跡」というのを河野良文という方が書いておられます。非常に詳しく書かれています。一遍上人の出である河野一族ですね、伊予の大三島を拠点とした河野水軍でもありますが、そのルーツがですね、大山積神から神阿多津姫に来て、それから彦火々出見尊、そして阿多隼人に来る。

平田 そこまでつながるの？

藤浪 阿多隼人から越智氏になって、そして河野氏になると書いてある。そして一遍上人とこちらと関係があるということなんですが、私も初めて見ました。それ以外は役立つのがあるかも知れません。非常に詳しく書いてあります。必要な方はコピーしてあげます。

平田 うん、僕にも頂戴。

藤浪 いりますか。コピーしましょうね。

平田 希望者は手をあげて下さい。

##### 北朝の年号

永田 正行寺の貞和二年ですが、これは北朝の年号を使っていますね。

藤浪 そうですね。税所氏は北朝側ではなかったですかね。

永田 あゝ、それで北朝の年号。

平田 なるほど。

藤浪 それと先程、税所氏は時宗と関係があると申しましたのは、国分市立図書館の所に移された石塔があるからです。元々は橋木城の山頂に並べてあったという阿弥陀仏の名号を彫った笠塔婆です。二つありますが、書体から見ましても時宗流です。行書体。草書体といえばいいですかね。かなり崩れた字ですが。これは橋木城・税所氏だけでなく国分・隼人が時宗と関係が深かった証拠になる大事な石塔です。ブルドーザーがひっかけましたが幸いに移すことが出来ました。上部が欠けていますが供養塔です。この形式のものでは大根占に県指定になった笠塔婆があります。あれはもっと古い鎌倉時代のものですが原形はあれに類した形だろうと思います。それはともかくとしても、これは時宗研究の一つの手がかりだになります。

#### 道帳

永田 獅子王山とか神楽田というのは、やっぱり神社と関係があるのですか。ちょうど隼人駅の裏側ですね。

藤浪 獅子岡のところですね。獅子王山はいわゆる獅子隈で国分七隈の一つだといわれております。ここには「学の前」というのがあります。しかし、これは「学」じゃなくて、道帳によると「堂の前」なんです。

平田 あゝ。

藤浪 「学の前」は、ここに隼人工業高校があるもんですから、これを書く人が誤って書いたんだろうと私は思っております。またこの「堂の前」も隼人塚：正国寺とかなり関連があるとみております。もう一つ、隼人駅から線路に沿って斜め右上にのぼって来ますと、ここにも「堂の前」というのがあります。これも道帳で私どもは知ったのでしたけど、ここにも西雲寺という寺、そして阿弥陀堂があったのです。これはかなり古い寺のようとして、少なく

とも南北朝時代の正八幡宮支配地の四ヶ所に立てたいわゆる「四至寺」の一つです。東西南北の坊寺、正八幡宮領の範囲を示す四至寺の一つのようです。

二見 兩方の「堂の前」から垂線をおろしたところに「仏師田」とあります。これを説明してください。

藤浪 いわゆる仏師です。仏像を彫ったりする仏師やいろいろな技術を持った仏師、そういう人たちの費用になっていると云われています。一般的な解釈ですが、それ以上のことは知りません。

その上方に「雨ヶ迫」とあります。これは平田先生の説（大隅国分尼寺跡説）なんですが、私どももそれを実証したくて発掘の機会をねらっているのですが、一向にみのりません。雨ヶ迫は降る雨ではなくて、僧尼。尼さん、女の坊さん。それに関連した地名じゃなかろうかと推定されています。仮りにもしこれがそうであれば非常に都合がいいわけで、私どもは非常にありがたいことなんですが、一向にこの辺の発掘調査の機会にめぐまれません。

二見 これを「アマ」というふうに現在でも使うのですか。

藤浪 はい、雨ヶ迫（あぬご）その通りの地名です

二見 「菩提寺前」というのもありますよ。

平田 菩提寺前（ぼてしまえ）と呼んでいます。

藤浪 ここも取りあげて説明しようと思ったのですが、二つに分かれるものですから省略しました。字絵図に「菩提」とありますが、これも誤りです。「寺」が入ります。本当は、「菩提寺」というのが先程の道帳に出てきます。ここは見次字になります。隼人町の字は、今の隼人駅から神宮の方に行くあの筋ですね。飛行場への道、駅前通りですね。駅前通りの道で、見次と内山田の境界になります。それから鹿児島神宮の馬蹄りが出発するあの辻の角：十字路に来まして左の正八幡宮参道に入りますとその参道を境界にして内村と内山田に分かれます。

それと最近出来た参宮橋の方へ行く筋の手前の方が見次になって、それから先の方は内村になります。久保町とか岩下、こっちの方の堀之内とかは内村になります。以前、この会で川内市の筋々を歩いたことがありましたが、川内でも筋が小字界とか大字界になっていました。隼人町も正八幡宮の参道などで大きく字の分かれが出来ているようです。

それから菩提寺のところは、見次字。「道帳」を見ますと、ちゃんと菩提寺と出て来ます。これは非常に参考になります。原本は国分市の図書館にあります。先程の西雲寺は最勝寺氏が管理していた寺のようです。道帳は隼人町の郷土誌にも活字になって出ています。

平田 国分郷土誌でしょう。

藤浪 あゝ、国分ですね。

花園 今度新しいのが出ます。平田先生の書かれたのが。

平田 史料集はいつ出ますか。

肥後 平成8年12月に。

平田 来年の12月に、この道帳が活字となって新しい国分郷土誌に収録されます。

藤浪 今ちょっと見当りませんが、弥勒院・菩提院というのが出て来るのがあります。それと菩提寺というのがどの寺に当るのか判りません。菩提寺という寺号はないのです。菩提院という院号を含む寺はあるのですけど。

平田 ちょっとお尋ねします。小田に近いところに平田とあって（住吉）とありますね。ここも住吉神社があったの？

藤浪 これは私も聞いてみたいのですが、飛地。

平田 住吉村の？

藤浪 はい。正八幡宮とのかかわりを書いてみましょうか（板書）。先程の正行寺、正興寺、正国寺となります。正国寺の前あたりに飛地が多いのです。この辺は正国寺があったところですが、その上に住

吉字の蛭田（ひるた）があります。これは飛地です。その下の方にも内田というのがあって、これも住吉の飛地です。飛地が何故此処にあるのか、よく判りません。未だに郵便が間違って配達されるそうです。

平田 国分・隼人は鹿児島県では一番史料も豊富な所です。それで、三国名勝団会にもとづいて寺院の跡を一つ一つ確かめて行く作業がある。そこには必ず石塔とか石仏などがあるでしょうから。もっと遡ると鎌倉時代に元寇防壁を築く割り当てをしますが、その際の細かい地名が大隅国の場合記録されています。さらに11世紀の史料にも細かい地名が出て来ます。その中には三輪堂とか九輪堂とか十輪堂とか、今では比定できないような恐らく坊さんたちにもとづいた呼び名とか、それらが地名となっていると思うのが多く出て来ます。そういうものを追求していけば、いくらでも歴史地理学的に調べる材料が豊富な所だと思います。その意味で今後とも藤浪さんの活躍を期待します。

二見 この弁天というのは？

藤浪 これは、ちょうど宮内原用水路がトンネルをくぐる所になります。水路が二つに分かれている所です。多分此処に弁天様を祀っていたのじゃないかと思います。現在はありませんが、それから付いた地名じゃなかろうかと思います。その下には地蔵山という地名もあります。

平田 地蔵、薬師など、沢山あるよ。

二見 大体いつ頃使ったのですか？

藤浪 かなり以前から。

平田 地名はいろいろあるけど、字絵図として記録されるのは明治22年。それ以前でも検地帳にも出て来ますしね。

藤浪 坪付帳もありますね。

平田 坪付帳も出て来ますね。もっと遡れば元寇防壁割当ての地名も出て来ますし、平安時代の終りの地名もかなり記録に出て来ますからね。いつごろ

との限覚はちょっと出来ない。だから地名を手掛かりして寺院跡を確かめていくことが基本的な仕事になります。その意味で国分・隼人は調べることがいくらでもあると思います。

永田 山のところに供養谷というのがあります  
下にお寺はなかったのか。それから、国領畠とか、  
上には念佛とか、

藤浪 えー、あります。上に念佛ヶ岡ですね。供養谷は私も関心を持っております。供養谷には樺山家の墓地があります。俗称的に云っていたのが小字

になったのかも知れません。それから日秀神社の辺  
は日秀坂というのが残っています。まぁ、あること  
はあるのです。一つ一つ拾って行けばですね。

永田 「夜帰」というのは、どういう意味?

藤浪 判りません。これも調べて下さい。以前から云われているのですが、溝辺の辺に遊びに行たて戻った時は夜が入って「夜帰」、と(笑い)。これは冗談なんですが、

平田 はい、どうも有難うございまして。今日はこれで終りにしましょう。

# 隼人町の仏教関係地名

「道場」という地名

藤浪三千尋

日 時 平成7年12月 3日(日)

場 所 鹿児島市 教職員会館

# 吉水山光明院念佛寺地丑方、二町、重久村

相州藤澤山

清淨光寺の末にして、時衆宗也、本尊阿彌陀如來、  
夾侍觀音・勢至、各長一尺七寸八分、運慶作、  
年丙子九月遷化、弘安三年、道忍公の命にて創建す、嘉曆中遊行第  
六世一鎮上人廻國の時、止宿の所なり、寺内に道忍公の御靈牌  
を安置す、本堂に吉水山三字の扁額を掲ぐ、寛明公の手書  
なり、

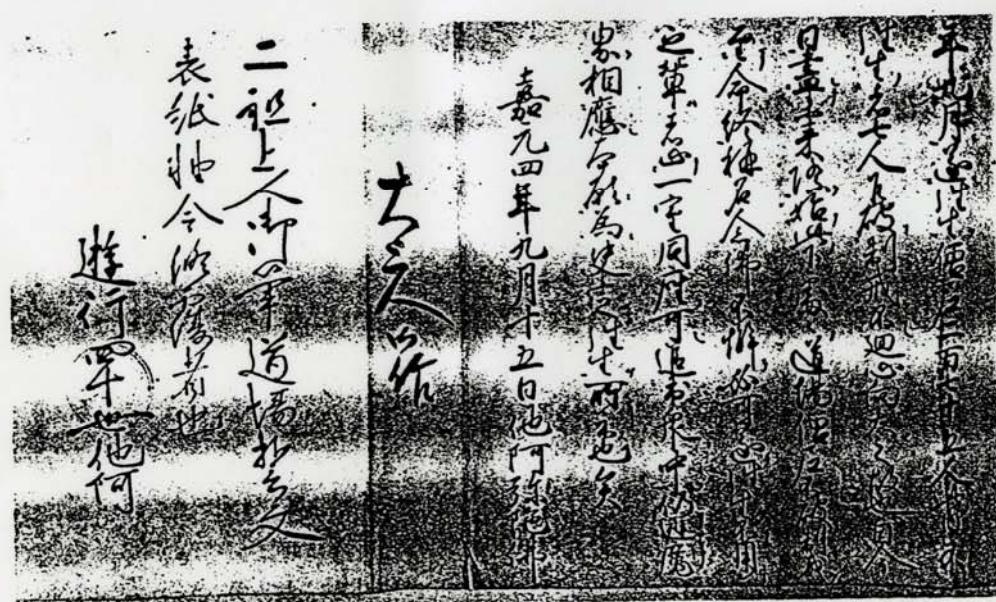
## △佛光山正行院常念寺 曽小川村

にあり、相州時衆宗藤澤山清淨光寺末にて、本尊阿彌陀如來、  
寸立像、長三尺一慶長十年、貫明公其阿良心和尚、和尚は大翁代の住持、十に命じて、開基せしむ、此宗門は、遊行上人の命に  
あらざれば、寺號等を用ゆることあたはず、故に初めは道場といへり、遊行三十五世の上人廻來の時、日想山常念寺と名け、  
其後寛文年中、三十九世の遊行、山號を今の如くに改め、安永  
中五十三世の上人院號を得せしむ、

## 道場という地名

「道場」の訳。ブッダが成道した場所。「菩提座」「菩提道場」ともいう。(2)修行の場所、転じて「寺院」の別称。「一遍語録」(百利口語)「念佛まうす起きふしは、妄念おこらぬ住居かな。道場すべて無用なり」。福岡道場が寺院の別名となつたのは「佛祖統紀」三九(㊁四九)三六二〇に「隋の大業九年、詔して天下寺を改めて道場といふ」に由来するが、わが国では寺院と道場とを区別し、在家のまま本尊を安置し若干の佛事を行なうところを道場とし、「僧尼令」では僧尼は寺院に住すべきで、別に道場を立てて、衆を集めて教化し、妄りに罪福を説いてはならないと規定されている。しかし、法然の時代以後には、念佛僧は多く道場に居住して、念佛して教化活動するようになり、寺院が「念佛道場」といわれるようになつた。康永三年(一三四四)九月九日付の伊予觀念寺の「越智氏一族寄進狀」に、「夫れ本寺者、せらると雖も」とある。(3)「法座」の別名。

新居大夫盛氏建立之氏寺也。然れど後家尊阿、彼の後の菩提を訪ひ奉らんが為に不斷に念佛道場を興行せらるゝ處(徒然草)(二五)宿河原といふところで、ぼろぼろ(虚無僧)多く集まりて、九品の念佛を申しけるに前河原へ参り合はん。転じて、後には、(4)武道を修練する場所、修養・訓練の目的で団体生活をする場所を意味するに至つた。





國分「道帳」 文政六年（1823）

## 国 分 市

内村  
木の原村下通筋を下通  
右田本源湯ノ王堂正或有也  
川筋也北湯治通筋を下通  
右田所村上北筋元度度也道を有也  
角立堂、元々瀬戸深通日向山後と水人通  
角立堂山脚新山津と水場通九人通

天保十三年壬寅

No. 3

## 時宗寺院明細帳

十一月十五日

蘇州淨光明寺

(古氏島津香村)

松平大隅守領内薩摩國鹿兒島郡坂本村

松峯山無量寿院淨光明寺

大槻那島津之太祖、薩隅日三州太守、豐後守藤原忠久、法

諱得佛道阿彌陀佛忠久者右大將源賴朝

二代大隅守忠時、法名道佛仁阿彌陀佛、三代下野守久經、

法号道忍義阿彌陀佛、四代上聰介忠宗、法名道義仲阿彌陀

佛、五代上聰介貞久、法名道鑑道阿彌陀佛、以上五太守之

牌安置之以為菩提所。

開山宣阿說和尚者、相州鎌倉一遍上人以前道時衆也、島津鼻祖忠久崇敬之厚故受薩隅日封下國之日宣阿亦俱共來、因建一寺号淨光明寺令居之、既而一遍上人建治三年九月十五日參龜大隅正八幡宮時、八幡大菩薩開御殿金屏現尊容示

神詠歌、曰、十詞仁南無阿彌陀佛土唱礼波南無阿彌陀仏仁生礼古曾寸礼、是十念相傳一流也云云。從夫上人修行來薩州此時忠久之嫡孫下野守久經、知國家以上人之道德殊勝遂為一遍門流、弘安七年抵久經之嚴考大隅守忠時十三回忌、以追孝志大再建當寺、增旧制令修六時行法般舟三昧、遊行上人、御回國時者數月庵留、昼夜六時禮讚勤行賦算化益道場也。

自南門上人當國御巡行之節、蒙尊免本寺尊林拝

顏之席并御出座之堂中三時勤行之時、住持著色袈裟。

開山宣阿上人說和尚建保元發西五月三日遷化

當寺享保二年丁酉四月八日無殘所類燒太守吉貴以深志草保

九年甲辰十月再成就。

一本堂五間四面四方椽・小板檜・礎  
一本尊阿彌陀如來長三尺毫寸・安阿彌作

一脇土観音勢至二尺右同作

一枳迦作不祥毫林

一地藏右同毫林

松平大隅守領分大隅國桑原郡内村

正行寺

一本尊阿彌陀如來

一當寺開山相知不申候

一客殿三敷三間

茅井

一庫裡五敷四間

同断

一檀方中七拾八軒

一住持成御報謝料

一當寺之儀沢喜三太神領高之内ニ而寺領無御座候

右之通書上申所相違無御座候以上

天保十二年

丑十月二日

宗玄

## (仮題) 遊行派末寺帳

京都七条道場旧藏

△笑隈山、正行寺、内村にあり、曾於邑、時衆宗念

佛寺の末なり、本尊阿彌陀如來、立像、源開山陵阿和尙、遊行上人廻歴の時、正宮へ參詣して、勤行をなす、是遊行世々の恒例

たり、故に宿坊として、貞和二年の開基と云、嘗て祝融の災に罹り、來由詳ならず。

睡阿彌陀佛  
重阿彌陀佛  
覺阿彌陀佛  
眼阿彌陀佛

性阿彌陀佛

「時衆過去帳」

沢家の墓地近くの時衆の墓

「貞享三年（1686）眼阿彌陀仏」



正興寺跡の正行寺坊主の墓 年代不詳

「當寺十五代 但阿無傳」

薩摩	大隅	八郡
二念仏寺郡内	二常福寺大口	光福寺末吉
三米福寺山田	三常福寺出水	正行寺宮内
十声寺曾於郡	十常福寺カセ田	常念佛寺國分
大	大	大
專修寺	專修寺	常念佛寺
淨光明寺鹿兒島	淨光明寺鹿兒島	光福寺
阿彌陀寺阿久根	阿彌陀寺阿久根	常念佛寺
青蓮寺伊佐	青蓮寺伊佐	常念佛寺
大林寺薬刈	大林寺薬刈	光福寺
西福寺伊作居	西福寺伊作居	常念佛寺
成円寺小根占	成圓寺小根占	常念佛寺
西前寺東郷	西前寺東郷	常念佛寺
紹隆寺	紹隆寺	常念佛寺
法光寺坊泊	法光寺坊泊	常念佛寺

第26表 鹿児島地名研究会例会

年月日	話題となった地名	問題提起	掲載会報号数
1 S.58.6.12	八重、上・下他	平田信芳「峠の語源」	1号 58.9. 1
2 9. 1	薩摩の語源	本田親虎「耳取 という地名」	2号 12.14
3 12.14	鹿児島の語源	桐野利彦「シラス地形と地名」	3号 59.3.25
4 59.3.25	野摘の滝・催馬楽他	肥後芳尚「山の地名について」	4号 6.23
5 6.23	江平 望「狩集と柴立」永山徹弥「鹿児島の姓と地名」		5号 9. 2
6 9. 2	鶴丸城の語源他	江ノ口汎生「川内市楠元の地名」	6号 12. 2
7 12. 2	多賀山・田之浦他	小川亥三郎「国料という地名」	7号 60.3.17
8 60.3.17	境河・田毛他	平田信芳「市後柄」	8号 6.20
9 6.20	智賀尾・伊集院他	佐野武則「霧島山麓の地名」	9号 9. 1
10 9. 1	隈之城・斧淵他	唐鑑祐祥「百引郷平房の門名」	10号 12. 8
11 12. 8	薩摩国分寺跡の現地巡見		11号 61.3. 2
12 12. 1	南九州の地域文化を考える会：平田「波見という地名」		
12 61.3. 2	可愛山陵他	中村明蔵「熊襲という名称」	12号 6. 1
13 6. 1	川内他	山崎盛隆「枕崎の地名あれこれ」	13号 9. 7
14 9. 7	加紫久利他	松田 誠「姶良の地名あれこれ」	14号 11.30
15 11. 3	姶良町上名の現地巡見		15号 62.3. 1
16 62.3. 1	僧都・紫尾山他	日頃疑問の地名について	16号 6. 7
17 6. 7	祭礼田	江ノ口汎生「難解な地名」	17号 9. 6
18 9. 6	アタ・サタ、クルス	肥後芳尚「植物に因む地名」	18号 63.2.28
19 63.1. 5	国分市の巡見		19号 6. 5
20 2.28	平田信芳「国名郡郷と那珂郡」「島廻という地名」		20号 6. 5
21 6. 5	江ノ口汎生「徳光と現王」「長崎堤防と人柱伝説」		21号 9. 4
22 9. 4	九玉・戸柱	松田 誠「神社と地名」	22号 11.23
23 11.23	郡山町巡見		23号 H1.3. 5
24 H.1. 3. 5	配流の島	唐鑑祐祥「鹿屋の中世地名」	24号 6. 4
25 6. 4	穎娃郡・長崎庄	浜崎盛雄「地名穎娃について」	25号 9. 3
26 9. 3	石垣・水成川他	小川亥三郎「指宿地方の小路」	26号 1.12.10

年月日	話題となった地名	問題提起	掲載会報号数
27 H.1.12.10	加治木町巡見		27号 H2.3.11
28 H.2. 3.11	江平 望「平礼石・別府・実方」平田信芳「格原」		28号 6. 3
29 6. 3	大隅国他	日頃疑問の地名への意見交換	29号 9. 2
30 9. 2	八久保・逆鉢他	郡山政雄「塩の話」	30号 H3.3. 3
31 12. 9	高千穂・旦過他	平田信芳「谷山と山川」	31号 6. 2
H.3. 1.13	入来町巡見		
32 3. 3	路作他	佐野武則「喜界島の地形と地名」	32号 9. 8
33 6. 2	牡鹿野・小鹿野他	花田 潔「天道信仰関係の地名」	33号 12. 1
34 9. 8	姫城浦・気色浜他	肥後芳尚「竹に関する地名」	34号 H4.3. 1
11.23	大隅国歌枕巡見		号外
35 12. 1	「隈」のつく地名	小園公雄「大隅国日向国の駅路」	35号 9. 6
36 H.4. 3. 1	曾於の石城	江ノ口汎生「可愛山陵川内五説」	36号 12.13
37 6. 7	平田「大隅・薩摩の駅路」青柳俊二「出雲国の駅伝路」		37号 H5.3. 7
38 9. 6	子亥神考	平田信芳「白石考」	38号 9. 5
11.23	隼人町宮坂麓～鳩脇巡見		号外
39 12. 3	奈氣木の森他	藤浪三千尋「方後 郷について」	39号 12. 5
40 H.5. 3. 7	踊・神社のよみ他	小川亥三郎「提という地名」	40号 12. 5
41 6. 5	(録音失敗)	平田信芳「曾於国府と桑原国府」	41号 H6.3. 6
42 9. 5	桜島・沖小島他	能勢正之「開拓地の地名」	42号 9. 4
11. 3	大隅国駅路巡見(蒲生駅～桑原国府)		
43 12. 5	霧島山頂の所属	花園正志「曾於郡という地名」	43号 12. 4
44 H.6. 3. 6	清音と濁音	納 栄蔵「方言で読む地名」	44号 H7.3. 5
45 6. 5	四十九所神社	平田信芳「本町(ほんまち・もとまち)」	45号 6. 4
46 9. 4	吾平山陵	平田信芳「市・町の痕跡地名」	46号 9. 3
47 12. 4	岸良と串良	花園正志「亀甲遺跡の一考察」	47号 12. 3
48 H.7. 3. 5	赤米・アコウ他	江ノ口汎生「マムシの神様」	48号 H8.3. 3
49 6. 4	鉄砲と火薬他	平田信芳「甲突川流域の地名」	49号 6. 2
50 9. 3	益救の読み他	小原親英「小原のよみ」	50号 9. 1

## 鹿児島地名研究会員名簿

青柳 俊二  
池田 純  
池田 碩男  
上野 堯史  
江之口汎生  
江平 望  
大田 照夫  
小川 秀直  
小山田 稔  
納 栄藏  
片岡 八郎  
唐鎌 祐祥  
霧島 一浩  
小園 公雄  
小原 親英  
木場 武則  
佐野 武則  
坂本 誠  
下野 敏見  
染川 一幸  
永坂 芳彦  
永田 典男  
能勢 正之  
長谷川順一  
花園 正志  
花田 潔  
浜崎 盛雄

原口 泉  
肥後 芳尚  
肱岡修一郎  
平澤 幸夫  
平田功美子  
平田 信芳  
福元 忠良  
藤浪三千尋  
二見 剛史  
本田 親虎  
本田 碩孝  
松田 誠  
松浪 由安  
三木 靖  
三善喜一郎  
南 和郎  
山崎 盛隆  
山下 東洋  
与倉 辰夫  
吉原 林昭  
米原 正晃

# 地名研究会報 第52号

平成9年3月2日

鹿児島地名研究会

於教職員互助組合会館和室

(計16名)

I. 第52回例会 平成8年3月3日(日)

(出席者) 青柳俊二・池田 純・大田照夫・納 栄蔵・小山田稔・木場武則・小原親英・坂本 誠・下野敏見・平田功美子・平田信芳・福元忠良・松浪由安・米原正晃・石野さん・田原さん

II. 豊藩名勝考読会 P.180 ~ P.185

(問題となった地名および事項) 赤米・樟

赤米

平田 今読んだところから片付けましょう。末吉の樟原、前回も樟原とイザナギノミコトのみそぎは話題になりました。県内に住吉神社および住吉の地名はあるにはありますが、例は少ないようです。住吉の全国分布はまだ調べていません。住吉については、あゝノートを間違えて持って来たようです。

えーと、この前話題になった「赤米」のプリントを持って来ました。回しますので、お取り下さい。これは平成7年の1月号です。JR九州が毎月1回宣伝のパンフレットを作っております。九州学シリーズという形で、いろんなテーマを収録しております。去年の1月号に「赤米」が特集されていましたので、それをコピーして来ました。これは去年、種子島の宝満神社では赤米を奉納するという話が出た時、宝満神社以外にも赤米があるということが話題になりました。その時に資料として提供するとの約束でしたので、コピーして来ました。

末 今日のところで、何かありませんか。

納 昔、種子島におったことがあるのですが、話だけ聞いて、実物を見たことがありません。以前山形屋で種子島の物産展があった時、赤米で作った餅や大福餅を売っていました。

平田 下野先生がおられますから、赤米のことを

補足してもらいましょう。

下野 前回は何が話題になったのですか。

平田 赤米がどこまで広がっているか、ということでした。

下野 分布の問題ですか。

平田 そうです。

下野 祭りじゃなくて、赤米の。

平田 分布がどこまで広がっているかということでした。

下野 それでは赤米について、よろしいですか。

平田 はい。どうぞ。

下野 種子島の赤米、対馬の赤米。それから奈良にあります。岡山県総社市にもあります。この四ヶ所は確実です。今日の資料で佐賀県でも作っているようですが、これを入れると五ヶ所ですね。対馬の赤米と種子島の赤米とは違うのです。私は両方調べて食べてみましたがけれども、粒も違って、同じ米でも大変違うのですね。そして、祭りの仕方も違います。ですから、対馬の赤米の伝来経路と種子島の赤米の伝来経路は違うということを、それ自体が知らせています。種子島の赤米は、京都大学の東南アジア研究センターの若手が農学者として、つぶさに調べています。

赤米はよく知られているように、インドネシアの

ジャワ島にあるのと同じで、ジャヴァニカに属します。ジャボニカでなくて、ジャヴァニカ。従来インディカとジャボニカが知られていたのですが、もう一つ加えてジャヴァニカという品種であるとされています。その痕跡が西表島にもあるようです。古い時代に南西諸島づたいに、これが伝播したのであります。柳田国男の海上の道は荒唐無稽といわれましたが、案外こんなところから見直す必要があろうということです。

もう一つ面白いのは赤米を植える時です。御田の森という所があります。その森のところのすぐ下に赤米の御畠町といって五畝ぐらいの田圃があります。そこに植えるのですが、二つ違うのです。一つは森で祭りをする。森の一番上に祭壇があって赤米の苗をそこに供えて、それを総代が神官からもらうし、総代は今度はそれを青年団長にやるのです。そして、青年団長がみんなに配って植えるという形式をとります。「森で稲をいただく」、こういう祭りなのですが、実はそれがですね、今でも日置八幡の「せっぺ飛べ」のところに祭壇があるのです。それから川辺の飯倉神社でも田圃の真ん中に一本、木が生えているところがあります。現在でも森で稲を祭るという面白い形態が残っています。それが一つですね。

もう一つの問題は、インドネシアにつながるのですけど、社人と社守夫婦が盛装しまして、森に向かった舟田という田圃で、その田圃に神主も来て、赤米の苗を持って舞うのです。赤米の舞いをする。これは面白いですね。舞って、それをそのまま植えるのです。その田圃は天水田なのです。

もう一つ、それは舞いの形じゃなくて、足を上下するだけです。水は下の方から汲む。田圃へ汲み入れるのです。これは足で耕すというのが、そのまま生きていると思うのです。インドネシアでは今でも山間部では人の足で耕すところもあるのです。ちょ

っとした狭い所ではですね。種子島でも明治19年頃肥後の方から鹿児島県庁の支庁を通じて「鋤」が入って来ます。それ以前は鋤は使わなくて、全部馬の脚で耕しました。これを踏み耕と言います。私は足で耕すので、足耕(そごう)と言っています。

実は今年3月に「初午祭」が鹿児島神宮であります。馬踊りですね。馬踊りも実は馬がダンスをするのじゃなくて、本来は足で耕す。あれが春祭り。農耕の初めを表わす祭りです。耕す、という形の残影であるとみれば解釈し易いわけですね。それから、日置八幡の「せっぺとべ」も青年が酔っぱらって田圃で足をあげますが、あれも足で耕す「足耕」。そして日置八幡のせっぺとべの場合、今でも必ず駒を連れて来なければならないわけです。馬が今いないもんだから苦しまぎれに、ボニーを借りて来てつないでいる。実は、これも馬で耕す、水田を足で耕すことの残影とみればすべて納得がいくわけです。

これがインドネシアからつながって南九州までも、ずっと同じ文化が及んでいるという見方が出来ます。実は、これは九州全域にあります。今では残っていませんが、いろいろなことで実証できるのです。まぁ、そういうぐあいに赤米問題は南からと朝鮮半島からの両方の経路が考えられます。

平田 種子島の宝満神社に赤米が奉納されるということ、それから赤米はジャヴァニカということでもっと見直していいと具体的に話していただきました。ありがとうございました。

#### 橿・青木

平田 前回も話題になりましたが、私は実際に末吉に行ったことがありませんし、それから住吉神社を見ていないので何とも言えないのですが、どなたか住吉をよくご存知の方はありませんか。住吉神社というのは、普通、港にあるのですよね。末吉だけが何故陸地にあるのかが問題なのですが。それからこれはまだ全国的な裏付けをとっていませんが、住

吉神社に一番結び付きが深い氏族は大伴氏ではないかと思うのですね。大伴氏の氏神的なもの。大伴氏の領地が末吉にあれば、そこに住吉神社をもって来るのは当然だと思いますけれども。ただ新聞で流鏑馬をするニュースがよく出て来るということだけは気が付いています。

祝詞にある「橿原」という地名は、此處しかないのですよ。だからとくに宣伝するのでしょうか。橿原は決まり文句ですからね。これは勉強不足なんですが、橿木って、どんな木なんですか。青木とも書いてありますが、具体的にご存知の方はいらっしゃいませんか。

青柳 橿：青木は、庭木のことでしょう。ここに説明してある庭木。葉っぱが大きくて緑の色が濃い実が赤い、楕円形の少し大きな真赤な実がんのがあるでしょう。せんだんの実より少し小さいくらいの赤い実。

下野 知覧・川辺あたりでは、この葉っぱに飯を盛って内神祭りをする。内神に捧げる。橿の葉っぱでなきゃいかんところが面白いですね。

## 小原の地名について

平田 実際に小さい時から草木の名前は見聞きしないと、仲々びんと来ないのですよね。案外、見てるのかもね。（笑い）

青柳 見ていて気が付かない。別の名前で知っていたり、普通の名前でいうのに先生がびんと来ないのがおかしいのじゃ。

平田 ほんとにおかしいわな。（笑い）

池田 城山とか、どこにでもありますよ。

平田 橿が？

池田 葉っぱが青くて、幹もちょっと青い。

納 少し光沢がある。

池田 そうです。少し光沢があります。今は変形種がよくあって、斑入りと言って少し白が入ったのもあったりしますけれども。

永田 杉林なんかの下によく生えてますね。

池田 そうですね。

平田 杉林の中。そんなら見てるんだな。

池田 日蔭でも結構育ちますね。

平田 他にありませんか。なければ、ちょっと休みましょう。

（1）モハナ・（2）モハナ・（3）モハナ・（4）トハナ

（5）モハナ・（6）モハナ・（7）モハナ・（8）モハナ

（9）モハナ・（10）モハナ・（11）モハナ

（12）モハナ・（13）モハナ・（14）モハナ

（15）モハナ・（16）モハナ・（17）モハナ

（18）モハナ・（19）モハナ・（20）モハナ

（21）モハナ・（22）モハナ・（23）モハナ

（24）モハナ・（25）モハナ・（26）モハナ

（27）モハナ・（28）モハナ・（29）モハナ

（30）モハナ・（31）モハナ・（32）モハナ

平田 先週のはじめから、ここ一週間ばかり風邪で寝込んで、会報を印刷することは出来ませんでした。次回に2回分まとめて配ります。以前、病気で入院した時と今度で2回目ですが、今度の風邪にはくたばりました。後半に入っていきましょう。よろしいですか。

小原 小原の地名について説明します。本当は去年、9月3日にやる予定でしたが、急に親戚に不幸があったりして出来なくなり、申しわけありませんでした。その時は簡単な資料だけは配ってもらいました。

小原の地名について、各市町村を角川の地名辞典

鹿児島市では「オバラ」とか「オバル」と読んでいます。川内市では「コバル」というのが多いようでした。町によっては「オバラ」「コハラ」「コバイ」。珍しい例では「コーバル」というのがありました。鹿屋市と伊仙町だけは役所に問い合わせましたが、はっきりした呼び名の資料はないということでした。後日また調べておきたいと思います。

阿久根市の多田という所に「コバラ」とあります。これは角川の地名辞典には載っていません。役所に問い合わせましたら、折口と多田にまたがって二つあるということでした。これは地名辞典の方のものだろうと思います。私の苗字は「コバラ」なんですが、国分の方では「コバイ」というふうに呼んでいます。

7ページの一番上に「オ」と読む所をまとめました。オバイ・オハラ・オバラ・オバルなどがあります。「コ」のよみは、コバラ・コハラ・コハル・コバイ・コバリ・コバル・コバン・コーバルなどです。現地で聞けば、他の読み方があるかも知れません。

数的整理は次のようになります。  
オバイ(1)・オハラ(2)・オバラ(25)・オバル(16)  
コバラ(11)・コハラ(15)・コハル(3)・コバイ(17)  
コバル(31)・コバン(1)・コハラ(1)・コーバル(1)

読みがわからなかったのが、90。合計 134。他に隠れているのがあるかも知れませんけれども、一応そういう数になります。

今度は、コバラ、オバラ、コバルの語源ですが、これはよく判りません。分布図のうしろの方に地名辞典から拾ったのを載せてあります。

自分のことを言って申しわけないので、私の先祖になりますので触れておきます。多分、鹿児島の川上じゃないかと思うのですが、小原門という所があってそこの門名をとって「小原(こはら)」としたと聞きました。

池田 「門」の場合、地名が先なのですか。門名

が先ですか。

小原 地名が先です。地名からとっているようです。だけど、川上の小原(こはら)という地名は現在は見当たりません。昔の地図にはあるかも知れませんがまだ探し出せません。

分布図を見て頂ければ判りますが、ちょっと偏っているというような感じを受けます。オバイ、コバルとかコバラとかですね。

小原(こはら)の地名は文字どおり单なる小さな原なのか。それから「ハイ」とか「バイ」とか言いますが、それがどの程度の大きさを表わすのか、よく判りません。これから調べていきたいと考えております。何かご存知の方をおられたら教えて下さい。

下野 知覧にオバリとありますが、これはオバリじゃなくて、オバイのよみをオバリとしたのじゃないでしょうか。どうでしょうか。

小原 それは、ちょっと。

下野 知覧語では、オバルという言い方はオバイというのが強いんじゃないでしょうか。オバルというのをオバイと言います。

平田 下野先生は知覧の方だから、間違いないでしょう。オバリは、役場に聞いたのですね。

小原 そうです。

平田 じゃ一、訂正しましょうね。

小原 はい。訂正しましょう。

平田 2枚目の4の真ん中辺にある知覧町のコバリは、オバルと訂正します。

木場 川内市の平佐、本小原(モコハラ)と書いてありますが、これはモトコバイ。

平田 1枚目の右側、モトコバイ。

木場 通称、バクチバル、と言ってるのです。

平田 バクチバル?

永田 6ページの串良町の大野原(オハラ)。私はすぐ近くなんですが、笠野原(カハラ)でもカサノハルという。ところが「ン」が付いた時には「バイ」と

と読む習慣があるので、「カサンバイ」とか「シモコバイ」とか「カンコバイ」とか。私の郷里は永野田(カハラ)ですが、「ナガンダ」と言います。

納 それと、ついでにですね。

平田 ちょっと待って下さい。一つずつ片付けましょう。6ページの右側、串良町。真ん中よりちょっと下です。カンコバイ、シモコバイですね。これが現地の読みでは、あらたまる時はカミコバル、シモコバルですね。コバラですか。

永田 コバル。そしてカサノハラも、カサノハル・カサンバイ。原が付くのは「バイ」という。

納 串良の上小原。カンコバイ・シモコバイ。私が居ったのは昭和20年代の中頃ですが、カンコバイと聞いておりました。下小原の場合はシモコバイもしくはシモバイというのを聞いた時もあります。

平田 いろんな言い方がありますね。シモバイですか。それはちょっと早口だな。シモコバイという言い方はもちろんあるわけですね。

永田 カミコバイ・シモコバイと言いますね。

小原 役所でも、はっきり判らずに、どっちじやろかいというのがいくつもありました。

納 次のページには、カミオバル・シモオバルとありますね。

小原 あゝそれは角川の地名大辞典のよみです。

納 地名辞典の場合、なんというか、最近の人々が読むように付けたのでしょう。振り仮名は。

小原 そうじゃないかと思うのですが。

納 多分そうですが。

永田 カミコバルが標準語化されて、カミオバルと読んでいるんじゃないですかね。

平田 うーん。どうだろう。あれは執筆者がその町に問い合わせて、確認した上で書いているでしょうからね。

納 とくに鹿児島方言の場合、訛りが出た時、例えば高麗町。私は今でも「コウライチョウ」なん

て云うたことはないです。「コレマッ」というのですよ。それから樋之口(トイノクチ)。普通は「タイノクチ」と言ってますが、私なんかは「テノクッ」と言います。それと同じように付けたのじゃなかろうかと私は思うのです。

永田 鹿児島の中之平も同じようなことが言えます。「ナカノヒラ」「ナカンヒラ」。

平田 小原(コリ・カリ)・小園(コリ・ホリ・コリ)。鹿児島県の場合、生徒の名票をみた時、一人一人確かめなければならない。皆、違うのですよね。これは教師になった者が、いやというほど味わされた経験ですけども。日本語の流れからみて、小野小町を「コノオマチ」と読んだらおかしくなるわけで、「オ」は古くて「コ」は新しい。西日本は「オ」という表現が多くて、東北の方にいくと「コ」になって来る。そのような中で「コ」という表現を鹿児島県で使う場合には、関東武士が入って来てからそれが定着した可能性も強いと思うのです。それで「オバラ」とか「コバラ」の分布というのは、面白いテーマだと思ったわけです。難しかったですね。

小原 調べるのはちょっと難儀でした。

坂本 私は谷山の坂之上という所に小さい時からずっと住んでおり、今も兄弟たちが居るわけですが、下福元・坂之上では全部「小原(コハラ)」でした。

平田 コバイ。

坂本 はい。コバイ以外の呼び方はしません。ただ、住んでいる人の姓をいう時には、さっき出たあらためていう地名か判らんですけども「オバラの〇〇さん」「コバラ〇〇」。子供たち同志が友達の名前をいう時、コバイ春男君、コバイ〇〇君というけれども、ちょっとあらたまって学校なんかでいう時には「オバラ」というとですね。上福元の方でも言いよった。はい、オバラ、と。

それから、ウエンハイ。上原(ウエハラ)という苗字は沢山あるのだけど、あらたまらずに普通の会話で

いう時には「ウエバイ〇〇」というような言い方をしようとした。だからあらたまっている時とか人の苗字をいう時には、例えばオバラ〇〇さん、オバイ〇〇さん、と。目上の人には小原敏さんというちょっと有名な人がおられました。ちょっと知り合いだったりしたことあったんですけど、そこをいう時には、コバイのトシオさんと、われわれ同志では語るけれども、一旦その人のそばに行ったり、その人の親戚とかなんとかいう時には、オバラトシオさん、と（笑い）。こんな言葉を使うたとです。だから、二つの使い分けがあったのじゃないかと思うのですけども。地名だけをいう場合には「バイ」というようのが多かったようです。

坂之上からちょっと向うへ行ったら、影原という所があるんだけれど、これは「カッバイ」だったんじゃないかなと思いますが、皆は「カッガイ」というもんでした。原を「ガイ」というふうに、カッバイがカッガイに变成了かも知らんんですけど。そん時はあらたまつた言葉というのないわけですね。影原という苗字は一般に聞かなかったもんだから。

平田 面白い説明でした。いわゆる地でいう場合仲間同志でいう場合の表現と、あらたまつていう場合は、地でいう表現が古いのであって、あらたまつていうのは後から支配者が変って強制された言い方、そんな感じがしますね。とくに此処は隼人の地ですから、大和朝廷が遣わした人々が来てあらたまつたことを言わされた。その子孫の時代になると、島津などが入って来て、いわゆる関東的な言い方を強制するわけですから、仲間内の言葉と表立つていう表現の二通りがあった。これは面白いかもしだすね。

青柳 北九州では、例えば原潜、元々三池、大牟田の出身だと思うけど、それから原田トモヨという女優がいるでしょう。全部、原(ハラ)ですよね。だけどあの辺の地名をみると、原町(ハラマチ)とか春日原

(カスガハラ)ですよね。人名で原(ハル)と読む人はない。その辺の使い分けをきれいにしています。初めは、とまどいました。読み方が判らずに、原(ハラ)という感じだったけど、結局全部、原(ハル)でした。

平田 あゝ、地名は。

青柳 はい。地名は原(ハル)。

平田 姓名は原(ハラ)。

下野 小原(コラ)から小原(カラ)にあらたまつていくのは、大変面白いと思うのですが、もっとそれに注目して、小原(カラ)という読み方は、果たして

平田 正しいのか。

下野 民間で言った言葉か、と。文字表記以前に小原(カラ・カラ)という表現があったのか。鹿児島県では「オ」というのは「ウ」になりますから、例えば「ウデコン」。だから「ウバラ」と言えば又話が違って来て、大原になってしまいます。「オバラ」という言い方はなかったんじゃないでしょうか。「コバイ」というのしかなくて、「オバラ」と言い出したのが明治以降、近代化した後、それが地名にも移っていました、と。表記したのが「オバラ」になってしまった。そして上品に読むようになった。本来は全部「コバラ」だったという感じがするのですが。

平田 「コ」が古いというわけ？

下野 そう、「コ」が古い。「オ」という語感はちょっと。そういう発音をしたかなと思う。小さいというのを「オ」というのは他に何がありますかね

平田 小川(カラ・カラ)ですね。

下野 小川(カラ)も上品に言えば「コガワ」じゃないですか、本当は。

平田 いや、そこが問題なのです。国分の上小川(がカラ・がコカラ)は？

小原 カミオガワ。

下野 カミオガワ、カミコガワ。コガワですね。

納 あすこは、カミコガワじゃらいな。

平田 カミコガワというのは慶藩名勝考にルビがそう振ってあることによる。土地ではカミオガワとかカメガワです。

納 カメガワと言わいな。

下野 今大変重要なことをおっしゃったですね。平田 「オ」が古いか「コ」が古いかというのはどうかというと、日本全体の分布をとると「コ」は真ん中辺になって来るんですね、関東の方から。「オ」は西日本になるので、「オ」が古いのかなど思ってたんだけどね。

下野 今、判る範囲では南九州では「コ」が古いだろうと推測できますね。だが、もっと遡つていけば、どうであったか。「オ」だったかも知れんわけですが、要するに方言というのは波がありますからね。この周囲の地名を方言と考えれば、近世的・中世的な姿はこうであった、と。上代まで遡ればこうであったかも知れない、と。これは言語学の問題になつて来ますね。ちょっと難題ですが。

池田 話を聞いていますと二文字からなっているもので「小」の問題と「原」の問題と二つあるわけですね。それで先程云われたように九州全体はどうかというと「バル」。私は紫原(ムラサカラ)は鹿児島弁だと思っていたのですね。よくよく調べてみると九州弁なんですね、「バル」というのは。田原坂(タラカ)・新田原(ニウタカラ)。そういうふうに非常に九州弁的である。ワープロで「バル」と打つても原という字は出て来ません。明治になって「バル」と言いよつたのが段々「ハラ」でしか皆は見てくれないので、「ハラ」になったのかな、と思つたりしてゐるのですけど。

納 オの場合は、母音のOだけですね。コの場合はKとOです。そしてKは喉の音。息を吐く関係上聞きとりにくい面もあって、それから発音した場合ではっきり判らんもんだから、元々はコであったものがオの音に变成了んじゃないですか。中国語

や朝鮮語の場合、一番判り易いのは上海の海。あれは中国よみでは「ハイ」ですからね。日本に入って来て「カイ」になるでしょう。漢口も向うの「ハン」が「カン」に变成つて来るでしょう。こういうふうにして子音を発音した場合に聞きにくいもの・日本にないもの、日本人が発音しにくいのがあって、Kの子音がいつのまにか消えてOだけが残ったということは言えんでしょうか。

平田 海(ハ)が日本に来て「カイ」になったのは判るけど、カイが言いにくいからハイ。それはどういうこと？

納 ハイの場合、FA行音が出て来るからではないでしょうか。KA(カ)の場合には、Kの子音が言いにくい、聞きとりにくいもんだから、自然に母音だけ残ったんじゃないでしょうか。

平田 難しいな。昔は成吉思汗(ジギスカン)と言っていたけれども最近の世界史の教科書はチンギスハンというふうに書く。フビライハンも我々はフビライ汗(カ)で習つたわけですね。オとコの問題は難しいな、まだまだだな。私はオが古くてコが新しいと考えていたのだけど、鹿児島の場合「コ」が一般的だとすると問題が複雑になって来ますね。

小原 役所の方もそう云われたのをそのまま書いたかも知れんのですよね。そこらあたりは判りません。いつの時代に変つて来たか、とか。

下野 昔から百姓がそう言ったのかを理解しませんとね。

小原 そうですね。土地の言葉は先程云われたようなあらたまつた読み方ではなくて、普通一般的に云われているもので書いてしまつて、それがその土地の名前になつてしまつという傾向はあると思うのですけど。

下野 そうですね。先生の一覧票では「コ」が案外多いでしょう。

小原 「コ」が多いですね。

下野 多いということは、それが。

平田 主流だった？

小原 私もですね、「オ」が多いと思っていたのですよ。ところが実際に一覧表にしてみたら「コ」の読みが多くて。

下野 多いということは、元々「コ」だということを証明しています。（笑い）

永田 言語学の上から考へてもいいのじゃないかと思う問題ですよね。それで上名(カミヨウ)・下名(シモヨウ)と上に「ン」を付ける時には「ン・オ」というのは言いにくい。それで上小(ガコ)となる。カンオはちょっとばっかい口の中で言いにくい。

平田 それで上小原(カコイ)になるわけですか。

永田 カンコバイ。私たちの永野田。大隅半島の駅名ですね。「ナガンダ」。それから高山(カヤマ)を「コヤマ」というのも方言が入って来たのかなと思いますけど。

平田 こいつは難しいということで、研究課題にしましょう。

坂本 坂之上の話をちょっとしましたが、地形的なものもやはり関係するのかなとも思いました。こういう例会での話はいろんな所に広がっていくのじゃないかと思ったんですから今話しますけど、坂之上の向うの方は山重(ヤマユウ)、その次を山川(ヤマコ)と言います。そして上原(カシイ)、小原(コイ)。その次が下園(シモン)です。私が居るのは小原の下になるのですが、下園(シモン)と言います。その次が大迫(カツコ)です。その下が坂之下(カシタ)です。そして馬場(ハシウエ)なんです。こんなふうになっています。

池田 オハラハーのオハラは関係があるんですか。

平田 それがそもそもなんんですけど。おはら節のオハラはですね。越中小原節、それから小原庄助さんとよぶ磐梯山の囃しことば。あの辺にオハラという言い方がたまっていますね、分布が。それで

越中小原節の系統が入って来たかと思いかけたら、前回あれは「オハラ節」じゃなくて「オワラ節」だと。オハラ節のルーツを探ると、都城の安久節(ヤッパシ)というのにたどりつく。安久節が原良に入つて来て、原良節といわれた。原良のことを鹿児島の人たちが「ハーラ」という、と。ハーラ節に接頭語の「オ」が付いて「オハラ節」になった。そのように解釈せざるを得ないようなんですね。安久節→原良節→おはら節、という流れになって来ますね。この「オハラ」は「オバル・コバル」とは系統が別になる。原良節というのがあったのですか？原良の人たちが顔を洗つたら「化粧の水」になると、おはら節の歌の文句に出ては来ますがね。

(編集時後記：本来は安久節、それを喜代三姐さんのレコードを売り出すときに「おはら節」と命名)

納 あすこは新照院になるな。あ すこはそういう飲楽街だったのでしょう。

平田 新照院が？

納 新照院ですか、飲楽街があったはずです。そのために、あすこに働いている女の人たちが化粧するので「化粧の水」になった。

池田 刑務所のあたりというんじゃないですか。

青柳 化粧の水は、あれですよ。玉里邸園の。

平田 違う説があるなあ（笑い）。御殿女中の化粧ですか？

永田 刑務所の手前に、永吉に冷泉があった所があるので。その周辺が今云われた場所だったようです。伊敷の上方から石を運び、その途中冷泉に寄つて浴びたりしたそうです。

松浪 原良というのは、何かアイヌ語で（笑い）解釈したのを見たことがあるんですけどね。水の豊富な場所を「バル」というのだ、と。

平田 それは、あれでしょう。鹿児島県で地名を最初に手がけたのは種子島の最上というお医者さんです。あれでアイヌ語説がだいぶ根着いているの

ですけども。原良は「原+ラ」ですね。始良の良もそうでしょうし、あちら、そちら、こちら、というふうに「ラ」は地名語尾とせざるを得ない。ただ、意味は原っぱの原が中心です。原良は。

下野 「ラ」というのは、「あちら・こちら」とおっしゃったですね。その辺がね、「辺」を「ニライカナイ」という。

平田 ニライカナイの場合もそうですか。

下野 知覧とか、沖縄県の「ボラン」という場合の「ン」が付いたのは、また違つて来ます。

平田 あれは、まだ判らない。

下野 室蘭にもつながつて来ます。

平田 だろうかな、それは？

下野 室蘭の「ラン」というのは、アイヌ語で低い所に下がるという意味だそうです。

平田 知覧も盆地だな。

下野 沖縄のボランもそうなんです。台湾のビランもそうです。そうすると、アイヌ語もまんざらでもないなということになる。

平田 アイヌ語説が出て来ると、アイヌ語で全部解釈しようとするから変になつてしまうのです。他にありませんか。

小原 原(ハル)とか小原(コハル)とか、地形的なことを、どこに、どんな所に付いているかということはまだ現地を確認しておりません。国分の場合は山の中で、他の所も山のところが多いのじゃないかなと思うのですけど。

平田 大原(オハラ・オハラ)よりも小原(コハル)の方が開墾し易いわけですね。

小原 そうですね。

平田 大野と小野を比べたら、小野が先に開けているし、大原(オハラ)と小原(コハラ)では小原(コハル)が歴史的には先に開墾されている、と。

下野 大原だったらですね、大原(ハル)となるわけですね。だから小原(コハル)しかなかった、本来

の言い方は。

平田 あゝ。

下野 文字化して小原(ハル)になってしまった、と。これが正解じゃないですか。先生もコパイに戻られたら（笑い）。

小原 国分でもですね、大野原(ウハラ)とか須戸原(ズハラ)とか、原のつく台地には「バイ」というのがあるのですよね。

永田 「小(オ)」という言い方は関東語から来たのですかね。小原(オハラ)とか。

下野 小川(オハラ)はそうですね。薩摩の小川は由緒ある家柄です。

平田 小川はね。

永田 原の言い方も小河原(オハラ)・小田原(オハラ)と言いますね。「オダハラ」にはなりませんね。

平田 小田原(オハラ)、菅原(オハラ)ですね。

永田 やっぱり関東方面から入つて来た原(ヲ)ですかね。

平田 そうですね。

永田 そうかも知れんですね。

平田 要するに関東から入つて来た言葉がどれかという選別の必要があるのですね。鹿児島の地名とか苗字は。

下野 恐らく、どうでしょう。隼人族が使つた言葉というのは判らんわけですけどね。「コパイ」というのは何かそれ以来の伝統をもつてゐるのではないかでしようかね。そして他所の言葉が「オバラ」

平田 はい、今後も積み重ねをいたしましょう。（笑い）

小原 今後の研究テーマですね。

永田 「オバラ」は、いつ頃のものか。

平田 「オバル」という言い方は関東にはないのですよね。小山(コヤマ・オヤマ)でしょう。向うから入つて来るのは「オヤマ」ですから。

坂本 小山田。オヤマダとコヤマダはどうですか。

永田 鹿児島市は「コヤマダ」。

坂本 鹿児島市は「コ」ですよね。「コヤマダ」。

小山田 私は今日初めて来たのですけど、後で出て来る「八幡」にちょっと興味があって、新聞をみて参加させてもらったわけですが、宇佐八幡の神官の流れを汲んでおるとのことで「オヤマダ」と言います。大分県には小山田(ヤマダ)神社というのもありますし、鹿児島に来てその三字名をちゃんと読んでもらえるわけです。まがりなりにもオヤマダとかコヤマダとか。もう向うの方では叔父の家と私の家の二軒しかない。国東半島に灘八幡宮をもって

来て、八幡を担いで回ったせいかと思うんですね。蒲生の小山田(ヤマダ)ですか。蒲生八幡とくっ付いてあるらしいのですけれども、まぁ「オヤマダ」という。しかし鹿児島では加治木も「コヤマダ」でしょう。伊敷も「コヤマダ」ですね。姓では蒲生に「オヤマダ」というのがありますね。種子島にもあります。どっちがどうなのか。今、コバル・オバルを聞きながら考えましたが(笑い)。まぁ、八幡とつながっているというのは何かありそうな気がするんです。

平田 ああそうですか。ちょっと休みましょう。

### 八幡の分布について

後半の八幡の分布について話をします。これは平成7年度の『歴史の道調査報告書』に書いたレポートです。古代を担当するもんですからこんな作業をやってみたのです。こういう表が入っていると思います。川内地区の「主要道路模式図」というもの。これは川内地方の大字をとりあげてどのようにつながっているのかと結んでみました。四角で囲ってあるのが、いわゆる外城：麓が置かれている所です。これを見ますと、薩摩国府の周辺に高城・水引・中郷・高江・隈之城・百次・山田・平佐とかたまって8ヶ所、東郷まで含めたら9ヶ所になります。百二外城、実際は百十三ですけど、ごく狭い範囲に外城がこれだけかたまっているということはこの地域が重要であったということを示すわけで、薩摩国の旧国府であった所にこれだけの麓が置かれていることが判ります。

こういう図を作りながら、こんなことを考えたのです。“すべての道はローマに通ずる”と言っています。これを日本にやって来ると、国単位では“すべての道は国府に通ずる”と考えてよい。郡でみれば“すべての道は郡家に通ずる”と。そうしたらどこ

に道が集っているかを見るとよいことになる。川内の場合は、大小路に集まってるわけです。大小路に薩摩国府があったのです。それを取り巻くように麓も配置されているわけです。中郷・高城・水引と、ぐるーっと取り巻いている。それから今一つは隈之城に集っています。隈之城に何があったかというと、薩摩郡家があった。これは川内実業高校：れいめい高校の所ですが、あの裏側にバイパスが通る時に調査して、西ノ平遺跡・成岡遺跡というのが出て来まして、薩摩郡家跡が判明した。

このように大字単位に配置図を描いて、そして道路を結んでいき、どこに集中するかというのを探すことが、郡家探しの捷径になると思いました。それぞれの郡郷について検討を進めていますが、すべてを出せないので薩摩郡の例だけを出しました。

次に、大字単位で「坂」という地名を集めてみました。坂之上、坂之下、坂口、坂元。大字単位で一つ・二つぐらい出て来るのが普通なんです。ところが中心地になる所は「坂」という地名が五つも六つも出て来ます。「坂」という地名を大字単位で整理して「坂」地名が集中する所は気を付けるべき

だと言える。

それともう一つ、城之下とか城〇〇、〇〇城などのいわゆるcastle、「城」の付く地名がありますがそれもこういう中心地に見られます。したがって、「城」という地名を拾い出す作業も、古代・中世の中心地を探る一つの手掛かりになります。そうした作業の上で見当が付くと、現地に乗り込んで行っていろいろ情報をつかまえたらいいということです。

鹿児島県には薩摩国が十三郡、大隅国に八つの郡があるわけですが、今判っているのは薩摩郡家と、それから阿多小学校の裏から「阿多」という文字を書いた土師器の壺が3点出ています。だから阿多郡家が阿多小学校の付近であるということは考古学的にねらいがついているわけです。それから鹿児島市郡元一帯に鹿児島郡家と橋牟礼川遺跡一帯の揖宿郡家が、遺物の豊富さから考えられています。それともう一つ、私がねらいを付けているのが帖佐小学校付近の桑原郡家。これは他にも理由が付け加わりますから、その時に説明します。

こういう見当を付けて課題の住吉神の分布を探す作業に入ったのですが、わき道にそれてしましました。今度はこちらの1表と2表になります。『三国名勝団会』を見ておりますと、各郷単位に、各郷というものは外城単位にもなりますが、外城単位にまず地形・川の流れが書いてあって、その次に神社を並べて書いてあります。その神社のトップに、必ず総廟というのが書かれます。これは宗廟、総社、鎮守、総鎮守、総鎮など、いろいろな言い方がありますが、『三国名勝団会』の各郷の最初に必ずと言ってよいほど、その郷の最も重要な神社が書いてあります。それを拾いあげたのがこの表です。

薩摩国から見ますと出水郡から高城郡、薩摩郡、伊佐郡、甑島郡というふうに並べてあります。この総廟の神様を眺めると、在来神、例えば加治久利神社とか紫尾神社など土地の神様と考えられるものと

諏訪神社、八幡神社、その他妙見、稻荷、熊野などの外来神との二通りに分けられます。

大半の郷は在来の神様：その土地の神様を総廟としているわけです。たとえば出水の加治久利神社、高尾野の紫尾神社ですね。高城郡では水引の八幡新田宮。新田神社は新多郷の神様ですね。伊佐郡の佐志は阿志賀大明神、山崎は飯富大明神、甑島は甑大明神というふうに、在来の神様、いわゆる産土神が最も大事な神様になっています。

ところが総計をあげると、群を抜くものに諏訪神社と八幡神社があがって来るわけです。諏訪信仰というのは島津忠久の前任地が諏訪の地頭だったので薩摩国の地頭職に任せられた時に、こちらの守護神として持ち込んで来ますから、諏訪神社がある所は島津氏に征服されてからそれを総社・守護神としたと解釈できます。これは島津氏に征服されて本来の総廟と違って来ているわけです。

中間的な存在として、八幡その他があります。その他は妙見であったり、稻荷であったり、熊野神社や日吉神社であったりするのですが、これは諏訪よりも古い時期に入って来た在来神とは違ったタイプのものになります。

ところが八幡だけは特別に多いのです。総数は、諏訪が16、八幡が18になると思います。八幡の場合特色的なのは口之島とか臥蛇島などを含む七島の守護神がほとんど八幡になっています。これはわりと古い時期のもので、八幡の性格を意味付けるものになります。それで八幡神がどうやって入って来るのかというと、八幡信仰が興るのは、国分八幡というものが、国分寺の鎮守神として八幡がおかれるのが奈良末から平安の初めです。国分寺にならって八幡が配置されていくわけですから、八幡神を勧請した所というのは中央政府の機関があった所と見当を付けていいことになります。

薩摩国府には新田八幡があるし、大隅国府には

大隅正八幡が付いています。蒲生駅には蒲生八幡が付いています。そのように見当を付けると、八幡神は郡家を探す一つの便法となるのではないか。

以前、桑原郡家は帖佐だと、帖佐の「帖」は国庁の「庁」で、「佐」は地名語尾だという説を出しました。新聞に載せましたが、400字×4枚という限界もあり詳しくは書けなかったこともあります。まず一つ、建久図田帳にみえる田数です。建久図田帳に田園の面積が書かれていますが、あの辺では帖佐が群を抜いているのです。それが一つです。八幡の視点からいうと、帖佐城のうしろの山にある神社が「新正八幡」という神社です。正八幡というのは鹿児島正八幡：大隅正八幡のことですから、一時期国府を移した時に「新正八幡」というのをもって来たなと考えられるわけです。桑原郡家は八幡という視点からも有力になって来たなと思います。

三島・七島の八幡は、結局、河辺郡の支配下に入りますから、八幡が信仰された頃にそれぞれの守護神として勧請されたものと思われます。

八幡神の分布ということについては、そういう視点があるということです。八幡神社もしくは総廟を中心にして、その側とは言いませんが、2～3kmの範囲であれば、さっき述べた道路の集合点と見比べながら検討すると、郡家を探し易くなるのではないか、と考えるわけです。

あと10分ぐらいありますので、質問やら批判を受けたいと思います。

#### (質疑応答)

下野 七島の八幡について。七島には全部あります。口之島、中之島、臥蛇島、平島、諏訪之瀬島、悪石島、宝島。それに小宝島まであります。臥蛇はもっとも無人島ですが。それから、種子島もあります。二ヶ所あります。屋久島に三ヶ所。一湊、麦生それから平内。種子島は西之表と、これはよく知られていますが、南種子ですね。

平田 ちょっと待って下さい。種子島は西之表と、下野 それと南種子の下中ですね。

平田 そこに八幡があるのですね。

下野 えゝ、八幡がある。屋久島は一湊と麦生、それから平内。

平田 今ご指摘がありましたが、これは『三国名勝図会』に総社・総廟として扱われている神社だけを「表」にしてありますから、その他にも当然八幡はあると思います。八幡神の中で、その郷の総廟として記載のあるのが、この表の○印です。そういう意味です。だから他にも八幡神が沢山あるのは当然です。

下野 トカラに各島ごとに八幡が何故あるか。しかも日本の八幡信仰の南限である、と。そして種子・屋久にもあるわけですから、他と比べて熊毛諸島には多いということですね。従いまして、何故かということです。それで考えるんですが、トカラでは郡司と言っていたわけです。七島の支配者を古代的な名前で。同時に内侍舞(ナシマ)というのがあります。今でも鹿児島神宮の巫女を内侍と言いますが、二人おります。いや、四人ですかね。近世には薩摩藩では主な神社にはほとんど内侍があって、内侍舞をしております。これは宮司に次ぐ高い位です。宮司の上に書いてあることもあります。女性の神官ですから。これが現在はトカラに残っているわけです。各島に内侍という神役があるわけです。そしてお祭りには太夫と内侍が一緒にやる。昔は神がかりをしようとしたのです。貴重な存在ですが、何故だか鹿児島県にだけ残っているようです。これはどうも歟島と関係があるようです。歟島には今も内侍がいるわけですが、内侍舞は絶えてしまった、と。今は鹿児島県にしかない。ある所は歟島の里村と山川町成川、それとトカラ列島。これだけです。非常に貴重なものです。

歟島は平家の氏神です。11世紀の頃に鹿児島神宮

の宮司が内侍を奥さんにもらって来ました。これが歟島とのつながりなんです。それから鹿児島神宮に右へならえて内侍が県下にずっと普及したとみる方がみやすいのです。鹿児島神宮を起点にするものは、いろいろあるのですね。棒踊りもそうなんです。そこから始まりなんです。

それからもう一つ、トカラに何故八幡があるのかということに関して、祭祀組織が考えられます。デークジ、シェークジということばがあるのです。これは二通りの解釈があるのです。デークジはお宮なんかを作るのですから大工司と書くのか、シェークジは細工司と書くのかという説と、もう一つは大宮司・小宮司。これは大きなお宮にはおったのですから、大宮司・小宮司の転異ではなかろうかという説があります。いずれにしても非常に古い祭祀役としてこれが生きているということは、先の郡司・内侍舞すべてを総合すると、どうも中世的であるよりも古代的な名称なんですね。中世以降の川辺平氏の流れとして入ったことは当然考えられますが、肝腎な川辺には八幡はないのです。川辺平氏が自分の所にない八幡を領地に広げるということは考えられないのです。それからすると、これは別系統ということになる。川辺氏よりも以前から八幡が入ったのではなかろうか。さっき言った歟島系が鹿児島神宮系の八幡としてこれが入って行ったのではなかろうか。それが何故入ったかというと、これもいろいろ問題があります。そういう系統が一つ考えられるのではなかろうか。なにしろ日本の八幡信仰の南限であり、しかもどの島にもあるわけです。面白い発展です。

平田 ありがとうございました。他に何か。

木場 川内の模式図ですが、いわゆる九州街道。これは隈之城をかすめて宮崎の方を通っているのです。東手の方を。

平田 あゝ、東手の宮崎を通っているのですね。

木場 何故かというのをよく考えてみると、薩摩郡家は中福良にあるのですが、それ以前の郡家が此処にあったのではなかろうか、と思うのです。「古郡」と呼ばれているのですよ。此処は。

平田 古郡(みどり)？

木場 えゝ、天保八年の絵図面までは「古郡」と書いてある。だからそういう主要街道も此処を通って行ったのではなかろうか。九州街道も此処を通っている。東手の方を回って向田に行っている。向田も、もちろん、これは東手村のうちです。東手の方が主役ではないか。

平田 それで。

木場 隅之城麓は、ちょこっとかすめている。

平田 これは模式図として、そう描いたわけですから。今話題になりましたが、隈之城一百次一市比野と出る経路、そして蒲生につながる道。それが薩摩国・大隅国を結ぶ駅路になって来るはずですね。

えーと、六月例会で下野先生、トカラか内侍舞か八幡の話をして頂けませんか。

下野 地名とは。

平田 関係なくて結構ですから。

下野 何月？

平田 六月。

下野 じゃー、何かさして頂きましょう。

平田 お願ひします。

下野 判りました。

平田 九月、他にご希望はないですか。

下野 六月何日ですか。

平田 第一日曜日になります。六月は今日の話の続きを下野先生にお願いします。その次は米原先生に米(ミ)の付く地名(笑い)。

米原 米(ミ+コ)でしたか。

平田 六月二日に此処を予約します。九月は米原先生に期待しつきましょう。じゃー、ありがとうございました。

## 小原の地名

鹿児島県 平成8. 3. 3

番号	市町村名	大字	小字とよみ	備考
	鹿児島市	田上 宇宿町	小原(オバラ) 小原(オバラ) 下小原(シモオバラ) 上ノ小原(カミノオバラ)	
		五ヶ別府町	小原(オハラ)	通称
		中山 上福元 下福元 小原町	小原(コバラ) 小原(オバラ) 上小原(オバラ)	通称 (オバラチョウ)
		吉田町	本名	小原(コバイ)
		桜島町	—	—
		出水市	武元	小原山(オバルヤマ) 小原(オバル) 小原田(オバルダ)
		下大川内	小原(オバル)	
		阿久根市	折口 多田	小原(コハラ) 小原(コハラ)
		野田町	—	—
		高尾野町	柴引	鈴小原(スズコハラ)

番号	市町村名	大字	小字とよみ	備考
	川内市	川内市	大小路	
		田海	下小原(シモコバル) 下小原(シモコバル) 中小原(ナカコバル) 上小原(カミコバル) 西小原(ニシコバル)	
		山田	小原(オバル)	
		中村	尾原(オバル)	
		平佐	小原(オバル)	
		東手 高江	小原(コバル) 小春(コバル) 小原迫(オバルサコ) 小原(オバル) 向小原(ムコウコバル)(ムコウコバイ) — バウチバウ	
		宮之城町	下尾原(シモオバル) 小原( )	
		東郷町	久富木	小原(コバラ)
		樋脇町	山崎	小原(コバル)
		宍野	船木	小原(コバル)
	薩摩町	宍野	小原(コバル)	
		倉野	小原(コバイ) 西小原(ニシコバイ)	
		塔之原	東小原(ヒガシコバイ)	
		市比野	小原(コバイ) 上小原(カミコバラ)	
		鶴田町	小原(コバラ)	
		—	—	
		薩摩町	中津川	小原(オバラ)
		求名	小原(コハラ)	
		入来町	浦之名	小原(オバラ)
		副田	小原(オバラ)	
	祁答院町	上手	小原(オバイ)	
		里村	—	
		上畠村	—	
		下畠村	—	

## 小原の地名

鹿児島県 平成8. 3. 3

番号	市町村名	大字	小字とよみ	備考
	串木野市	冠岳 上名 下名	小原ノ前(コバルノマエ) 小原(コバル) 小原田(コバルダ)	
	郡山町	東俣 川田	小原(コバル) 小原(コバル)	
	松元町	春山 上谷口	小原迫(コバイザコ) 小原(コバイ) 小原(コバイ)	
	吹上町	中之里 今田 小野 永吉 田尻	中小原(ナカコバラ) 小中原(コナカバラ) 小原(オバラ) 下小原(シモオバラ) 小原(オバラ) 小原(オバラ) 小原(コバラ)	
	日吉町	吉利 神ノ川 山田 日置	小原(オバラ) 小原(オバラ) 小原(オバラ) 小原(オバラ)	
	東市来町	長里 伊作田 神ノ川 湯田 美山 養母	小原(オバラ) 上小原(カミコハラ) 下小原(シモコハラ) 上小原平(カミコハラビラ) 下小原平(シモコハラビラ) 小原ノ下(オバラノシタ) 小原(コバイ) 上小原(カミコハラ) 下小原(シモコハラ) 小原(コバイ) 上小原(カンコバイ)	
	市来町	湊町 川上	小原(コバイ) (コバラ) 小原平(コバイビラ) (コバラビラ) 小原(コバラ)	
	伊集院町	下神殿 下谷口	小原(オバラ) 小原(コバラ)	
	金峰町	-	-	

番号	市町村名	大字	小字とよみ	備考
	加世田市	武田	小原ノ原(コバラノハラ)	
		内山田	下小原(コバル) ヌモ	
		津貫	小原(オバラ)	
			小原ケ谷(コハルケタニ)	
			小ハル頭(コハル)	
			小原(コバル)	
	枕崎市	東鹿籠	小原(オバラ)	
	川辺町	上山田	小原ノ上(コバルノウエ)	
		清水	小原(コバル)	
			小原(コバル)	
		神殿	下小原(シモコバル)	
			小原比良(コバルヒラ)	
			下小原(シモコバル)	
			上小原(カミココバル)	
		野間	小原田( )	
			小原( )	
	知覧町	永里	小原(ヨバサ) (オバツ)	
	大浦町	大浦	小原下(コバルシタ)	
			小原(コバル)	
			小原迫(コバルサコ)	
	笠沙町	-	-	
	坊津町	-	-	
	指宿市	-	-	
	喜入町	中名 前之浜	小原(コバル)	
			小原(コバル)	
			小原(コバルノハナ)	
	山川町	-	-	
	開聞町	十町	小原(コハラ)	
	額町	-	-	

## 小原の地名

鹿児島県 平成8.3.3

番号	市町村名	大字	小字とよみ	備考
	国分市	重久 下井	小原(コバイ) 小原(コバイ)	
	隼人町	松永	小原平(コバラヒラ)	
	福山町	-	-	
	霧島町	-	-	
	牧園町	三体堂 上中津川 持松 "	上小原(カミコバル) 小原(コバル) 小原迫(コバル) 小原山(コバルヤマ)	
	横川町	下ノ	小原(コバイ)	
	溝辺町	麓	小原(コバル)	
	加治木町	-	-	
	始良町	木津志 寺師 鍋倉	小原ノ下(オバラノシタ) 小原田(オハラダ) 小原町(オバルマチ)	
	蒲生町	-	-	
	栗野町	北方	小原(コハラ)	
	吉松町	川添 川西	小原(コハラ) 小原(コバイ)	
	大口市	平出水	小原野(オバラノ)	
	菱刈町	川北	小原(コバル)	
			地元 (コバル)	

番号	市町村名	大字	小字とよみ	備考
	財部町	-	-	
	大隅町	-	-	
	末吉町	-	-	
	輝北町	-	-	
	松山町	-	-	
	志布志町	-	-	
	有明町	野井倉	小原(オバル)	
	大崎町	井俣	小原田(コハラダ)	
	鹿屋市	下祓川町 永小原	小原 小原ノ上 小原新田 -	(ナガオバル)
	垂水市	-	-	
	高山町	-	-	
	吾平町	下名 上名	小原田(コハラダ) 下小原(シモコウバル)	
	串良町	上小原 下小原	- (カソコバイ) - (シモコバイ)	(おばる) (おばる)
	東串良町	-	-	
	根占町	-	-	
	大根占町	-	-	
	田代町	-	-	
	内之浦町	-	-	
	佐多町	-	-	
	三島村	-	-	
	十島村	-	-	

## 小原の地名

鹿児島県 平成8. 3. 3

番号	市町村名	大字	小字とよみ	備考
	西之表市	安城	小原(オバラ)	通称
	中種子町	-	-	
	南種子町	-	-	
	上屋久町	-	-	
	屋久町	-	-	
	名瀬市	-	-	
	伊仙町	小島 崎原	里小原 小原 小原 小原	
	徳之島町	-	-	
	知名町	-	-	
	龍郷町	-	-	
	瀬戸内町	-	-	
	住用村	-	-	
	喜界町	-	-	
	笠利町	-	-	
	宇検村	-	-	
	天城町	-	-	
	大和村	-	-	
	与論町	-	-	
	和泊町	-	-	

## 鹿児島県内市町村別・よみ別小原の地名数一覧

No. 1

平成8. 3. 3

番号	よみ 市 町 村 名	(オ)のよみ					(コ)のよみ								よみ不明	備考	
		A オバイ	B オハラ	C オバラ	D オバル	E オバメ	F コバラ	G コハラ	H コハル	I コバイ	J コバリ	K コバル	L コバン	M コワラ	N コウバル		
	鹿児島市	-	1	7	-	-	1	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-
	吉田町	-	-	-	-	-	-	-	-	1	-	-	-	-	-	-	-
	桜島町	-	-	-	4	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-
	出水市	-	-	-	-	-	2	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-
	阿久根市	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-
	野田町	-	-	-	-	-	-	1	-	-	-	-	-	-	-	-	-
	高尾野町	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	1	1	-	-
	長島町	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-
	東町	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	4	-	-	-	-
	川内市	-	-	-	6	-	-	1	-	-	-	-	2	-	-	-	1
	宮之城町	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	1	-	-	-	-
	東郷町	-	-	-	-	-	-	2	-	-	4	-	-	-	-	-	-
	樋脇町	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-
	鶴田町	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-
	薩摩町	-	-	1	-	-	-	1	-	-	-	-	-	-	-	-	-
	入来町	-	-	2	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-
	祇園院町	1	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-
	里村	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-
	上郡村	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-
	下郡村	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	3	-	-	-	-
	串木野市	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	2	-	-	-	-	-
	郡山町	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-
	松元町	-	-	-	-	-	-	2	-	-	3	-	-	-	-	-	-
	吹上町	-	-	4	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-
	日吉町	-	-	4	-	-	-	-	6	-	3	-	-	-	-	-	-
	東市来町	-	-	2	-	-	-	1	-	-	-	-	-	-	-	-	-
	伊集院町	-	-	1	-	-	-	1	-	-	-	-	-	-	-	-	-
	金峰町	-	-	-	-	-	-	1	-	2	-	-	2	-	-	-	-
	加世田市	-	-	1	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-
	枕崎市	-	-	1	-	-	-	1	-	-	-	-	-	-	-	-	1
	川辺町	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	7	-	-	-	-
	知覧町	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	1	-	3	-	-	-
	大浦町	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-
	笠沙町	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-
	坊津町	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-
	指宿市	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	3	-	-	-	-
	喜入町	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-
	山側町	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-
	開聞町	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-
	頴町	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-
	市来町	-	-	-	-	-	-	1	-	-	2	-	-	-	-	-	-

## 鹿児島県内市町村別・よみ別小原の地名数一覧

No. - 2

平成8. 3. 3

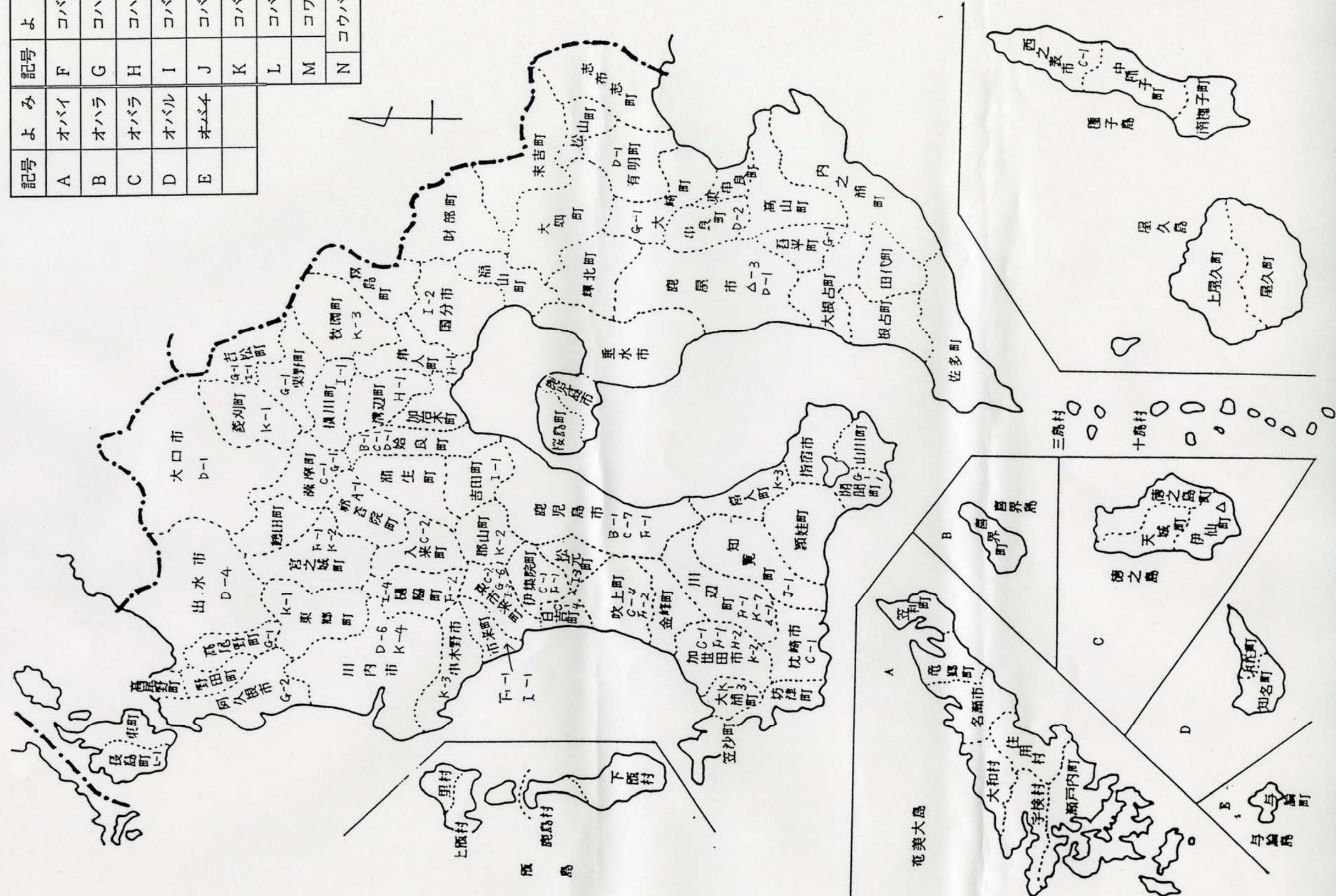
## 鹿児島県内市町村別・よみ別小原の地名数一覧

No. 3

平成8. 3. 3

## 鹿児島県内における小原の地名分布図

記号	よみ	記号	よみ
A	オハヤ	F	コバラ
B	オハラ	G	コハラ
C	オバラ	H	コハル
D	オバル	I	コバイ
E	オバチ	J	コバリ
		K	コバル
		L	コバン
		M	コワラ
		N	コウバル



小原 おばら 島津貞久の子頼久に始まる川上氏の

七代公久の次男參河久昭は小原氏を称した。久昭—平

左衛門久光—兵右衛門久及—清之丞久康—清之丞親往

一平左衛門親苗—曾兵衛親繁と続く。久光の次男長左

衛門久雄は分家し、久雄—平右衛門久利—三右衛門親

愛一八左衛門親英と続く。久利の次男五右衛門親斯

久及の次男景左衛門久栄も分家した(小原參河久昭一

流系図/諸氏系譜二)。

■日置郡松元町内田に、門名に由来する小原氏がある。松元町内に三〇軒余の小原家があり、そのうち内田には二〇軒の小原家がある。内田の小原氏については、「伊集院由緒記」に、上谷口村山内の小原権現の格護人に小原門の誓助、上谷口小原門山内の阿弥陀像・薬師像・觀音像を祀る阿弥陀堂の格護人に小原門の名頭善助の名がある。小原権現・阿弥陀堂とともに、昔から小原門の人々によって信仰されてきた。分家の小原清吉家には、昭和一七年ごろに権現社が建立され、阿弥陀如来像・薬師像・觀音像を祀っている。祭りは、かつて毎年六月一五日に甘酒を供え、門の人々が太鼓踊りを奉納したという。(松元町郷土史・町内には内田のほか、上谷口にも小原家がある。

■現在、県内では鹿児島市に多く、次いで川内市・鹿屋市・串木野市・出水市・松元町・郡山町などに多い。

鹿児島市・出水市・松元町・郡山町などに多

## 第五節 小原権現

ここから直線で一・五キロ、上坊石塔群に達する。

その二〇〇㍍手前に小原権現があり、そこにまたこの字

型に二十二個の五輪塔、そして税所氏の宝塔がある。

昭和三十八年に竹下隆二先生が書かれた「松元町郷土史第一輯」に、「これは小原清吉氏が昭和十七年、ここを開拓して社殿を新築した当時、この付近一帯に散在して

いた墓石塔をこの山腹の境内に運びあげて組立てたものであります。」と。そのとき小原清吉氏自身から聞かれ

たことが書いてあって、さらに「この墓石を境内下の田や川の中から運びあげる時、まことに軽く工事も早く終わつたことは不思議であつたといつています。」とある。この古石塔群は上坊のものと一緒であろう。

四郎園・窪田・池田・小原権現・上坊石塔群地図



松元町郷土史

たけもと 武本 〒899-02 [世帯] 2,126 [人口] 6,355 ▶市の南西部、東は大字下大川内、西は出水郡高尾野町、南は薩摩郡宮之城町に接する。北部は、旧大字武本から分離独立した本町・堀町および旧大字の一部を町域とする大野原町・向江町・中央町と当地域が入り組んでおり、大字上知識とも接する。その北西部台地中央を国鉄鹿児島本線と県道井出水線がほぼ東西に並走し、国鉄西出水駅があり、付近には西町住宅・花立住宅・鶴見団地・上屋住宅・八幡住宅があり人口の増加がみられる。北西部を流れる平良川右岸の小原付近と左岸台地縁辺、台地上に聚落が散在する。平良川以北は水田・畑地が広く、以南は畑と山林が多い。大字下大川内を流れる高川に貯水ダムが完成し、山麓を迂回して平良川以北の大野原洪積台地の畠地灌水が行われて農業の近代化が進んでいる。西出水台地付近に学校が多く、県立出水高校・県立出水工業高校・出水学園高校・西出水小学校があり、また南西部山中の丸塚に丸塚小学校がある。ほかに西出水には西出水幼稚園・紫翠幼稚園・西出水保育園、下中にわかたけ保育園がある。神社には上宮神社(紫尾山頂)・福荷神社(福荷山)・南方神社(上屋)・高千穂神社(小原)がある。また、平良川以南小原地区には市水道水源地・小原配水池等があり、景勝地小原山には市立青年の家と周辺に小原山遊園地がある。堀町隣接の西口に薩摩家島津氏墓所と竜光寺跡がある。

出水市

大部分は笠野原台地の南部で畑作が多いが、南端および東部は肝属川、甫木川沿いの沖積地で広大な水田地帯をなし、当町内でも水田率の高い地域。水田の多いことが畑作を選らせる原因になっており、台地の畑作帯はまだ畠地灌漑が行われていないため、施設園芸もなく、また畜産も導入されていない。当地域の施設園芸は最近低地の水田地帯で行われるようになつた。しかし低地も排水路がまだ整備されていないため、集団施設園芸は困難な状況にある。低地は水が豊富なため、養蜂業が盛んで6つの養蜂場があり、串良養蜂センターがある。養蜂センターでは蜜の加工を行い、製品・半製品にして出荷する。地内に串良農協支所・ふたば保育園・生コン工場や万八千神社がある。

おぼる 小原・串良町  
肝属川支流木川右岸から中山川流域にかけて位置する。  
〔中世〕小原別府 鎌倉期～室町期に見える別符名、大隅国のうち、小原別府とも書き、小原荘とも称した。建仁3年11月10日の島津荘政所下文に「小原別府弁済使得分米同可合運上事」とあるのが初見。島津荘の前地頭島津忠久の押領した弁済使職の1つとして見え、義広の沙汰として弁済使職の得分米を京上すべきことを命じられている(栗野土佐守氏文書 旧記録)。翌建仁4年正月18日にも同内容の島津荘政所下文が出されている(同前)。南北朝期には、建武2年10月7日の太政官符に中宮職の大隅国寄郡内の1つとして見え、島津貞久が預所に捕せられている(藤野氏文書 旧記録)。また、正平4年3月10日の檢井頼仲寄進状では当別符の「半分地頭職」が造営料所として、観応2年11月19日の足利直義寄進状では「串良院内小原別府」が天下安全祈願料所として、大慈寺にそれぞれ寄進されている(志布志大慈寺文書 県史料拾遺)。当別符には蛤良荘の在地領主得丸氏も関係し、正平14年11月15日には「大隅国小原別府西方地頭分柏原東方〈原田將監跡〉」が得丸左近将監に(氏久公御譜/旧記録)、応永19年12月5日には「大隅国小原村内十町」が得丸氏に宛行われている(久豊公御譜/旧記録)。室町期に小原村と称されていたことがわかる。串良町・下小原・岡崎の付近に比定される。

〔近世〕小原村 江戸期の村名。大隅国肝属郡串良郷のうち。「元禄郷帳」「天保郷帳」「三国名勝団会」では小原村として見え、「薩藩政要録」「旧高旧領」では上小原村・下小原村に分かれて見える。村高は「天保郷帳」によれば2,390石余。

## 日本大絵図 広見鳥居

串良町

かみおぼる 上小原 〒893-16 [世帯] 877 [人口] 2,472 ▶町の南西部。西・南は高山町、北は大字有里、東は大字有里・岡崎・下小原に接する。南端を肝属川が東流し、西境付近を中山川が南流する。北部を国道220号が東西に通り、西境から約5km西へ進めば鹿屋市市街地に達する。大部分は笠野原台地の南部に位置する畑作地帯で、台地縁辺の中山川および肝属川左岸地域の沖積低地は水田地帯。從来、大字下小原同様水田中心で畑作にはあまり関心が示されなかつた。農道・排水路などの整備も遅れ、畠地灌漑もなく施設園芸も導入されていない。しかし最近畑作に対する地元の関心が高まりつつあり、農道などもかなり整備してきた。低地は古来稲作に適し当町の重要な米産地であるが、最近は豊富な水を利用して養蜂業が盛んに行われ、地内に養蜂場が11もある。上小原小学校・上小原中学校・中山簡易郵便局・串良農協支所・町上小原保育所・上小原保育所があり、また白山神社やシャツの縫製工場がある。

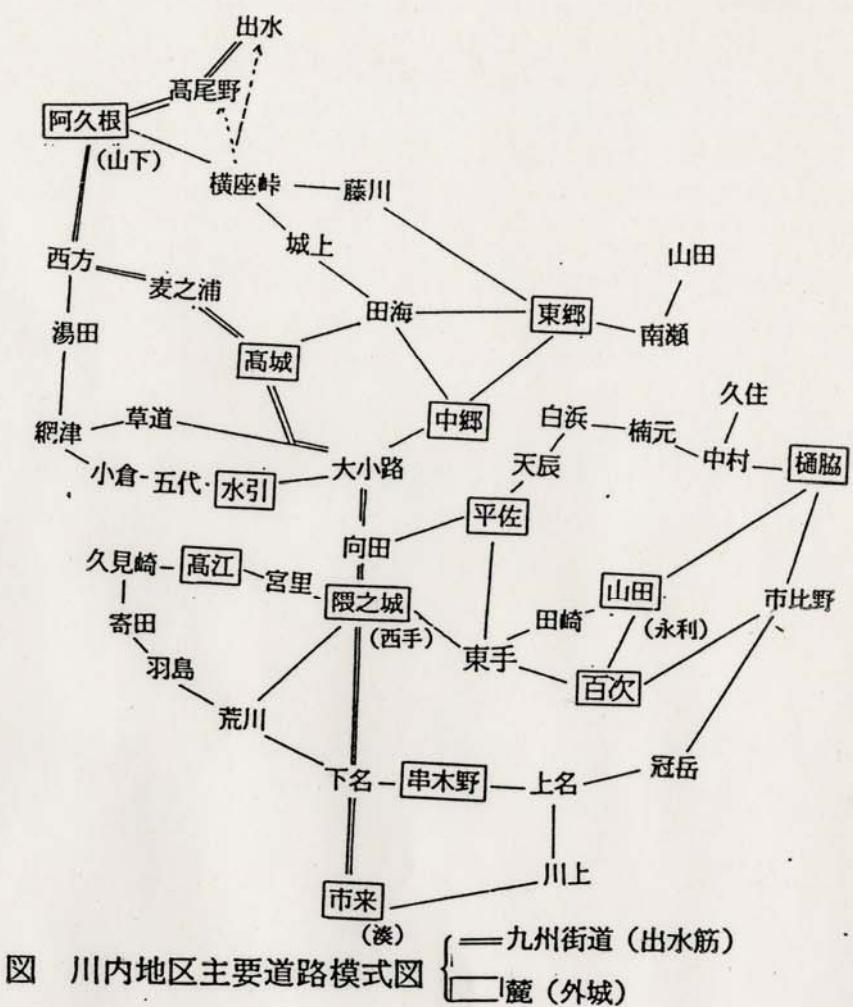
しもおぼる 下小原 〒893-16 [世帯] 534 [人口] 1,444 ▶町の南端、南は高山町、東は大字岡崎、西は大字上小原に接し、南境の一部を肝属川が東流する。南西から北東に国鉄大隅線が通り、下小原駅がある。

## 小原の地名

宮崎県 平成8.3.3

番号	市町村名	大字	小字とよみ	備考
	えびの市	原田 今西 島内 西川北	小原(コバル) 小原前(コバルマエ) 小原下(コバルシタ) 小原北(コバルキタ) 小原(コバル) 小原西(コバル) 小原ノ東(コバルノヒガシ) 西小原(ニシコバル)	
	小林市	東方	小原	
	野尻町	—	—	
	高原町	蒲牟田	小手原(コデバル)	
	須木村	—	—	
	山田町	—	—	
	高崎町	—	—	
	高城町	—	—	
	山之口町	—	—	
	三股町	—	—	
	都城市	—	—	
	高岡町	—	—	
	国富町	—	—	
	綾町	—	—	
	日南市	楠原	小原(コハル)	
	串間市	—	—	
	北郷町	—	—	
	南郷町	—	—	
	宮崎市	大塚町 瓜生野	小原田(オハラダ) 小原山(オバルヤマ)	
	田野町	—	—	

番号	市町村名	大字	小字とよみ	備考
	清武町	今泉	小原	
	佐土原町	東上那可	小原	
	西都市	平郷 中尾	小原 小原	
	高鍋町	—	—	
	新富町	新田	尾小原	
	西米良村	越野尾	小春(コバル)	
	木城町	—	—	
	川南町	—	—	
	都農町	—	—	
	日向市	—	—	
	延岡市	塩見	小原	
	門川町	—	—	
	東郷町	—	—	
	南郷村	—	—	
	西郷村	—	—	
	北郷村	—	—	
	北方町	—	—	
	北川町	—	—	
	北浦町	—	—	
	諸塙村	—	—	
	椎葉村	—	—	
	高千穂町	—	—	
	日之影町	分城 見立	小原(コバル) 上小原(カミコバル) —	
	五ヶ瀬町	—	—	



第1図 川内地区主要道路模式図

(淡) 麓(外城)

第1表 薩摩国各郷の総廟  
(△印は古い時期の総廟)

郡	郷	移入神			在来神
		諏訪	八幡	その他	
出水郡	長島郷	○	○		(一國総廟) 加茂久利大明神 紫尾權現社
	出水郷				
	高尾野郷				
	野田郷				
	阿久根郷			(開聞)	
高城郡	東郷	○			
	中郷	○	○		
	水引郷				(八幡新田宮 新田神社は在来神)
	高城郷				
薩摩郡	百次郷	○			
	隈之城郷	○			
	高江佐郷	○			
	平山郷				
	田舎郷				
	入来郷				
伊佐郡	大口郷	○			
	山野郷				
	羽月郷				
	鶴田郷	○			
	佐志郷				
	宮之城郷				
	黒木崎郷				
	山村郷				
	蘭牟田郷				
甑島郡	甑島郷				
三島島	硫黄島郷				
	竹島郷				
	黒島郷				

郡	郷	移入神			在来神
		諏訪	八幡	その他	
串木野市	日来郡		△	稻荷	猪口田大明神 (一之宮)
置伊集院	山日郡	○	△		(刀立大明神)
吉永郡	利吉		○	御靈	久多島大明神
伊作田布施	作郡		○		勝手神社
阿多郡	多			日吉	
加世田河	山田鹿籠			王子	廣屋大明神
辺坊	泊久志				九玉大明神 (一之宮)
郡	秋目川				九玉大明神 飯倉大明神 (一之宮)
揖宿	桂山川			熊野	開聞神社
今和泉郡					中宮大明神
指宿					九社大明神
給黎郡	入知				三百余所大明神
	谷				中宮大明神
鹿児島郡	吉田鹿児島城下	○	△	王子	伊佐智佐權現
七	口之島中之島		○		(一之宮)
	臥蛇島		○		地主大明神
	平島		○		
	諏訪之瀬島				
	島惡石島				
	宝島				

第2表 大隅国各郷の総廟

郡	郷	移入神			在来神
		諏訪	八幡	その他	
肝属	百引				利大明神
	高隈				中津宮(一之宮)
	新花				神貫大明神
	鹿屋				当座大明神
	串良				七須長田貫大明神
	高良				一之宮大明神
	始良				四十九所神社
	大始				岩戸大明神
	内良				高屋大明神
奴隸	屋久島				益教神社
熊毛	種子島				浦田大明神
日向	吉田馬闐				天神
	加久藤				天神
	飯野				二宮大明神
	小林				白鳥權現社
	須尻				鎮守六所權現
	綾岡				大年一之宮神社
	高倉				大王權現社
	移高				三宮大明神
	佐原				栗野大明神
	崎城				園師大明神
	口城				狹野神社
	都山				宇賀大明神
	松山				東蕃島神社
	大志				走湯權現社
	布志				神柱大明神
					妻万五社大明神
					山宮大明神(一之宮)